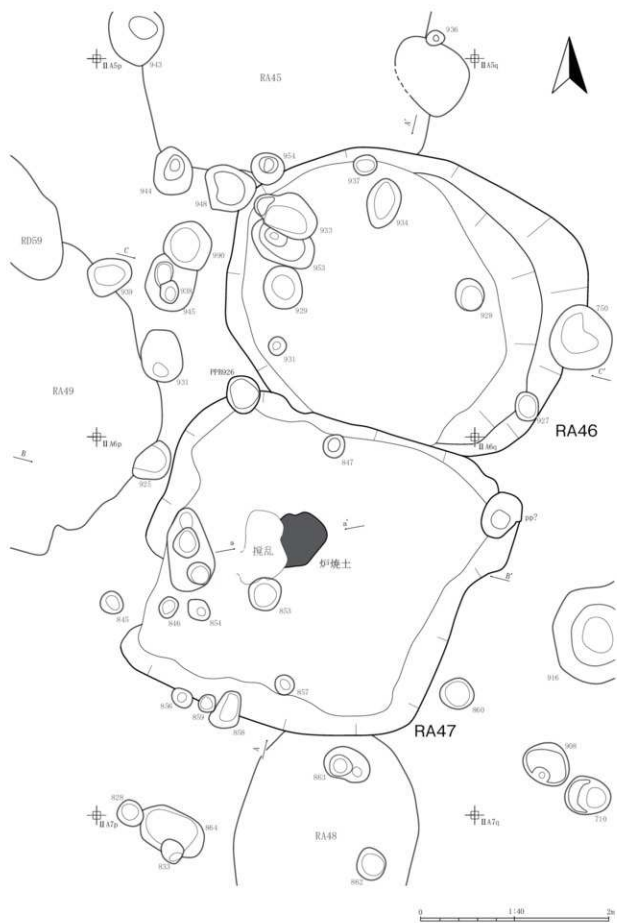
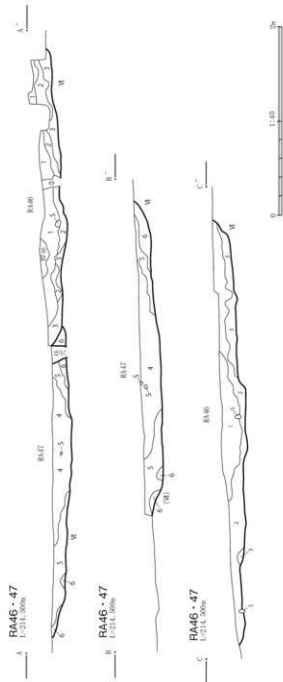


第84図 RA45



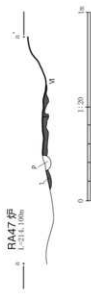
第85図 RA46・47



RA46・47

1. 0.15Cの黒褐色土。シルト、粘性粘土。緑まじりの中粒V質礫層で15% (V質)。粘性粘土は、0.5?~3.0mの厚層で2% (V質層上部)。
2. 0.05B4の褐色土。シルト、粘性粘土。緑まじりの中粒V質礫層。1層よりは割合体積が厚く明かない。V質礫層20~30% (V質層上部)。V質礫が多少露入する。
3. 0.05B5の赤褐色土。黄褐色。シルト、粘性粘土。緑まじり中粒V質上部の粗面産土。粗面産土と見られる上部で粗面産土の分布が若干ある。
4. 2.3 (M)の黒褐色土。黒褐色土。緑まじりの中粒。緑まじりの中粒。緑まじりの中粒。V質層上部。1Pの産入は1~2%と少ない。粘性粘土層。土壌層の厚層上部で中央部までは深面産土まで見出。
5. 2.5 (M)の黒褐色土。シルト、粘性粘土。緑まじりの中粒。V質層 1P ~ 15% (V質)。厚層では4に似るがV質礫層が薄い。(V質層主体)。
6. 0.05B7の黒褐色土。シルト、粘性粘土。V質層上部の粗面産土層。粗面産土の厚層は3層 (M層)の上部上。

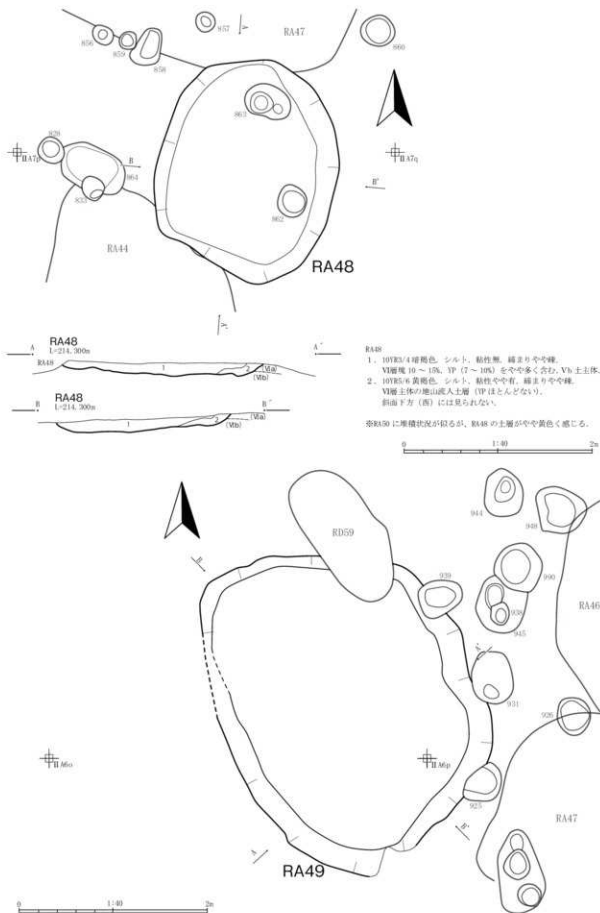
図1~3: RA46・47~B. HAT.



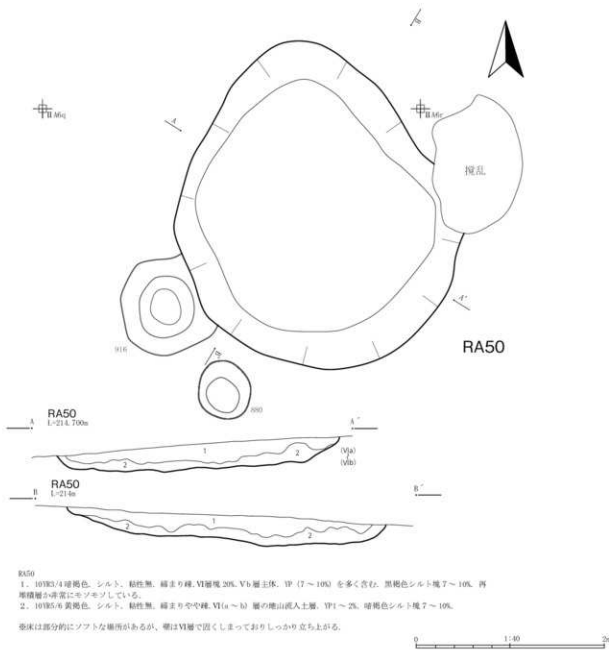
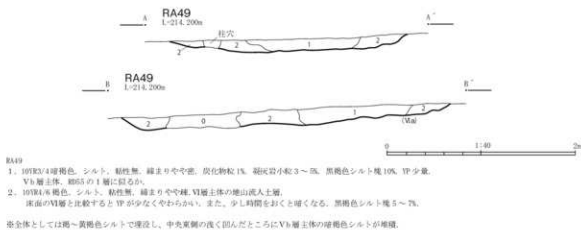
RA47 砂

1. 0.05Cの黒褐色土。シルト、粘性土。緑まじりの中粒。粗面産土 (V質層上部)。

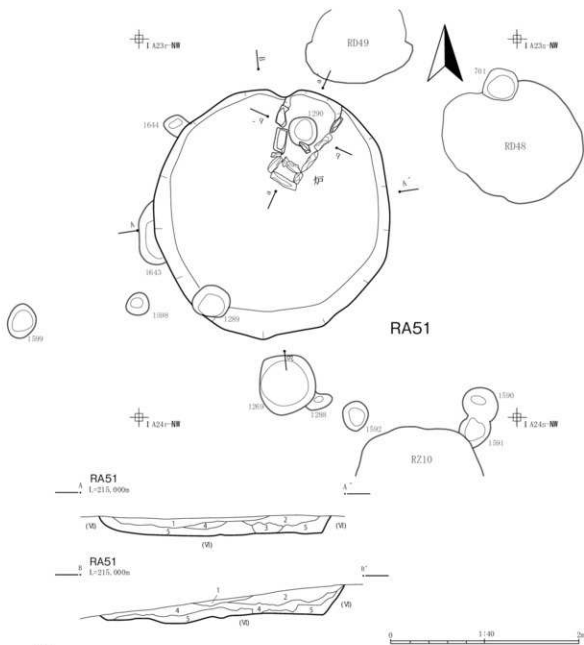
2 遺構



第87図 RA48、RA49平面



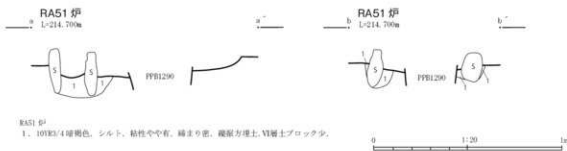
第88図 RA49断面・RA50



RA51

1. 101K2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。嵌みやや浅い。
2. 101K3/4 暗褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。1・4より明るい。IV層土又は覆ったV層土が、
3. 101K3/4 暗褐色。シルト。2に似るが、より明るい。
4. 101K2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性有。締まり密。V層土ブロックやや多。
5. 101K3/4 暗褐色。シルト。2に似る。V層土ブロック多。

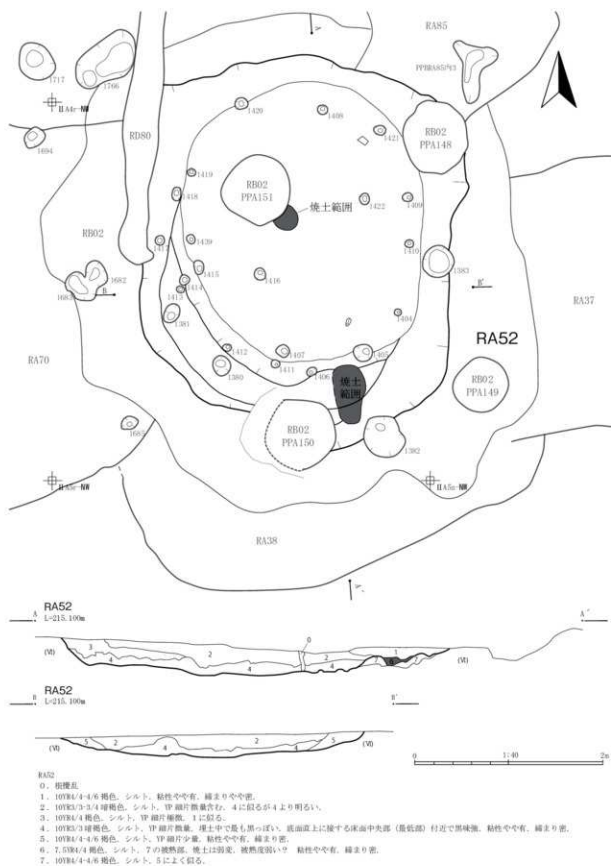
各斜面下方(北側)の境は流矢。南・東側は外壁・真鍮的な立ち上がりによる。北面部に境に接する形式Bもつ。境は焼熱不定。平面形は略円形。北面は平坦だが中央部(影付左)に凹面もつ。出土遺物は早期土器小片のみだが、埋土は中期末～後期初のそれに似る。Bの形態・埋土上体土から築造時期は中期末と推定。



RA51 剖面

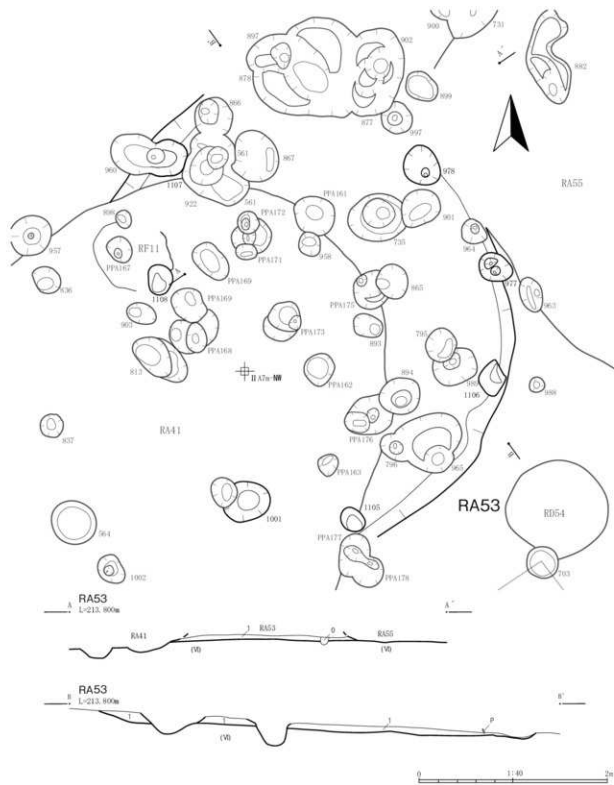
1. 101K3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。縦断方埋土。V層土ブロック少。

第89図 RA51



※平面図は不整な隅丸方形, 底面は中央部が深く, 壁に向かって緩やかに高まり, 外縁内湾して立ち上がる壁面に連続する。北壁, 東壁が比較的傾りが良いが南壁・西壁は垂直度が高いために乱れている。突縁形状では南側壁に一段高い張り出し部をもつ。張り出し部の中央付近には焼土の生成が認められる。焼土は壁穴本体のプラン外 (南側壁の脚) に位置する。7層上面に生成するが, 7層自体が埋没後の準埋藏である可能性も, 従って居住時点での生成ではなく, 埋藏時, 又はその後の段階の焼熱行為かもしれない。

第90図 RA52



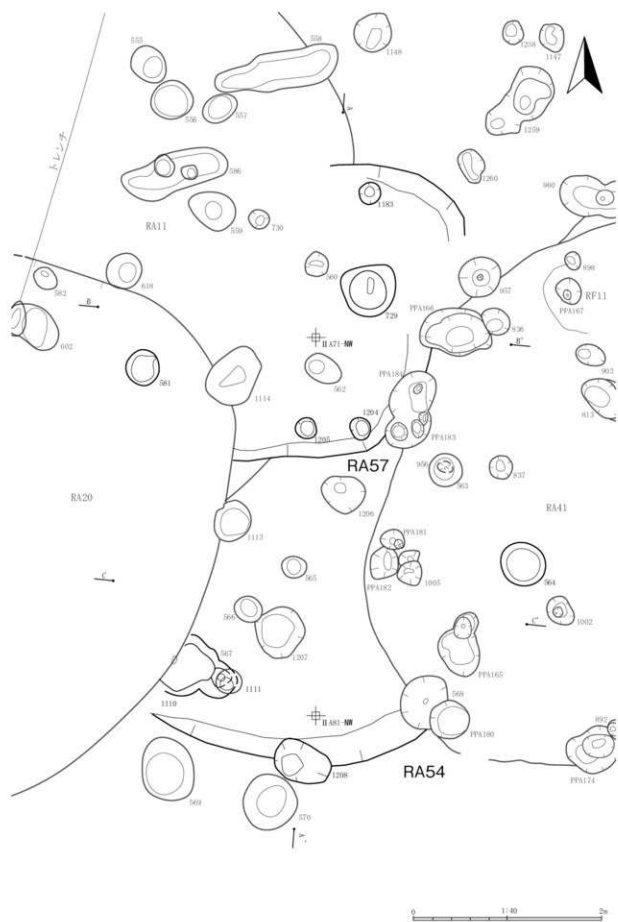
RA53

○、掘埋瓦

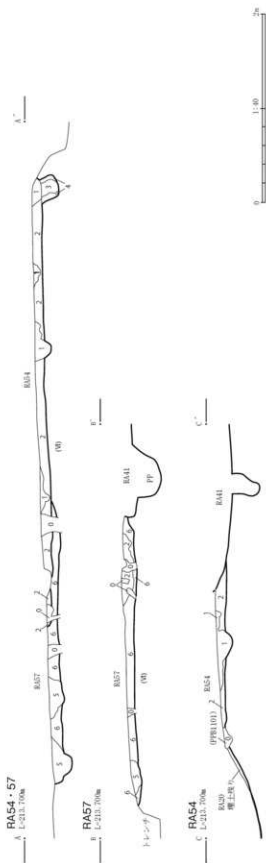
△、303R4(4-6)褐色、シルト、黏性泥、緑泥りやや密、3P 磁片散見含む。

※B2調査で精査の早期住居同士の間に位置する。V層下部のIP含む層が底面となる。埋土に含まれるIP片はV層下部のそれと比べて細かく、少ない。
 B-B' 右側(北側)で床面が低くなっているが、この付近(北東部)には複数のPIT状の落ち込みが重複しており、本来の床面が乱されているものとおもわれる。B2年度に補査済みのPITに加え、PPR1105～1108等が埋柱穴として判り可能性高い。

第91図 RA53



第92図 RA54・57平面



RAS7・R7
A・B ~ C・E 共通

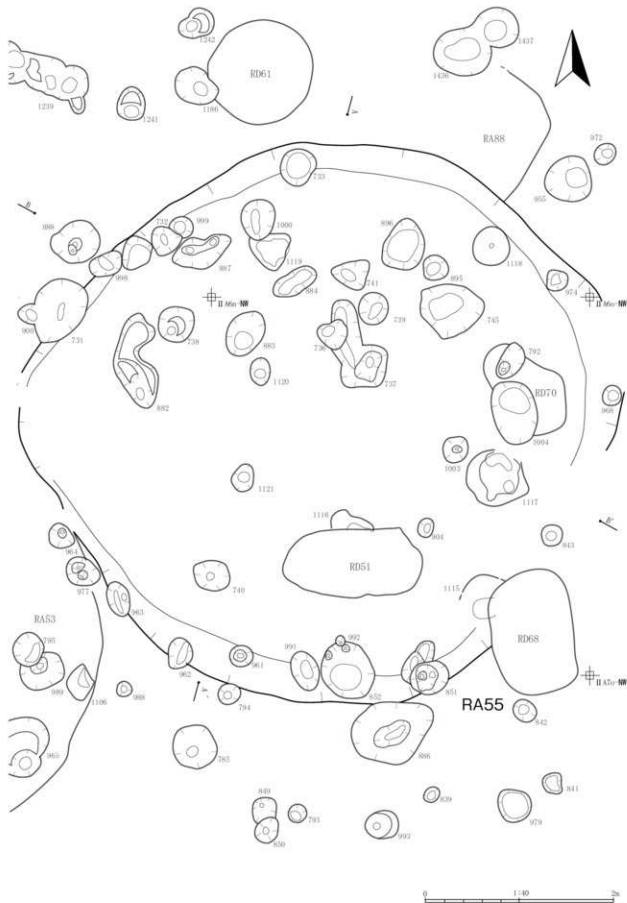
1. 10R22.2 黒褐色。シルト。黒褐色。黒まりや気泡。VA 相違。
 2. 10R43.3 3.4 黒褐色。シルト。黒色や気泡。黒まりや気泡。甲面直線部。VA 相違。
 3. 10R43.3 3.4 黒褐色。シルト。黒色や気泡。黒まりや気泡。甲面直線部。VA 相違。
 4. 10R43.3 3.4 黒褐色。シルト。黒色や気泡。黒まりや気泡。2 に近くなる黒まり部。柱穴直線部土中。
 5. 10R43.3 3.4 黒褐色。シルト。黒褐色。黒まりや気泡。
 6. 10R43.3 3.4 黒褐色。シルト。黒色や気泡。黒まりや気泡。2 に比して粗い。VA 相違。
- 層位は RAS7・RAS1 の間に位置する。新田遺構は、RAS7・RAS1 (7) > RAS7・R7 (7)。1 ~ 4: RAS4。5 ~ 6: RAS1。3 ~ 4 は傾斜する柱穴遺土。

RAS4

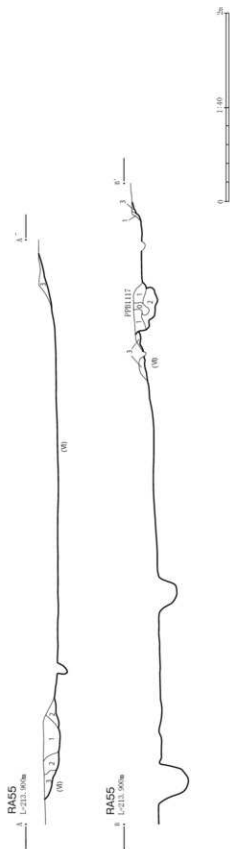
平面部は行一横川小。西部は遺年度調査により扁平と見られていた。R・S 層位は、RAS7・RAS1 の間に位置する。RAS7・RAS1 の間に位置する。RAS7・RAS1 の間に位置する。RAS7・RAS1 の間に位置する。

RAS7
平面部は行一横川小。柱穴直線部から、RAS7 直線部が可能範囲。東部は種が平面に集う。RAS7 直線部の一横川小層位がわかる。

第93図 RA54・57 断面



第94図 RA55平面



RA55

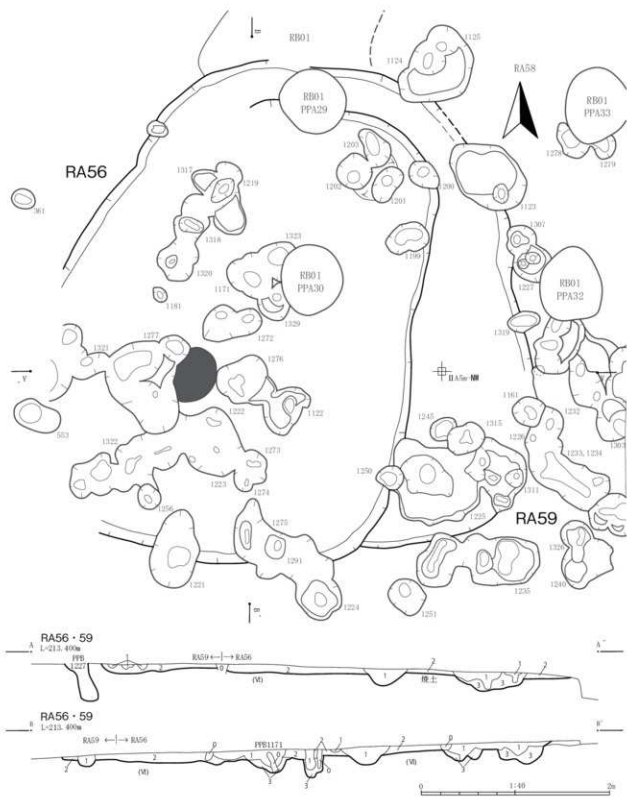
1. 10922の黒褐色、シルト、粘性ややや、締まり悪、片状。
2. 10923の黄褐色、シルト、粘性ややや、締まり悪。
3. 10924の4-4に深い黄褐色～褐色、シルト、硬固の硬土、VIによく似る品や多量（1層に多い）。

断面B-B'

1. 10923の黄褐色、シルト、粘性ややや、締まり悪。
2. 10922の黒褐色、シルト、粘性ややや、締まり悪、1より多い。
3. 10924の深い黄褐色、シルト、粘性ややや、締まり悪。

断面A-A'は、1022年調査で検出されたRA55の東半部が配管するような状態で検出された。本断面は特に遺構部分の長手側（奥）に見えるが、右半側（東側）には一段高い断面が認められ、掘削調査の必要性がある。また、断面中の遺構の柱穴配管の字に状態を確認しており、1層が遺構層か、再検討する必要がある。

第95図 RA55断面

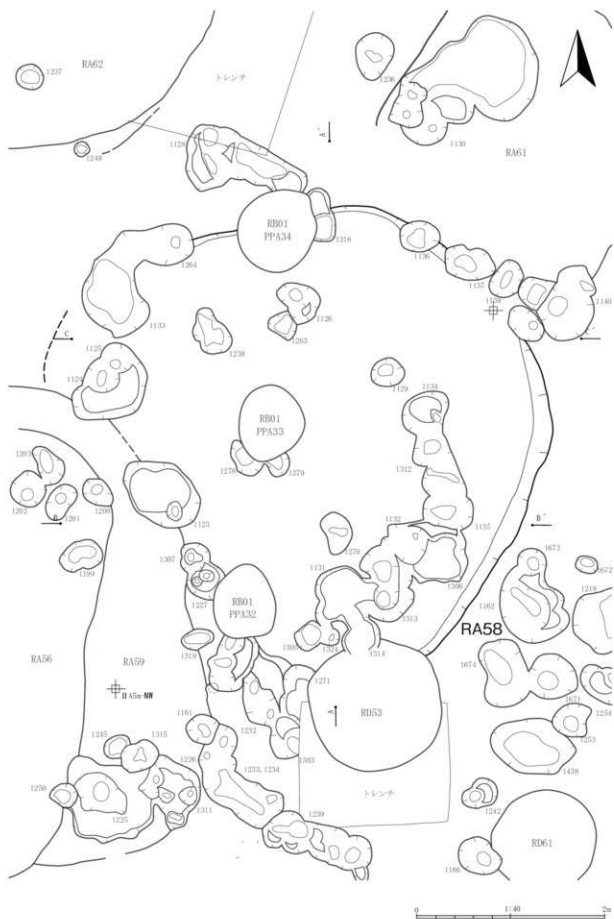


RA56・59

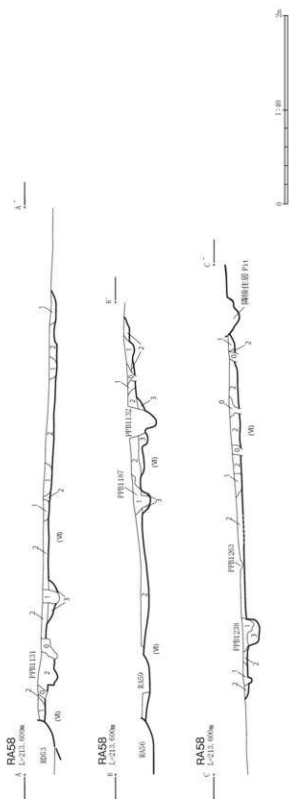
1. 10YR3/2-3の暗褐色・シルト、粘性有、締まり密、厚っぽい、P11 上部に集中する（柱礎又は抜き取り小）
2. 10YR4/3-6の褐色・暗褐色・シルト、粘性やや有、締まり密、厚さ全部に分布する、V層土に明確な境界に入る。
3. 10YR3/4の暗褐色・シルト、1にV層土ブロックや砂多、粘性やや有、締まり密、P11 厚り方層土

※2層以上の重複部である。床面の段差及びP11の配置状況から、RA56-59と命名。RA56の東縁から張り出すように、一段高い床面を掘出。これをRA59とした。RA56は竪石開口部のプランを築くと思われる。床面はほぼ平坦。壁は内周外縁、中輪縁上の隅角りに土壁生成（0層だらう）。P11（RA59に傾斜する？）に上方から掘られている。

第96図 RA56・59



第97図 RA58平面



RA5S

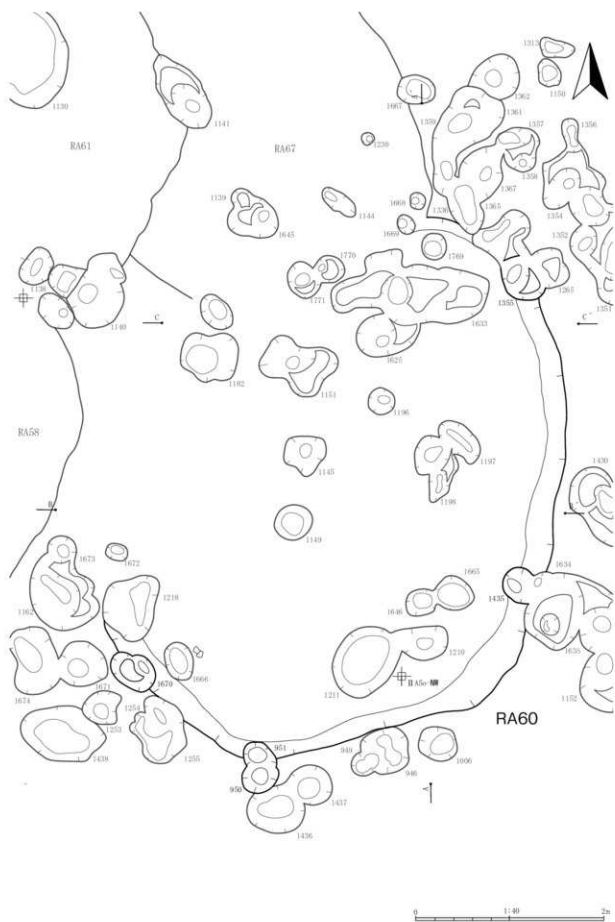
1. 100K3.0-3.4層褐色、シルト、粘状や中粒、粘まりや中粒、炭灰層付着。
2. 100K4.0-3.4層赤、粘状や中粒、粘まり赤、W層付着層付着、炭灰層付着。
3. 100K3.0-3.4層褐色、シルト、粘状や中粒、粘まり赤、W層付着。

※土層相は標準土層相、土は全層で粘状層（主に埋戻土目）と確認している。掘削はほとんど埋戻土目がない。

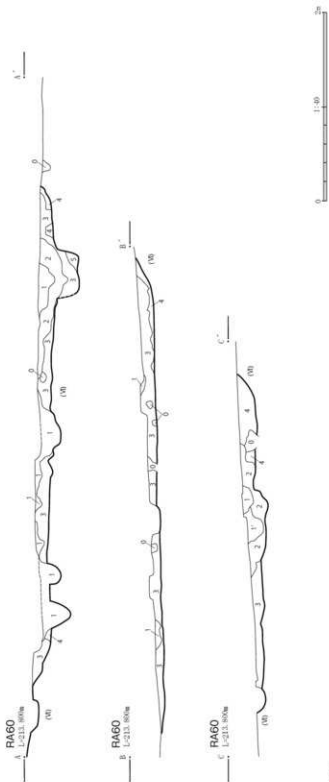
※掘削箇所は埋戻土目、自然埋戻土目によってつくられた層、上方より下方で埋戻土目が生じている。

※埋戻土目内層、柱穴は埋戻土目から約1m前後内側に遺跡に定位置関係が見られる。また一部で埋戻土目付近にピットが見られる。

第98図 RA58断面



第99図 RA60平面



RA60

0. 埋没土

1. 0002から030埋没・埋積土、粘質性、黒まりや砂

2. 0002から040埋没・埋積土、粘質性や砂、黒まりや砂、SP小片ごく微

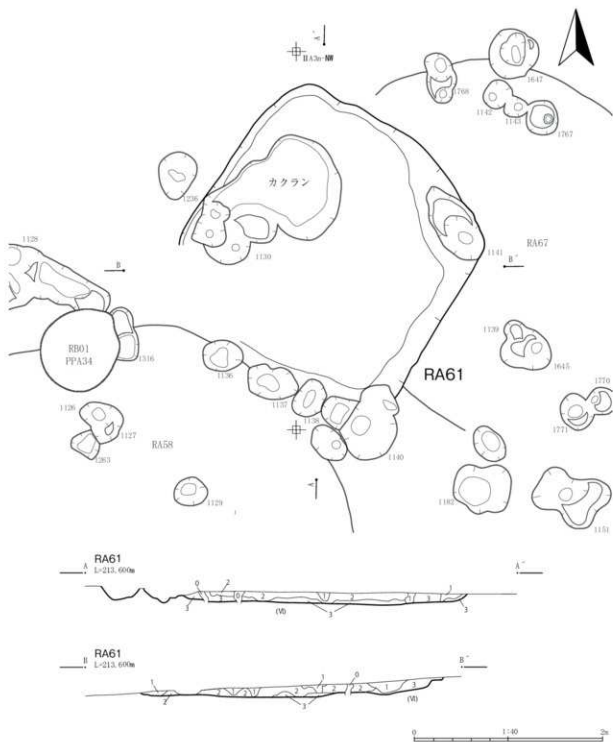
3. 0004から050埋没・埋積土、粘質性や砂、黒まりや砂、SP小片

4. 0004から060埋没・埋積土、粘質性や砂、黒まりや砂、SP小片

5. 0004から070埋没・埋積土、粘質性、黒まりや砂、VI上層埋没（埋没土が）

各層は埋没土の表面とみられるが、北西部の埋没状態としない、層は内層付録、床面は各層付録の平面に準じ、中央部はわずかに低くなっている、この低く埋没に付いたの埋没平均面と見られる、埋没下は巨穴状の穴一つ、ツラツラ内には土層の厚みはついておられる、巨匠土を切っており、断面位置に準じ101の位置にあるの埋没土の厚みも可視性もある、

第100図 RA60断面

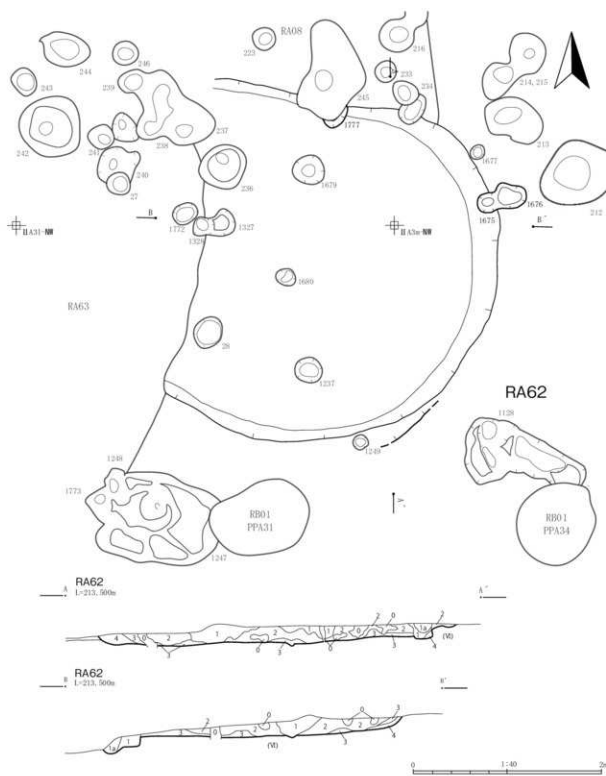


RA61

1. 10702/3-3/4 暗褐色、シルト、粘性やや有、綿まりやや密。
2. 10704/3-4/4 に近い黄褐色～褐色、シルト、粘性有、綿まりやや密、中細片散在。
3. 10701/4-3/4 塊～暗褐色、シルト、塊状～底面に分布。

※平面形は楕円形、ベルトは対角線上を通っている。床面はほぼ平坦、砂は未検出。壁面は内面外積、北～東壁の一部にステップ状の段をもつ（壁脚高ともなりものか）、コーナー部に塊状のピット、南壁に連続する有面状のP1（柱穴だろう）。

第101図 RA61



RA62

0. 板瓦点

1a. 10YR5/3 暗褐色。シルト、粘性有、締まりやや中密。

1. 10YR4/4 褐色。シルト、粘性有、締まり密。

2. 10YR4/4-4.6 褐色。シルト、粘性やや有、締まり密、穿跡片稀散、臭味強い。

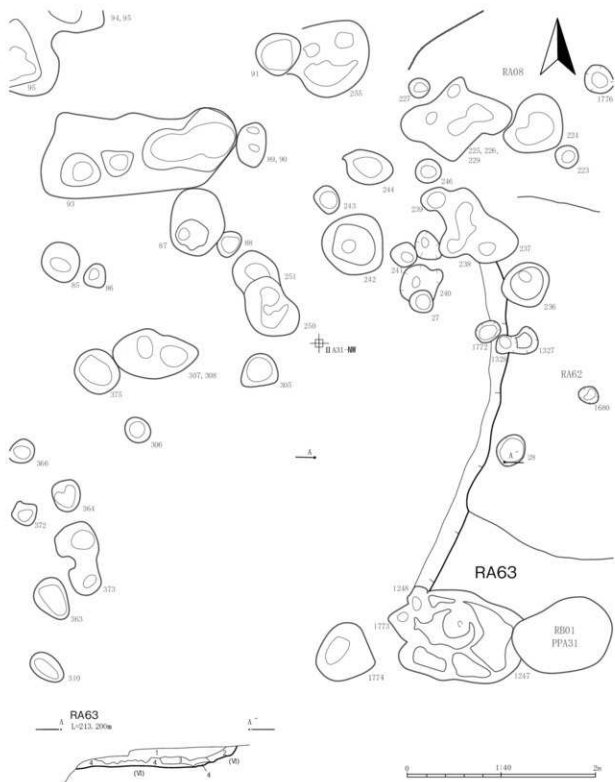
3. 10YR4/4 褐色。シルト、粘性やや有、締まり密、2に比して碎い床底土層。

4. 10YR4/4-4.6 褐色。シルト、粘性やや有、締まり密、穿跡少量、硬質落土。

※平面図は門〜柱門0へ、壁は内向外壁、床面平地、南西側壁消失、西部 RA63 に重複（新図 RA63 > RA62）。

第102図 RA62

2 遺構



RA63

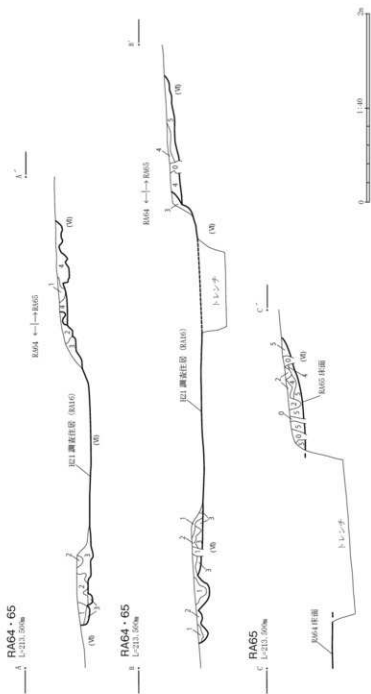
1. 10TR1/3-4/4 褐色。シルト、粘性やや有、締まりやや密。VI上部によく似るが、10TR3/4 暗褐色シルトブロック少量含むわずかに硬い。
2. 10TR1/3-4/4 に近い黄褐色。シルト、粘性やや有、締まりやや密。埋土のうち最も厚味強い。
3. 10TR1/3-4/4 に近い黄褐色。シルト、粘性やや有、締まり密。2 に似るが、VP 小片やや多。
4. 10TR1/4-6/6 褐色。シルト、1 に似るがVP 細片散見含む。

東西半部は過年度レンジ (VI層部下1/2) に埋られ失われた (過年度は認識できなかった)。東半部が残存、東縁でRA62を知る。半部は掘削部から、壁は内境外縁。東面はほぼ平坦、VP 小片を多く含む面を床面としている。高層が埋土の埋土上部に、土次第のVを埋土の層と認められるが、本掘削の埋土の一部と判断して同時に掘り下げた。北東壁部に散在する柱穴 (過年度積層遺構) が本住居に伴う可能性高い。

第103図 RA63



第104図 RA64・65平面



RA64・65

D. 名称表

1. 1910年焼成色、シルト、粘質土、緑黄色、緑まじり砂層。
2. 1910年2号4号に付いて黄褐色、粘質シルト、粘質砂層、緑まじり砂層、3号にして薄い。
3. 1910年4号褐色、シルト、粘質砂層、緑まじり砂層、黄褐色、黄褐色。
4. 1910年4号褐色、シルト、粘質砂層、緑まじり砂層。
5. 1910年4号褐色、シルト、粘質砂層、緑まじり砂層、黄褐色、黄褐色。

※2・3・R64、4・5・R65、6は1910年度調査のR10の埋没部分に当たったものである（埋没部分の埋土を掘り残していた）。

R64は北東一帯及び南西一帯の長方形のトレンチ（長方形）の壁は平均厚約1.5m、床面は平均厚約1.5m、南西側壁下には土層が厚く、厚さ約1.5m、R65は南一帯、トレンチの壁は平均厚約1.5m、床面厚約1.5m、中央部はR64及びトレンチによって遮られている、R65の埋没不明。

第105図 RA64・65断面



RA66

0. 松隈丸。

1. 10YK/2 黒褐色。シルト、粘性有。締まりや中密。(FPI1230 堆土)

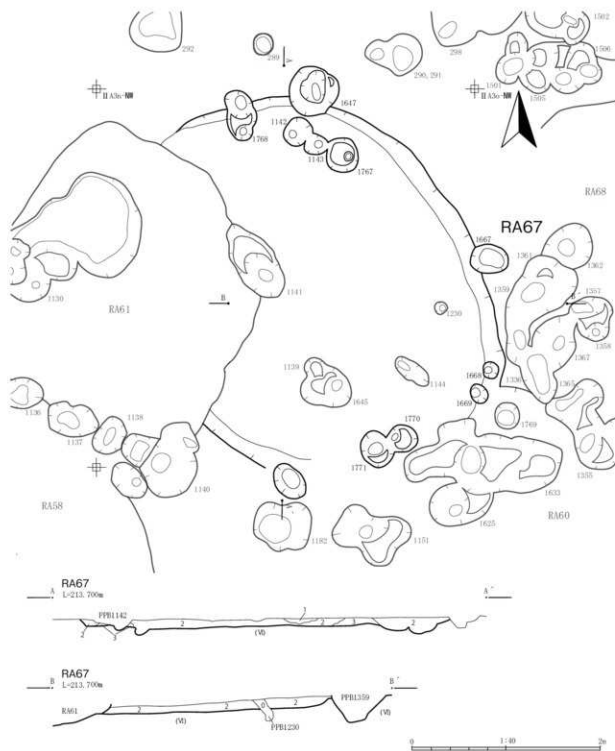
2. 10YK/3 暗褐色。シルト、粘性や中密。締まり密。FPI 細片散在含む。全体揃った感じ。

3. 10YK/3-3/4 に近い黄褐色～暗褐色。シルト、粘性や中密。締まり密。FPI 細片散在。

4. 10YK/4 褐色。シルト、粘性や中密。締まり密。FPI 小片少量。地山 (VI層) 土の西側積層。

赤平面図は補図。西壁が消失。RA72と重複すると見られるが、新旧不明。壁は内外外壁。床面平坦で中央に土灰状の落ち込みをもつ。落ち込み内部に坑状の小穴1枚散在。ほか、地土は未確認。柱穴配置は検討要す。

第106図 RA66



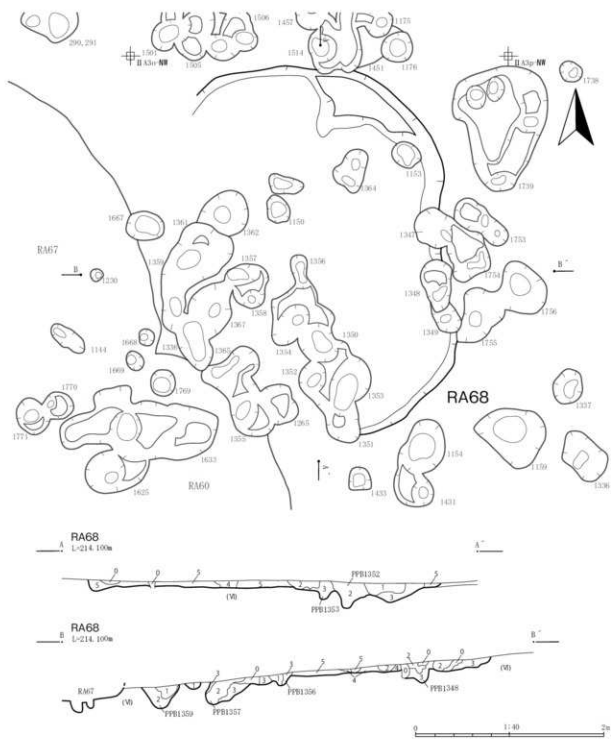
RA67

0. 覆土

1. 10YR3/3 埋褐色 シルト、粘性强、締まりや中密、穿洞片ごく微。
2. 10YR3/4-4 埋褐色 シルト、粘性强や有、締まり密、穿小片ごく微。
3. 10YR6/4-4 埋褐色 シルト、粘性强や有、締まり密、穿小片微。

※平面図は礎石構門部、西部をRA61に切られ、南東部にRA60が重複（新旧不明）、壁は内側外積、底面は平坦に整う、少は木柱礎、柱穴は壁内側に沿って分散しそ。

第107図 RA67



R68

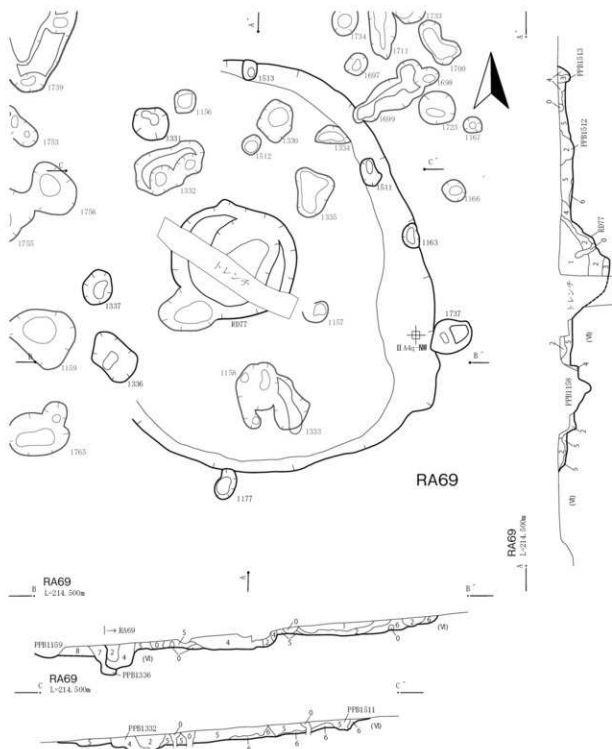
0. 概況

- 10182/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性者、締まりやや密、Vaに良く似る柱状状。
- 10182/3 黒褐色、シルト、粘性やや密、締まり密、甲片微量含む。
- 10183/4-4/4 暗褐色～褐色、シルト、粘性やや密、締まり密、VI土ブロック多含む異味強、P1に似る方理土。
- 10182/3-3/3 黒褐色～暗褐色、シルト、粘性者、締まりやや密、R68の上たる硬土。
- 10184/4-4/4 褐色、シルト、粘性やや密、締まりやや密、R68の上たる硬土。

※1～3：住居切の列状P1、4・5：R68の上たる硬土。平面形は概ね楕円形を呈するが、全体的に重複して判然としない。西半部は流失、又は削平（新築遺構）により失われている。壁の立ち上がりはわずかながら、北～東壁で残っている。内外外縁、床面は平坦に整うものの南西部及び東壁側が連続するP1に知られている。柱穴は壁直下に存在するものの、一部が傾斜の可能性（傾斜は図解）。断面A-A'の右端、B-B'の左右両方でV層土主体のP1に知られている。これらのP1は方形基壇の柱状に例えられ、L字状に連なる場合が多い。

第108図 RA68

2 遺構

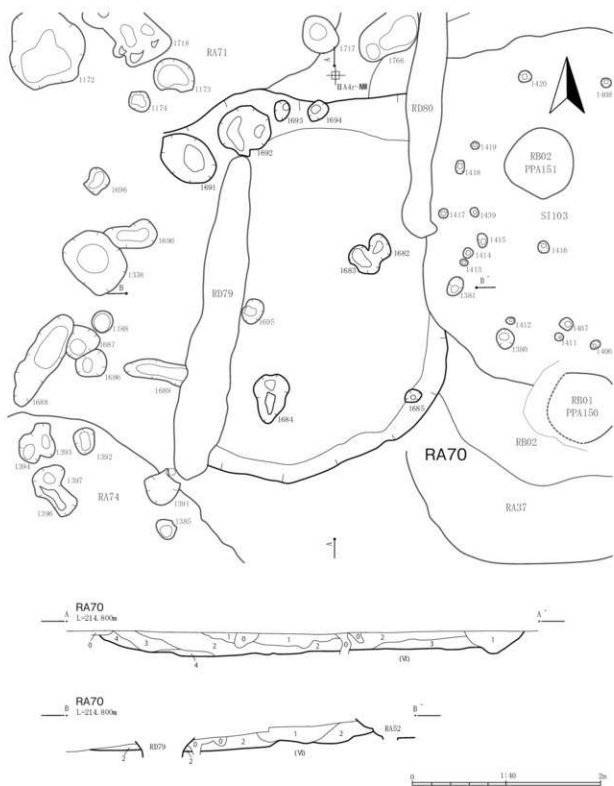


RA69

0. 概観図。

1. 103K/4-4/6 褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。VI土に良く似る。
 2. 103K/3-3/3 黒褐色・暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。溝っぽい(強い)土層。焼土をわずかに含む。
 3. 7.03K2/3-3/3 黒褐色・暗褐色。シルト。2に良く似るが、赤味を持つ。焼熱によるものだろう。
 4. 103K/4-4/4 暗褐色・褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。厚片散見(自北つ)。
 5. 103K/4-4/6 褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。IV片少。VI層土の崩落土か。
 6. 103K/4 褐色。シルト。5に似るがやや暗い。
 7. 103K/3-3/4 暗褐色・褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。PI土。
 8. 103K/4 褐色。シルト。5に似るが暗い。
- 地層Vは若干。北西部の埋没・崩壊のため、又は既記。壁は内寄再建。中央に土坑状の掘り込みRD77を持つ。住居本体の床面層土を上から削っているが、他例も見られる準埋没状況であり、住居中央に位置する点からも、本住居に伴う可能性を排除出来ない。(埋没過程の復元とその意味を検討しなければ、...)土坑状掘り込みの内層はごく弱く赤味がみられる。これを埋める黒色土2・3層に焼土が含まれ赤味を持つ。このことから陥没の崩壊である可能性を考慮しなくてはならない。柱穴配列は壁内面に自った分布がみられる。埋没下のものは板形で良く、土坑状掘り込みを覆うものは不整形なPI。床面は東半部で整っているが、西半部はPI土の遺構が多く見れており、東半部に比べて低くなっている。

第109図 RA69・RD77



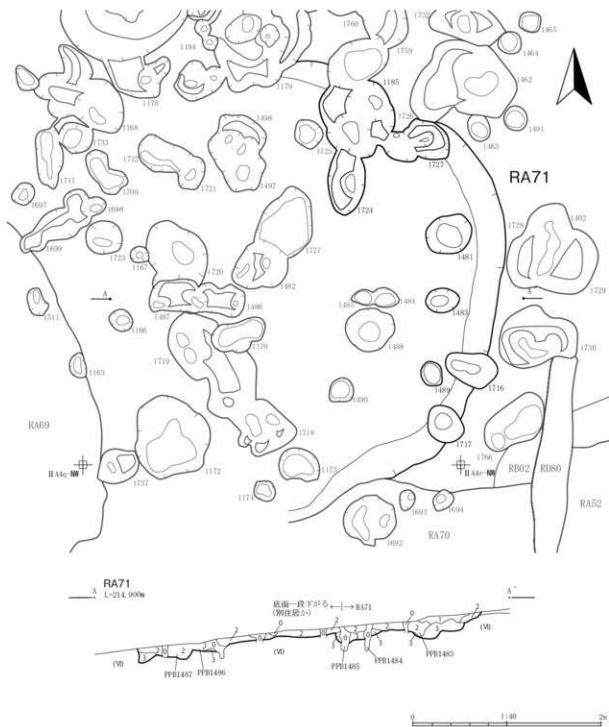
RA70

0. 概況図。

1. 10YR3/4-4/4 暗褐色～褐色。シルト、粘性やや有、締まりやや密。
2. 10YR4/4-4/6 褐色。シルト、粘性やや有、締まり密、TP 小片散。
3. 10YR4/4 褐色。シルト、粘性やや有、締まり密、1より明るく、2より硬い。
4. 10YR4/6 褐色。シルト、粘性やや有、締まり密、TP 小片少量（目立つ）、Vの陥落河床確認。

空堀田当道は1層上の分布範囲がほぼ方形を呈していたことから、方形住居と考えていたが、積委を遡めたところ壁が外側に広がる事が分かり、隅丸または隅円形の可能性が出てきた。壁は内外外縁するが、他の隅円形住居に比して、壁の立ち上がり方は急である。床面は中央部に向かって緩やかに深く（低く）なると、裏に接する部分に限っている。柱穴・炉は不詳。

第110図 RA70



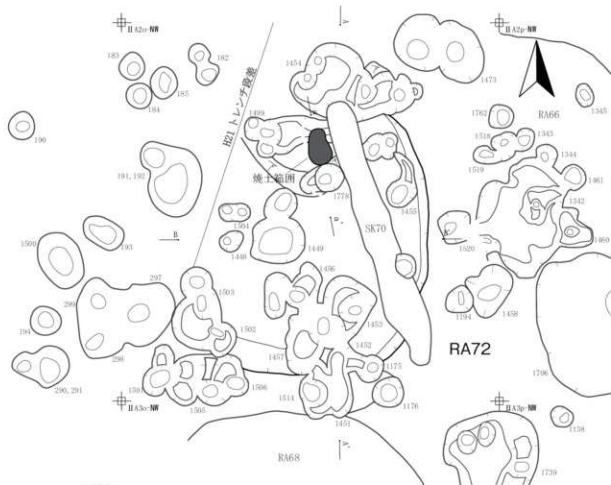
RA71

O、概復元

1. 10783/3 緑褐色・シルト、粘性や中、締まりや中硬。
2. 10783/4-4/4 緑褐色・褐色、シルト、粘性や中、締まりや中硬、甲片ごく微、V層土少量含ま異地層を穿る。
3. 10784/4-4/4 褐色・シルト、粘性や中硬、締まりや中硬、甲片微、V層の再堆積 (甲片層より埋土が)。

各平面図は概ね円形、西部は狭長、東半部に残存の壁は内角外縁。柱穴状P1は壁内側に並ぶ傾向、床面は概ね平坦だが、壁脚（柱穴状P1の分布範囲）がわずかに下がる（低くなる）、土層断面では、はっきりしないが、西半部床面がわずかに低くなることから、西半部に別の柱が着構している可能性有り、残土は瓦礫層。

第111図 RA71

RA72
A 1-214.100mRA72
B 1-214.100m

RA72

0. 縦断面。

1. 109K2/2~2/3 シルト、粘性有、締まりや中密、黒味強。
2. 109K2/3~3/4 シルト、粘性有、締まりや中密。
3. 109K3/4~4/4 シルト、粘性や中密、締まり有、V層土や中密く含み美味強い。
- 3'. 109K3/4 シルト、3に似るがV土ブロック多く、美味より強い (P1: 縦り方埋土)。
4. 5に良く似る。
5. 109K3有 シルト、粘性や中密、締まりや中密、Vの母堆積土 (P1: 埋土)。

各条 南に直線的な壁を持つことから方形基壇と推定。北壁部に床より高い焼土持った、東側に重複のR66を切っている点と認められる (輸出状況から、柱状は壁間に並ぶものが併うとみられるが、重複する他の柱状の存在も考慮して検討を要す。

RA72 焼土



0 1:40 2m

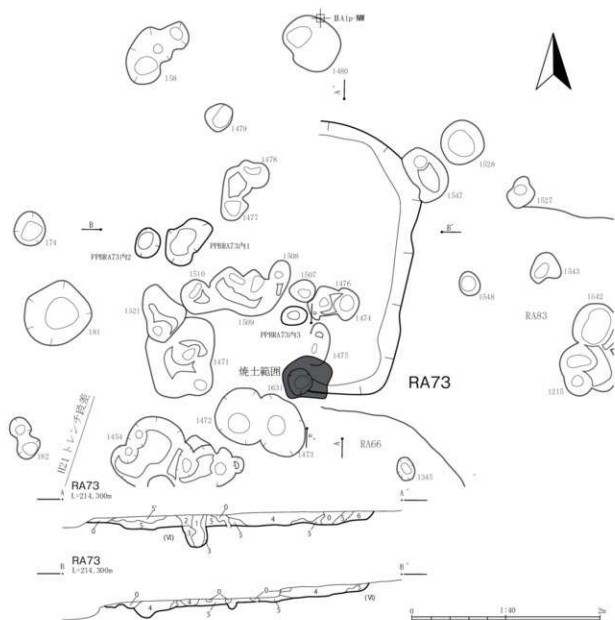
RA72 焼土

0. 縦断面。

1. 109K3/3/3/4 暗褐色、シルト、粘性有、締まりや中密。
2. 109K4/4 褐色、シルト、粘性や中密、締まり密。
3. 7.59K4/4-3/4 暗-暗褐色、シルト、粘性有、締まりや中密、焼土。
4. 109K3/4-4/4 暗褐色、シルト、粘性や中密、締まり密。

0 1:20 1m

※RA72の北壁部に生成の焼土、周囲を、同住居を切るP1: 群に切られて平面形は不明だが、焼土の確認される範囲はH1E7群を穿する、焼土の生成面は周囲の地面より高くなっており、マウンド状又はテラス状になっているものと思われるが、覆土層と原形をとどめない、焼土の地成は高くは良くない。



RA73

D. 概観図

1. 10192/2 黒褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。柱状（柱状埋土認め）。

2. 10192/3-2/3 黒褐色。シルト。粘性有。締まり密。F1 崩り方埋土。

3. 10192/3-4/4 暗褐色。褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。VIプロント少。F1 崩り方埋土。

4. 10192/4 暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。3 層埋土がプロント少。

5. 10194/4 褐色。シルト。VI層土の再堆積が。粘性・締まり密やや有。

6. 7. 10193/3-3/4 暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。4 に良く似るが、焼土含むため（又は焼土そのものか）赤味帯びる。5 上面に生成の焼土が。

8. 10193/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。4 に似てきより密っぽい。

概平面図より断面位置と想定（北西をトレンチ方向としている）。取掘及び焼土埋土層が現存。内角外縁。床面平坦。海溝裏面より焼土も。生成面は層上面が。他の方形柱に同規模数有（壁のすぐ内側に生成し床面より高い位置にある生成面の土は焼土に類似する再堆積土。又は焼土そのもの。炭粉層のものか。テラス状につくられた施設か。判断つかない）。

RA73 焼土範囲

E. 1-214.190m



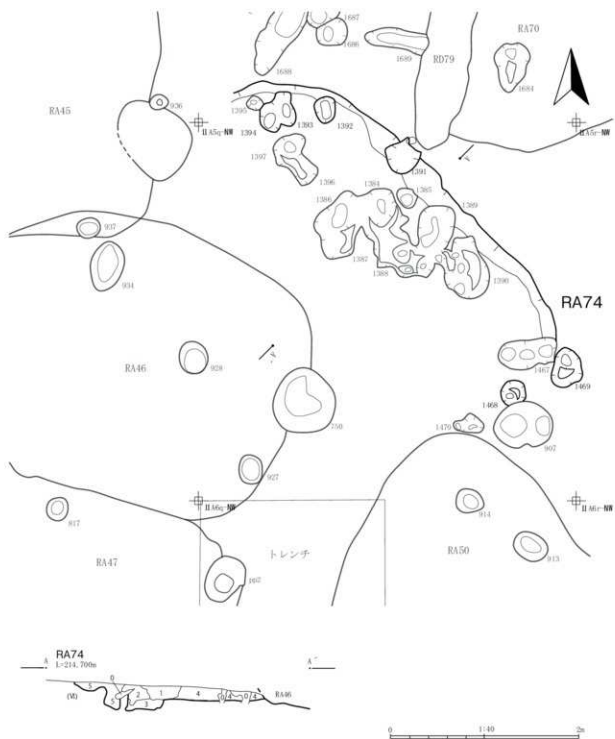
RA73 焼土範囲

D. 概観図

1. 7. 10194/6 褐色。シルト。焼土。粘性有。締まりやや密。異い紫色（両辺が広く粗等で埋込を受けている）。

2. 10194/6 褐色。シルト。VI層土だがわずかに硬い。粘性やや有。締まり密。

※RA73 海溝裏面より焼出の焼土（※7）である。ほぼ円形の平面形と推測されるが、中央を押81631、両辺を埋残土に覆られている。焼土上面はほぼ生成面を挟んでいると思われる。生成面は床面より高く古代カマド状のマウンド状またはテラス状に盛り上げられている。焼土の崩り出しによると思われるが、焼土下面のVI層土はやや崩りがあり、不明。他例と比較検討を要する。



RA74

0. 假腰柱。

1. 101K3/2-3/3 黒褐色-暗褐色。シルト。粘性有。締まりや中密。

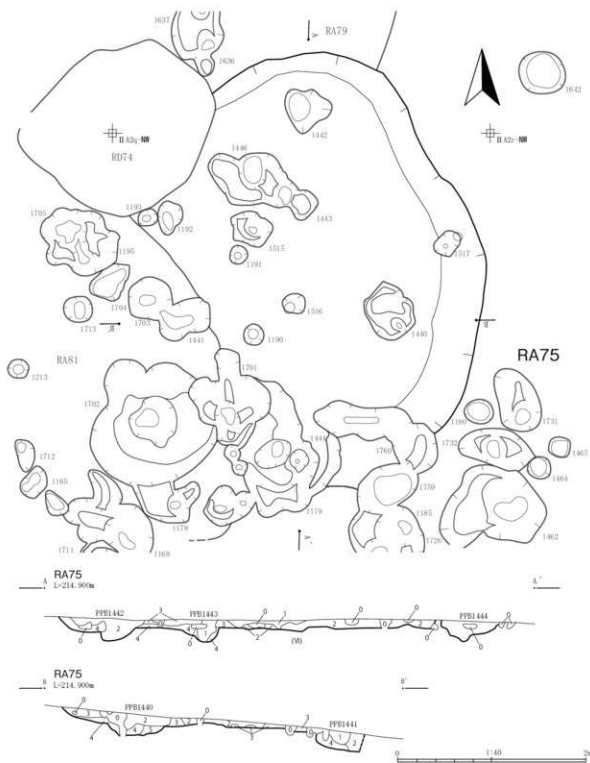
2. 101K3/4 暗褐色。シルト。粘性や中右。締まりや中密。VP 細片炭灰含む。

3. 101K4/4-6 暗褐色。シルト。粘性や中右。締まりや中密。V1層上の再堆積層。

4. 101K3/4-4 暗褐色-褐色。シルト。粘性や中右。締まりや中密。床面覆り土たる層土。

5. 101K4/4-6 暗褐色。シルト。粘性や中右。締まり密。壁際に堆積するV1層の覆った層。V1の再堆積層小。

※南東・南西・北西に重複する住居 (RA45) に切られている。平面形は四~椀形だが、壁は内外外縁。床面平坦。



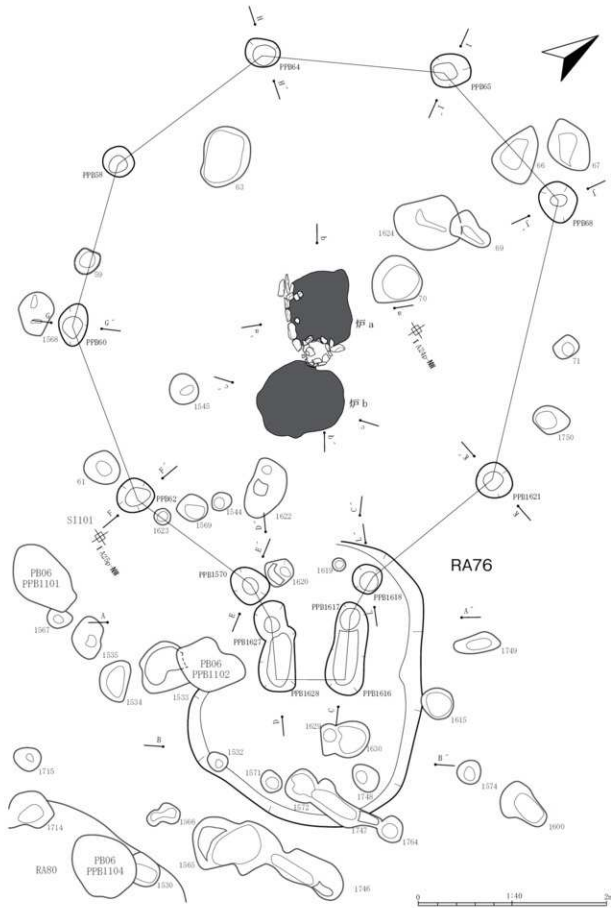
RA75

0: 遺構跡。

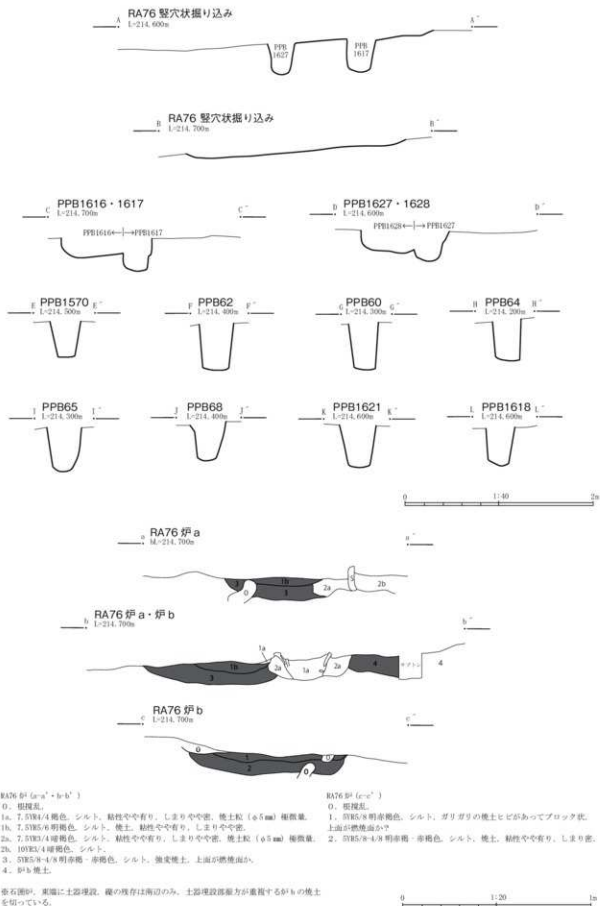
1. 10W2/2-2/3 灰褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや硬。肌味強い土層。新しい5。
2. 10W3/3-3/4 灰褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。
3. 10W4/4 褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。3にVI層土含む。全体に黄味。
4. 10W4/4-4/4 灰褐色。シルト。VI層土ブロック多数。VEの埋積層。P11 掘り方層土等分。
5. 10W3/4 灰褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。2によく似るがやや明るい。

巻戻すでは平面形は不整形。流線的女壁の一部に認められるので、方形基壇の柱石に加え階段の柱石が重ねられている可能性あり。壁は内外両面。断面は概ね平坦だが、重複するP11やテラス状に見える部分（遺構によるか）があり起伏を持っている。

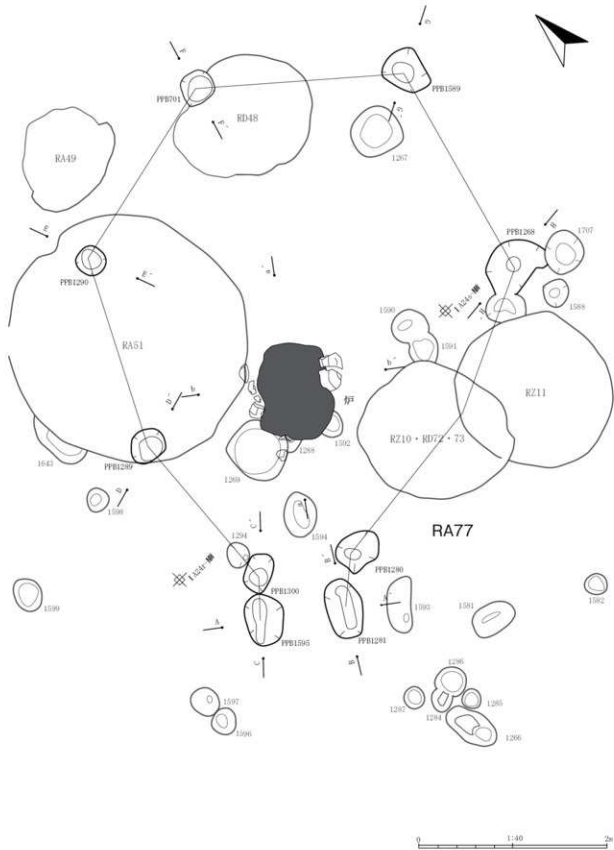
第115図 RA75



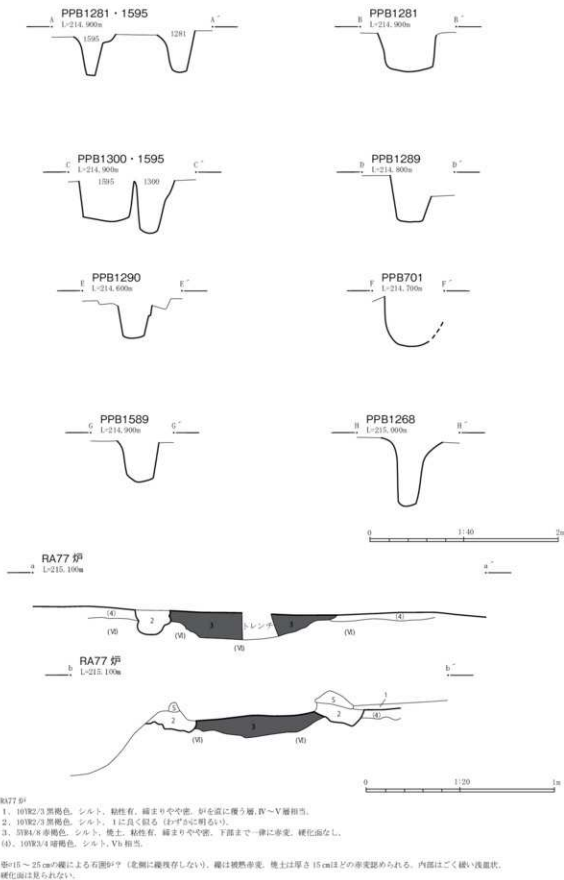
第116図 RA76平面



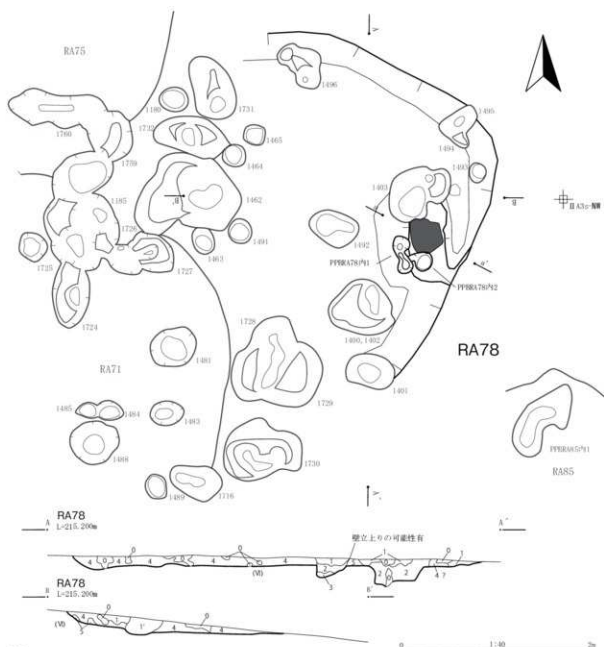
第117図 RA76派出所・柱穴・炉断面



第118図 RA77平面



第119図 RA77柱穴・炉断面



RA78

0. 概観図

1. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。黒っぽい、V_a・V_bの遺土か。

1. 10YR3/2-3/4 暗褐色。シルト。粘性有。締まり密。

2. 10YR3/4-4/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。

3. 10YR3/2-3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。

4. 10YR3/4-4/6 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。残層に認めがやや増く締まり欠。

5. 10YR4/4 褐色。シルト。中-小片炭素含む。残層の締まり弱。

※北東部にコーナー持つことから方形基礎の平面形と推定。北東コーナー付近は壁が残り、西半部消失。南部は不明瞭。壁の立ち上りは内角側。床面平坦。壁直下に不整な凹凸。東壁跡に他土持つ。掘出面から見えては、埋土中側か。床面不明。南西部にRA71遺跡。新目不明。

RA78 焼土範囲

L=215.100m



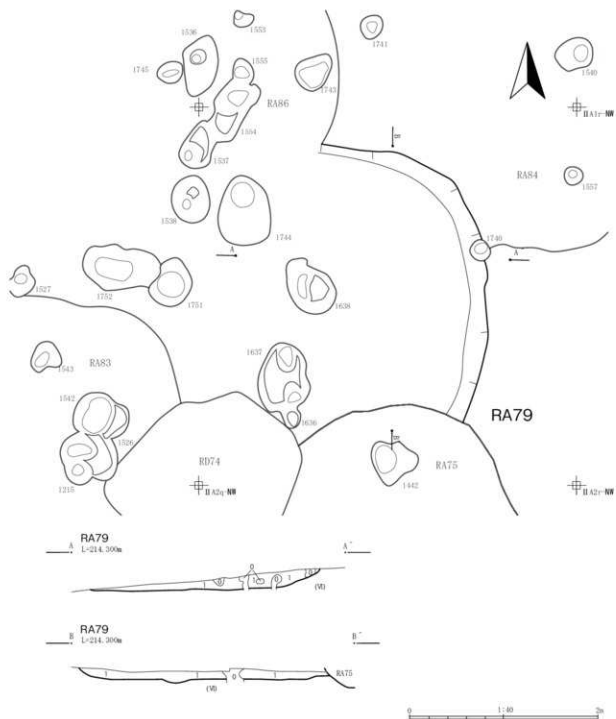
RA79 焼土範囲

0. 概観図

1. 7.5YR4/6 褐色。シルト。焼土。紫色鈍い。

(2). 10YR3/4-4/6 暗褐色。シルト。残層土だがわずかに焼い。

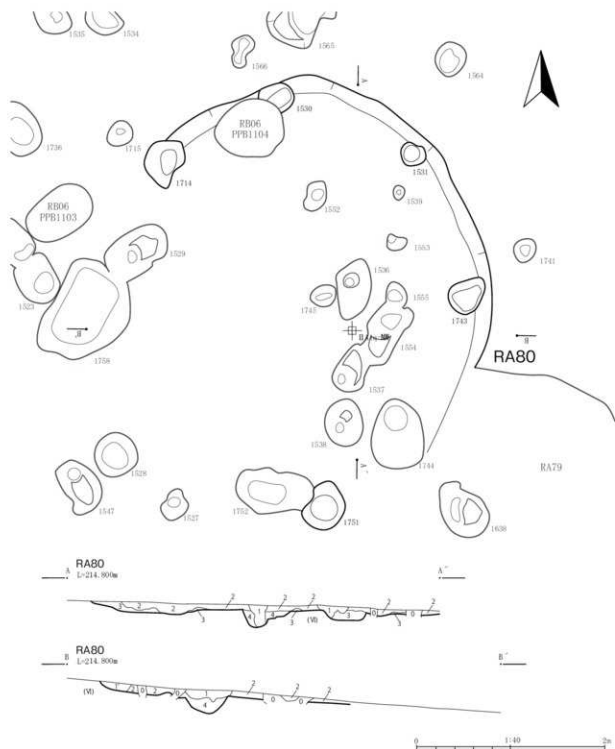
※RA79東壁面に生成の他土(6Y7)。概観図。少ビットに隠されて原形不明だが、焼土の広がりは概ね円形を示す。生成面は床面より高く、マダラ形状(ツラヌ状)を呈する。



RA79

1. 10TK3/4-4/4 破筒一断。シロト、粘性や中骨、緑まりや中骨。

※平面等は隅丸方角→隅角と推定。南端は RA75 と重複。西部は掘出で全体形状不詳。RA75 との別目は不明（精美の順序は RA75 が先だが、断面ではわからない）。壁の残存は北東部のみ、内寄外壁、深は平坦だが緩急いかなる凹凸。



RA80

0. 板状瓦。

1. 10YR2/3-3/4 黒褐色-暗褐色、シルト、粘性有、締まり密、割つばい。

1'. 10YR8/4 褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密。

2. 10YR3/4-4/4 暗褐色-褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密。

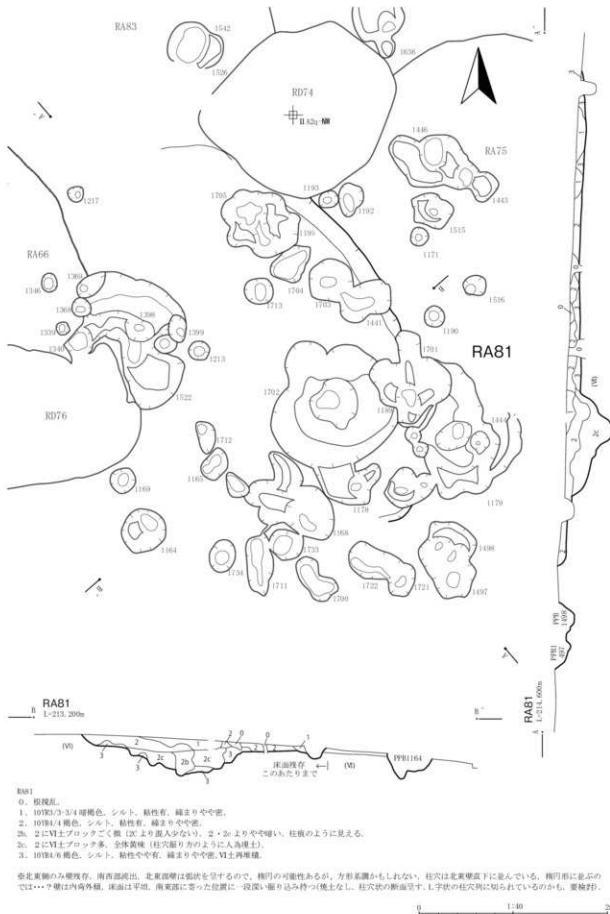
3. 10YR4/4-6/6 褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、Y P 小片多、VI 内層積土。

4. 10YR4/4 褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、P1: 掘り方壁土。

香炉門～丸丸方形が、南東部にRA79重複。西平部突出で、壁の残存は北東部のみ。壁は内向外縁。床はほぼ平坦。斜面下方側の傾斜は流矢によるとみられるが、土層断面では壁土の西縁を見いだせない(※右)。北東壁面に傾斜乱状の小P1が集中。

第122図 RA80

2 遺構



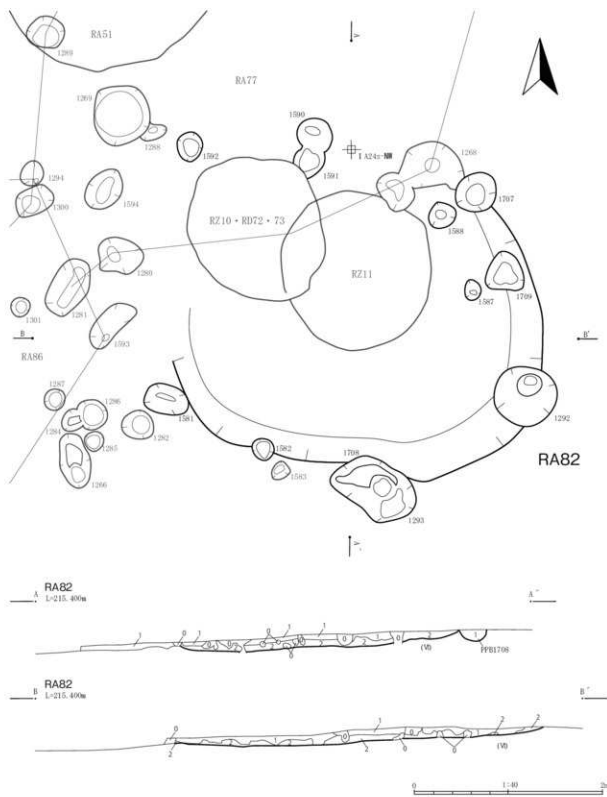
RA81

(O) 探検丸

1. 10193/3・3/4 暗褐色、シルト、黏性有、締まりや中等。
2. 10194/4 褐色、シルト、黏性有、締まりや中等。
- 2a. 2にVI土ブロックごく微（2cより層入少ない、2・2aよりやや多い、柱状のように見える。
- 2c. 2にVI土ブロック多、全体黄褐色（柱状崩り方のように入部層上）。
3. 10194/6 褐色、シルト、黏性ややや有、締まりや中等、VI土再堆積。

※北東部のみ探検有。南西部突出。北東部は形状を留するので、機門の可能性もあるが、方形基調かもしれない。柱穴は北東部底下に並んでいる。機門前には並ぶのでは・・・? 壁は内角外縁、扉面は平頭。南東部に寄った位置に一段深い堀り込み持つ(堆土なし、柱穴状の断面等)。L字状の柱穴列に切られているのが6、要検討。

第123図 RA81



※RA82

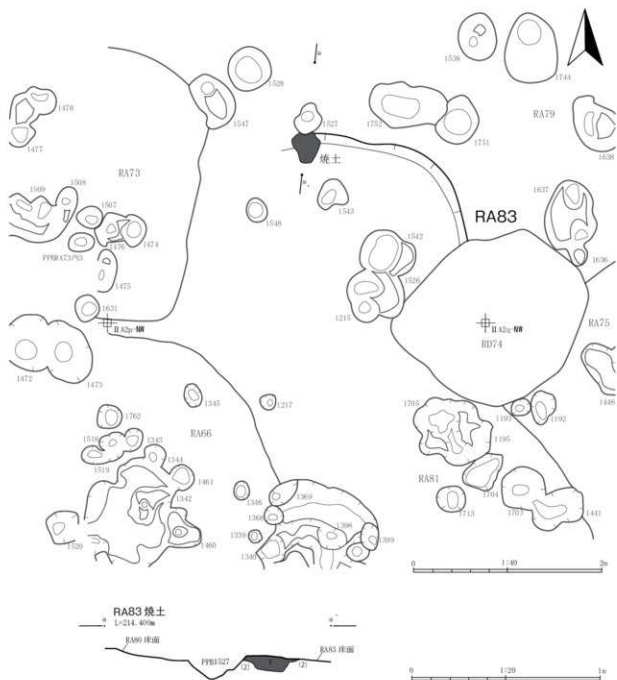
0. 掘削孔

1. 100R3/4/6 暗褐色、シルト、粘性弱、締まりやや密。

2. 100R4/6/6 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、VIに良く絞るが、VIIが十分に締まり欠く。

※平面形、積門、壁、内外外縁、床面、芋田、柱穴は壁面又は地上・地下、北側頂上に位置。

第124図 RA82

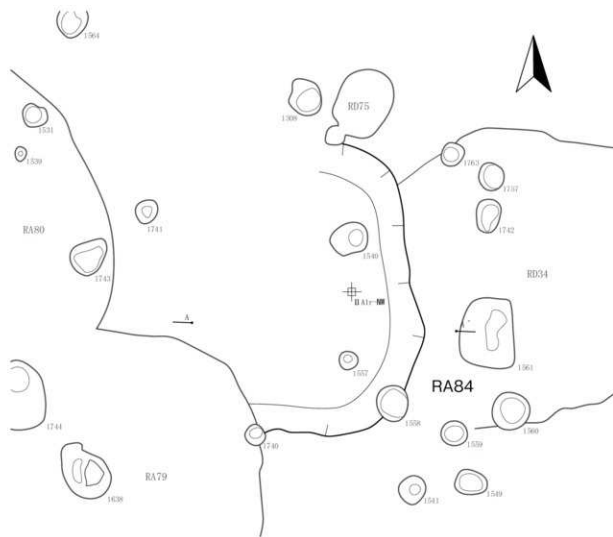


RA83 焼土

1, T.50RA6 褐色, シルト, 焼土, 粘土や中骨, 縮まりや中骨,
 ①1, 100RA6 褐色, シルト, 粘土や中骨, 縮まり骨, やや湾ったVI層土, 住居床面を成す土層。

※RA83の北端に生成の焼土である。他例は床面より一段高く生成するが、本例は床面と同レベル、横出（確認）時点での明度が高かったことから、變成面を掘り下げてしまった可能性もある（本案は一段高かったのかも・・・）。

北側でRA80と重複しており、これに傾斜の可能性有るP981527に焼土の北辺を覆われているようだが、住居同士の新旧は不明である。本焼土のほうが新しいかも知れないが・・・。



RA84

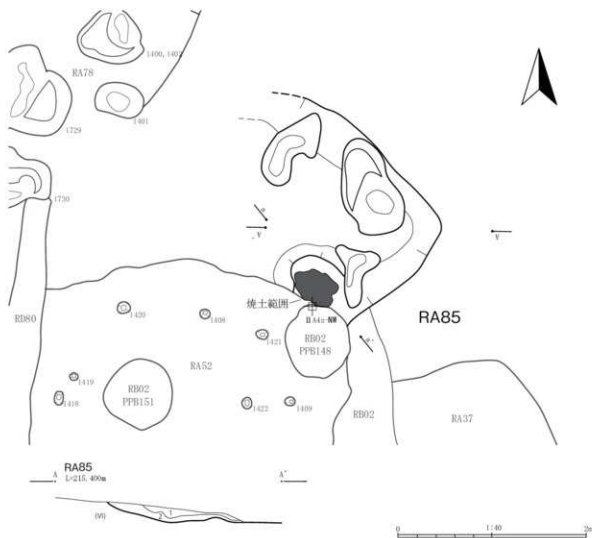
0. 掘残土

1. 10YR4/4-6 褐色、シルト、粘性やや有、粘まりやや硬。

2. 10YR4/6 褐色、シルト、YP 片少、YI 層内堆積。

※平面形は方形、西平路、掘残土により乱され崖面に小凹み、北西隅トレンチで破損、西壁流失。

2 遺構

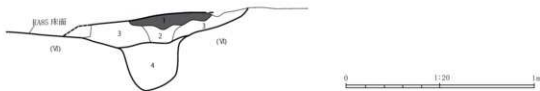


RA85

1. 10YR2.4 暗褐色 シルト、粘性ややや、締まりややや。
2. 10YR1.4-1.6 褐色 シルト、粘性ややや、締まりややや。

帯状側コーナー付近のみ壁が残存する住居。コーナーの形状から方形を呈するものと見られる。床面は特に壁際で凹凸が著しい。南東側を向く壁面に焼土生成。柱穴配置は不明。

RA85 焼土

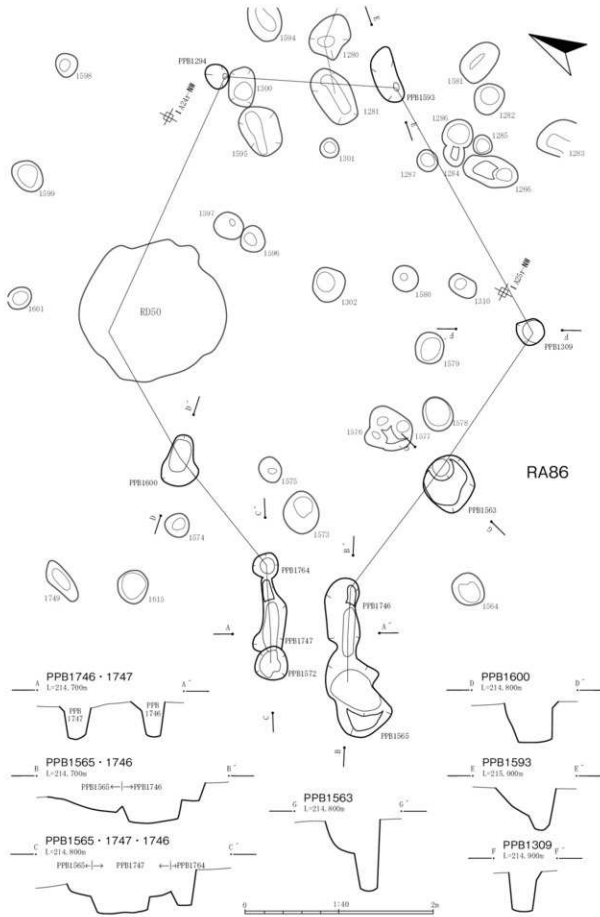


RA85 焼土

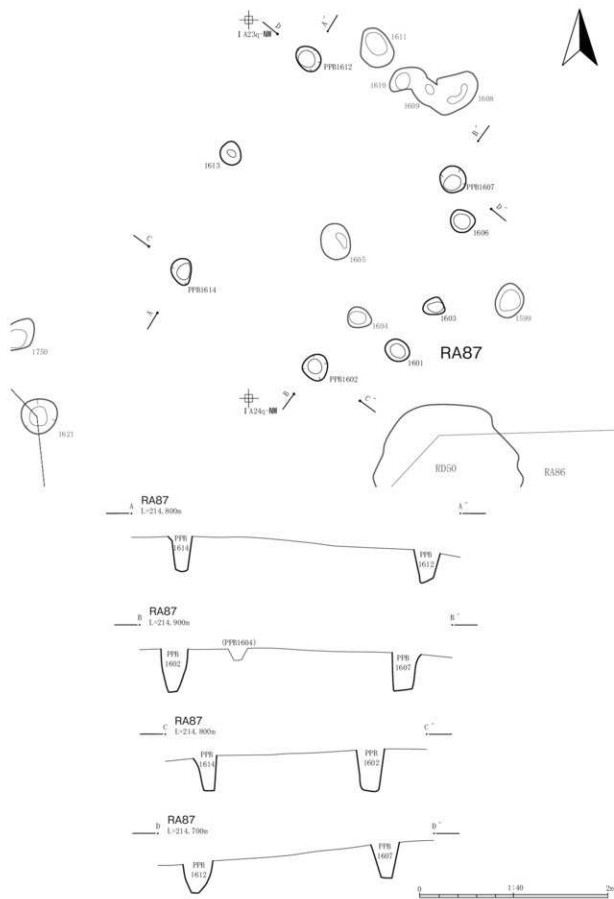
1. 7.5YR4.6 褐色 シルト、焼土、粘性ややや、締まりややや、3の上面に生成の焼土。
2. 10YR2.4 暗褐色 シルト、粘性ややや、締まりややや、3より凹凸い。
3. 10YR1.4-1.6 褐色 シルト、粘性ややや、締まりややや、V.L.ズロックややや。
4. 10YR1.6 褐色 シルト、粘性ややや、締まりややや、ゴソゴソ。

東RA85の南東側を向く壁際に焼土生成。本住居は壁際にやや大きな起伏（凹凸）があり、3層はこれらの凹凸を埋めて均した層り方壁土の可能性もある。したがって、1層の焼土は、住居床面と同様の面に生成されたものとみなすことができる。他例と同様に床面より一段高位置に生成するものである。4層は3層に覆われる層であり、断面は不明。

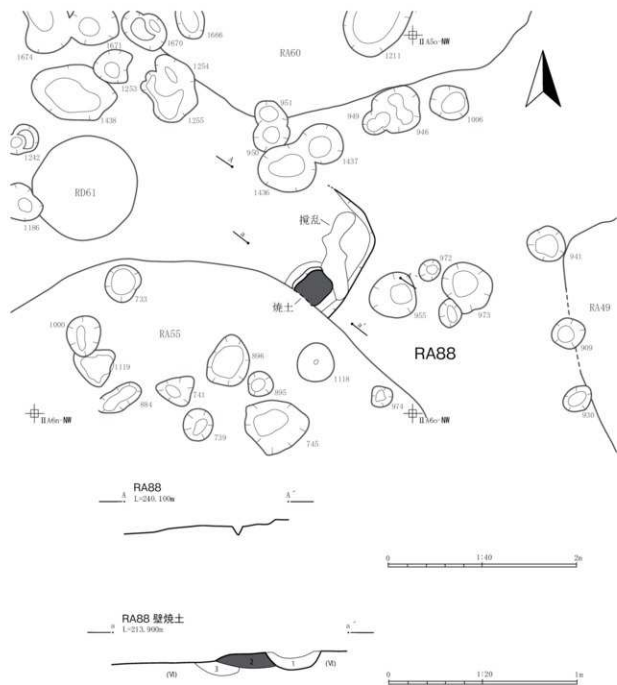
第127図 RA85



第128図 RA86



第129回 RA87



RAB8 壁焼土

1. 10YR3/4 緑褐色。シルト、粘性有。締まりやや密。壁際に沿って焼土を切っている。
2. 7.5YR4/6 褐色。シルト、焼土、粘性有。締まりやや密。棕色灰いが壁腹に乱されている。
3. 10YR4/4 褐色。シルト、粘性やや有。締まり密。R1と同じく穴を受けている。掘り方焼土ホウ

※RAB8 南東向き壁際の焼土。生成面はマウンズ状（フラス状）に床面より高い。

(2) 方形柱穴列

R B01配石・敷土を伴う方形柱穴列 (第131～133図、写真図版94～97)

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 4 mグリッド付近に位置する。IV層上面（III層下面）において、2つの近接した焼土とその周囲に広がる明瞭な黄褐色土範囲として検出された。黄褐色土範囲の周縁には部分的に列状に並ぶ礫も確認された。さらに精査の過程において黄褐色土範囲全体を面的に掘り下げたところ、黄褐色土が6箇所の円形範囲に収斂し、これらが長方形に配列することが判明した。〔柱穴列〕長方形（南-北2間・東-西1間）に並ぶ6個の大形柱穴で構成される（PPA29～34）。柱穴列の外端長は、東辺・西辺が480cm、北辺400cm、南辺340cmである。南東隅のPPA32のみが若干内側（西側）に寄っているため、北辺に比して南辺がやや短い。主軸方位はN-1°-Eで、RA13と同様、意識的に南北方向に揃えられたものと考えられる。柱穴はいずれも径80cm前後、深さは約120cm。柱配置から推定される柱間寸法は、南北（桁行）が210cm前後、東西（梁行）が300cm前後である。柱穴の底面には径15～20cmほどの柱当たりが認められることから、柱材の設置が行われたことは明らかであり、PPA29・同31の断面には、掘方埋土と柱痕跡様の土層の立ち上がりが見られる。ただし、いずれの柱穴においても埋土は総じて締まりを欠き、開口部が掘り広げられていること等も考慮すれば、後に柱材の抜き取りが行われたものと判断される。断面に観察される柱痕跡の土層は、抜き取りによって生じた空隙に掘方埋土の崩壊土や地表からの流入土が二次的に堆積したものと思われる。また、壁面に沿って所々に観察された掘方埋土も、痕跡的に残存した部分と考えられる。柱材の抜き取り後は上記のようにして埋没が進み、開口部付近は播鉢状の凹みとなつたらしい。この凹みはその後黄褐色土に被覆され埋没を終えている。黄褐色土の敷き均し行為については以下に詳述する。

〔敷土範囲〕黄褐色土範囲は570×540cmの不整隅丸方形を呈する。VI層の掘削によって得られた黄褐色土を、意図した範囲に敷き均したものである。

上記柱穴に柱材が設置されたままの状態での敷き均しが行われたとすれば、その後の柱材の腐朽や除去に伴い空隙に黄褐色土が崩落・流入するはずだが、そのような痕跡は認められない。断面図及び写真にも明らかなように、開口部付近にのみ沈み込んだように堆積する黄褐色土は、そのままプラン全体に広がる敷土と断絶なく連続している。したがって、敷土行為が開始された時点においては、すでに柱材はなく、柱穴はそれぞれ半埋没の凹地状となっていて、全体への敷土行為と同時に埋め均されたものとみられる。

プラン全体においては、敷土層下面はごく浅い凹地状を呈しており、厚さ10cm程度に埋め均された黄褐色土層は、周縁に向かって緩やかに層厚を減じている（A-A'・B-B'：3層）。下位層との層界（下面）は不明瞭で不規則な凹凸を持ち、縁部に壁らしい立ち上がりは認められない。掘方を充填したというより敷土範囲が沈み込んだかのようにも思われる。

このように、敷土層の下面は不安定であり、黄褐色土の堆積（敷き均し）以前に、住居床面のような用いられ方をしたとは考えにくい。また、敷土層は上面・下面ともに自然地形に沿って西側に傾斜しており、東縁部と西縁部の比高は20cm程となっている。東縁部だけでなく斜面下方の西縁部でも礫やその痕跡が遺っており、遺構上面は相当程度本来の面を遺していると判断されることから、遺構上面が傾斜するのをもまた本来の姿であると考えられる。

本遺構の構築面はIV層中に相当し、黄褐色土層（VI層）までは分厚い暗褐色～黒色土層（Va層等）が存在するが、敷き均された黄褐色土には黒ボク土の混入が全く見られず、また黄褐色土自

体もブロック状を呈する部分がほとんど認められない。黄褐色土は他の地点で確保・精選され、「敷土材」としてここに用いられたと考えられる。なお、この黄褐色土は、敷土範囲の周縁に配置された石列の掘方にも連続して入れられている。石列（配石）については下記のとおりである。

〔配石〕黄褐色土範囲の東辺に沿って直線的に並べられた石列が確認されている。長さ30～50cm程度の角礫が長軸を連ねるように並べられている。列をなして残存するのは東辺のみだが、南辺及び西辺にも点々と礫がのこり、これらに連なるように礫の抜けた痕跡（Ⅲ層土の入る凹み）も認められることから、本来は敷土範囲の縁部全周に礫が配置されていた可能性が高いと考えられる。礫の掘方は小穴状・溝状で、その底面に並べ置かれた後に周囲を黄褐色土で埋められ、上半部が地上に露出するように掘えられたらしい。礫の掘方は敷土範囲の周縁に沿って分布し、東辺と南辺、西辺南半ではごく浅い溝状を呈している。西辺には小穴状の掘方も南北方向に並んでいる。礫掘方の黄褐色土と敷土範囲全体のととの間に先後関係は認められず、黄褐色土の敷き均しと礫配置は同時に行われたものと考えられる。

〔焼土〕敷土範囲の中央部において、主軸上に2基並ぶ焼土遺構が検出された。生成面は敷土層上面である。いずれも南北にやや長い楕円形で、北側の焼土aは132×98cm、南側の焼土bは116×88cmと大きく、厚さも15cm前後に及び、強い火熱の痕跡であることを窺わせる。焼燃面は斜面下方の西側がやや削られている。

〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。

- ① 6つの大形柱穴の掘削。
- ② 柱材設置、掘方の埋め戻し。
- ③ 柱材の撤去、空隙への堆積。
- ④ 礫配置のための溝状・小穴状の掘方、黄褐色土敷き均し範囲全体のごく浅い掘方の掘削。
- ⑤ 礫配置及び黄褐色土敷き均し。
- ⑥ 敷土範囲中央上面での焼燃行為。

柱穴列（掘立柱建物？）としての段階（①～③）と、その「跡地」が黄褐色土と配石で可視化された段階（④～⑥）に大別される。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。

〔出土遺物〕土器（368～374）〈第219図、写真図版169〉。

円盤状土製品（1189）。石匙（2009）、甕状石器（2104・2105）、敲磨器類（2391）。

R B02敷土を伴う方形柱穴列（第134～136図、写真図版98・99）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 4 r グリッド付近に位置する。IV～V a 層上面（Ⅲ層下面）において、焼土遺構とその周囲に広がる明瞭な黄褐色土範囲として検出された。さらに精査の過程において黄褐色土範囲全体を面的に掘り下げたところ、黄褐色土が4箇所に収斂しこれらが概ね方形に配列することが判明した。

〔柱穴列〕方形に並ぶ4個の大形柱穴で構成される（PPA148～151）。柱穴列の外端長は、330×270cm、長軸方位はN-13° -W（短軸N-77° -E）である。柱穴は径60～80cm程、深さは約130cm、柱配置から推定される柱間寸法は270×210cm程である。これらの柱穴は皿状の掘り込み（1-4層下面）の内部に配置されている。この掘り込みは、平面形が520×500cmの円形～隅丸方形に近い不整形で、検出面からの深さは20～30cmである。底面は凹凸が目立ち、縁部の立ち上がりも判然としない。また、

掘り込みの埋土と底面の境界は不明瞭で、地表面からの流入土層も見られず、住居跡の掘方埋土（貼床）に似た、掘削土をそのまま均したような様相である。よって掘り込み埋土の下面が住居の床面のような用いられた方をしたとは考えにくく、柱穴掘削とはほぼ同時に掘削され、柱材基部の埋設に伴い、柱穴と共に埋め戻されたものである可能性が高い。D-D断面右側のPPA150付近の堆積状況を見ると、柱材設置の際の堆積土とみられる1.5層に続いて、これに酷似する1.4層が堆積し、その後、柱穴の上部が掘り広げられ柱材が抜き取られた様子（1.2・1.3層）が見て取れる。柱穴の埋土はいずれもボソボソとして締まりを欠いている。柱材の抜き取り後は崩落土等によって埋没し、最終的に開口部付近は漏斗状の凹みとなったらしい。この凹みはその後黄褐色土（1.2層）に被覆され埋没を終えている。黄褐色土の敷き均し行為については下記。

〔敷土範囲〕残存する敷土範囲は径約480cmの略円形を呈する。敷土層の厚さは5～10cm。部分的に削平を受けており、本来は南東側にさらに広がっていたものとみられる。Ⅵ層の掘削によって得られた黄褐色土を、意図した範囲に敷き均したと思われる（1.2層）。敷土には旧表土（黒色系の土壌）が混入しないことから、精選された黄褐色土が「敷土材」として用いられたと考えられる。敷土層と下位層との層界は不明瞭で不規則な凹凸を持ち、縁部に明瞭な立ち上がりも認められない。また上面・下面ともに自然地形に沿って西側に傾斜し、東縁と西縁の比高は20cm程となっている。このように敷土層の下面は不安定であり、黄褐色土の敷き均し前に内部が住居床面のような用いられた方をしたとは考えにくい。なお、柱材の抜き取りが行われた後の柱穴は、この時点でそれぞれ半埋没の凹地となったかと思われる。これらは全体への敷土行為と同時に埋め均されている。

〔焼土〕遺構の中央付近において、敷土層上面を生成面とする焼土が検出された。126×94cmの楕円形、厚さ10cmで、規模の大きなものである。赤変は顕著だが、本来の燃焼面は若干の削平（流失）を受けている可能性が高く、硬化部は認められなかった。

〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。

- ①4つの大形柱穴及び柱穴列構築範囲の掘り込み掘削。
- ②柱材設置、柱穴列構築範囲の掘り込みの埋め戻し。
- ③柱材の撤去、空隙への再堆積。
- ④敷土範囲の掘り込み掘削（?）。
- ⑤黄褐色土敷き均し。
- ⑥敷土範囲中央上面での燃焼行為。

柱穴列（掘立柱建物?）としての段階（①～③）と、「跡地」が敷土によって可視化された段階（④～⑤）に大別される。

〔重複〕RA37・RA38を切り、RG04・RD80に切られる。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。

〔出土遺物〕土器（375・376）〈第219図、写真図版169〉。

鐙形土製品（1168）。石鏃（1565～1571・1733・1963）、石匙（1990・2003）、敲磨器類（2726）、自然礫（2832）。

R B03敷土を伴う方形柱穴列（第137・138図、写真図版100・101）

〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡA2 s グリッド付近に位置する。Ⅳ～Ⅴa層上面（Ⅲ層下面）において、焼土遺構とその周囲に広がる明瞭な黄褐色土範囲として検出された。さらに精査の過程において黄褐色土範囲全体を面的に掘り下げたところ、黄褐色土が4箇所に収斂しこれらが概ね方形に配列することが判明した。

〔柱穴列〕長方形に並ぶ4個の大形柱穴で構成される(PPA152～155)。柱穴列の外端長は、300×240cm、長軸方位はN-9°-W(短軸N-86°-E)である。柱穴は径70～80cm、深さは100～130cm、柱配置から推定される柱間寸法は約210×180cmである。これらの柱穴は、皿状の掘り込み(1-4層下面)の内部に配置されている。平面形は430×420cmの円形～隅丸方形で、検出面からの深さは20cm前後。底面は概ね滑らかなが、自然傾斜に沿って西向きに緩やかに下っている。斜面下方の西半部では流失により立ち上がりが判然としなが、東半部では内弯しながらごく緩やかに立ち上がる壁面が認められる。この掘り込みの埋土はVI層土ブロックを含む暗褐色土を主体としており、自然の流入土層等を挟みせずに、上部までを一律に埋めている。住居跡の掘方埋土(貼床)によく似た、掘削土をそのまま均したような様相である。掘り込みの下面が住居床面のように用いられた痕跡は一切なく、柱穴掘削と同時的掘削され柱材基部の埋設に伴って柱穴と共に埋め戻されたものと考えられる。さて土層断面に見られるように、4つの柱穴はこの掘り込みの埋土を上方から切っている。いずれの柱穴でも開口部が後に掘り広げられており、埋土は締まりを欠いている。これらを考慮すれば、同種の他遺構と同様に、柱材の抜き取りが行われたと考えられる。抜き取り後の空隙は崩落土等によって埋没し、最終的に開口部付近は播鉢状の凹みとなったらしい。この凹みはその後黄褐色土(1-2層)に被覆され埋没を終えている。黄褐色土の敷き均し行為については下記。

〔敷土範囲〕柱穴が配置された掘り込みの埋土の上位を被覆している。全体的に削平を受けており、特に縁部ほど境界が不明瞭となっているが、径約440cm程度の不整形範囲に残存している。層厚は厚いところで約10cm程度。用いられた黄褐色土はVI層の掘削によって得られたとみられ、これを意図した範囲に敷き均したと考えられる(A-A'・B-B':3層)。敷土には旧表土(黒色系の土壌)が混入しない。精選された黄褐色土が「敷土材」として用いられたと思われる。敷土層の下面は不規則な凹凸を持ち下位との層界も不明瞭ある。よって黄褐色土が敷き均される前段階に、内部が住居床面のような用いられ方をしたとは考えにくい。なお、柱材の抜き取りが行われた後の柱穴は、それぞれ半埋没の凹地となつたいたと考えられる。これらは全体への敷土行為と同時に埋め均されている。

〔焼土〕遺構の中央付近において、敷土層上面を生成面とする焼土が検出された。径98cmの略円形、最大16cmと、規模の大きなものである。赤変は顕著だが、本来の燃焼面は若干の削平(流失)を受けている可能性が高く、硬化部は認められなかった。

〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。

- ① 4つの大形柱穴及び柱穴列構築範囲の掘り込み掘削。
- ② 柱材設置、柱穴列構築範囲の掘り込みの埋め戻し。
- ③ 柱材の撤去、空隙への再堆積。
- ④ 敷土範囲の掘り込み掘削(?)。
- ⑤ 黄褐色土敷き均し。
- ⑥ 敷土範囲中央上面での燃焼行為。

柱穴列〔掘立柱建物?〕としての段階(①～③)と、「跡地」が敷土によって可視化された段階(④～⑤)に大別される。

〔重複〕RA36を切る。また南縁部に重複するRD63は、本遺構の精査後に検出されたものであるが、埋土上部には本遺構から連続する黄褐色土が堆積している。構築時期の先後関係は明らかでないが、本遺構における敷土行為の直前段階にはRD63は半埋没の凹地状となっており、本遺構への敷土行為に伴い同時に埋め均されたと考えられる。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。

〔出土遺物〕土器（377・378）（第219図、写真図版169）。

磨石器類（2603）、自然礫（2833・2834）。

R B04敷土を伴う方形柱穴列（第139・140図、写真図版102）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 25 s グリッド付近に位置する。RA33の床面においてVI層土類似の黄褐色土を埋土とするピットを確認。黄褐色土の敷き均しを伴う方形柱穴列の可能性があると判断して周囲を検索し同様のピットを検出した。

〔柱穴列〕長方形に並ぶ4個の柱穴で構成される（PPA156・157・159・160）。柱穴列の外端長は280×250cm、長軸方位はN-27°-W（短軸N-63°-E）である。柱配置から推定される柱間寸法は約180×180cm。柱穴は開口部が径80～110cmだが、下部で狭まり底面径は20cm強となっている。開口部が広がるのは、後に柱材の抜き取りが行われたためと考えられる。抜き取り後の空隙は流入土等によって堆積が進み、開口部付近は挿針状の凹みとなったらしい。この凹みはその後、遺構範囲に敷き均された黄褐色土に被覆され埋没を終えている（敷土行為については後述）。柱穴は上部をRA33・RA34の下面に切られ、また、全体的に後世の削平を受けており、残存深度は60～70cmほどとなっている。なお、他の類似遺構において確認されている、柱穴配置範囲全体の掘り込みは、同様の理由により面的には確認できなかった。ただし遺構範囲の北部では検出面にVI層土ブロックを含む人為堆積層の広がり認められ、土層断面にも遺構範囲の縁部が掘り下げられている痕跡が確認された（A-A'：2層）。詳細は不明であるが、本遺構においても、柱穴掘削時と共に範囲全体の掘り下げが行われた可能性がある。

〔敷土範囲〕本遺構の一部をRA33等に切られ、また全体が後世の削平を受けているため、類似する他遺構のように、敷土範囲は面的には残存しない。しかしながら、柱穴の埋土上部には精選された黄褐色土が充填されていることから、類似する他遺構と同様、本来は敷土が施されていた可能性が高い。

〔焼土〕柱穴列の南部、PPA160に近接した位置から、焼土ブロックを多く含むピット（PPA158）が検出され、精査の結果、燃焼面の中央がやや凹んだ焼土遺構であることが判明した。径65cmの円形で、焼土の厚さは8cmである。周縁には部分的に礫が残存し、礫の掘方と思われる痕跡も認められることから、本来は石囲炉だったとみられる。上述のとおり、本遺構は上部をRA33等によって削平されており、検出面はRA33の底面にあたることから、この炉跡が本遺構に伴う可能性は低い。ただし、RA33に伴う炉跡は別に確認されており、敷土がなされる以前に本遺構内部に構築されていた炉である可能性は否定できない。

〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。

- ① 4つの柱穴及び構築範囲の掘り込み掘削（？）。
- ② 柱材設置、柱穴列構築範囲の掘り込みの埋め戻し（この時点で石囲炉伴うか）。
- ③ 柱材の撤去、空隙への再堆積。
- ④ 敷土範囲の掘り込み掘削（？）。
- ⑤ 黄褐色土敷き均し（敷土上面での焼土生成の有無は不明）。
- ⑥ RA33・RA34が上位に構築される。
- ⑦ 全体的に削平・流失を受ける。

柱穴列（掘立柱建物？）としての段階（①～③）、「跡地」が敷土により可視化された段階（④～⑤）、遺構上部が失われた段階に（⑥～⑦）に大別される。

〔重複〕RA36を切り、RA33・RA34に切られる。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。

〔出土遺物〕石匙（2004）、石錐（2087）、敲磨器類（2653）。

R B05方形柱穴列（第141図）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 8 m グリッド付近に位置する。V b～VI層上面において検出された柱穴である。それぞれの柱穴は個別に精査をすすめ、記録後に配置の検討を加えた結果、方形柱穴列を構成すると認めるに至ったものである。

〔柱穴列〕ほぼ方形に並ぶ4個の柱穴で構成される（PPB512・519・702・703）。柱穴列の外端長は340×320cm、長軸方位はN-54°-E（短軸N-36°-W）である。柱配置から推定される柱間寸法は約270×260cm。柱穴は開口部が径36～58cm、検出面からの残存深度は52～70cmである。埋土はV a層相当の黒褐色土とIV層類似の暗褐色土を主体とする。

〔重複〕東隅のPPB702がRD56を切る。また、北隅のPPB703がRD54を切る。

〔遺構の時期〕出土した土器の年代観と埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。

〔出土遺物〕縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての土器小片（不掲載）が出土している。

R B06方形柱穴列（第142図、写真図版103）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 25 p グリッド付近に位置する。V b～VI層上面において検出された。柱穴と思われる4つの略円形範囲が方形に配列していることから、方形柱穴列の可能性のあるものと判断し精査着手した。

〔柱穴列〕ほぼ方形に並ぶ4個の柱穴で構成される（PPB1101～1104）。柱穴列の外端長は296×290cm、長軸方位はN-29°-W（短軸N-61～69°-E）である。柱配置から推定される柱間寸法は、PPB102-104間で240cm、その他は210cmである。北東側の一辺がやや広がっている。柱穴は、開口部が径80×50cmほどの楕円形、下部が窄まって底面径は20cm前後となっている。残存深度は30～40cm。全体に播鉢形を呈しており、柱材の抜き取りが行われたものとみられる。南西に下る自然地形に沿って、柱穴の底面標高にも差違が生じており、北端のPPB1102と南端のPPB1103の比高は約20cmとなっている。埋土はV a層相当の黒褐色土とIV層類似の暗褐色土を主体とする。

〔重複〕北隅のPPB1102はRA76張出部の掘方埋土を切っている。このほか周辺には多数の柱穴が存在するが、これらと本遺構との先後関係は確認できていない。

〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

R B07方形柱穴列（第143図）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 9 n グリッド付近に位置する。V b～VI層上面において検出された柱穴である。それぞれの柱穴は個別に精査をすすめ、記録後に配置の検討を加えた結果、規模及び配列から方形柱穴列を構成すると認めるに至ったものである。

〔柱穴列〕概ね長方形に並ぶ4個の柱穴で構成される（PPB466・469・480・481）。柱穴列の外端長は335×272cm、長軸方位はN-43°-W（短軸N-47°-E）である。柱配置から推定される柱間寸法は、長軸方向270cm、短軸方向200cmである。柱穴は、開口部が径80×70cmほどの楕円形、底面径は30cm前後となっている。残存深度は100～110cm、底面レベルは4個ともほぼ共通する。南西側の2個は上半部の壁が広がっていることから、柱材の抜き取りが行われた可能性がある。埋土はV a層相当

の黒褐色土とIV層類似の暗褐色土を主体とする。

〔重複〕RA31・40を切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。

〔その他の所見〕柱穴規模や柱間寸法は敷土を伴うRB02・03・04によく似るが、V a層下面付近まで掘り下げてから検出したものであるため、敷土の存否は確認できなかった。

〔出土遺物〕土器（379・380）〈第219図、写真図版169〉。

RB08方形柱穴列（第144図）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 8 1 グリッド付近に位置する。V b～VI層上面において検出された柱穴である。それぞれの柱穴は個別に精査をすずめ、記録後に配置の検討を加えた結果、規模及び配列から方形柱穴列を構成すると認めるに至ったものである。

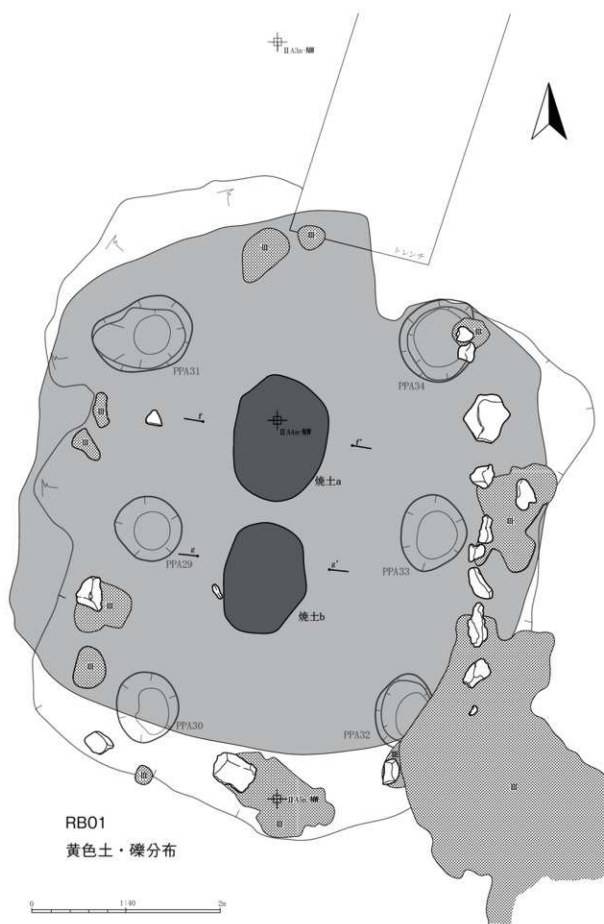
〔柱穴列〕概ね長方形に並ぶ4個の柱穴で構成される（PPB522・568・570・572）。柱穴列の外端長は275×265cm、長軸方位はN-21°-W（短軸N-69°-E）である。柱配置から推定される柱間寸法は、210×210cmである。柱穴は、開口部が径48～60cmの略円形で、底面径は35cm前後、残存深度は60～70cmである。底面標高は、北側の二つ（PPB568・570）がおおよそ揃っているのに対し、南東隅のPPB522は、これらに比して約35cm高い。同様に南西隅のPPB572も15cmほど高くなっている。柱穴底面の標高差は、遺構周辺の自然傾斜（構築面の傾き）と同調していることことから、底面標高を同一にすることよりも、各柱穴の構築面からの深さを揃えることに注意が払われた結果とも考えられる。柱穴の埋土は、V a層相当の黒褐色土とIV層類似の暗褐色土が主体であった。

〔重複〕RA32・41を切っている。

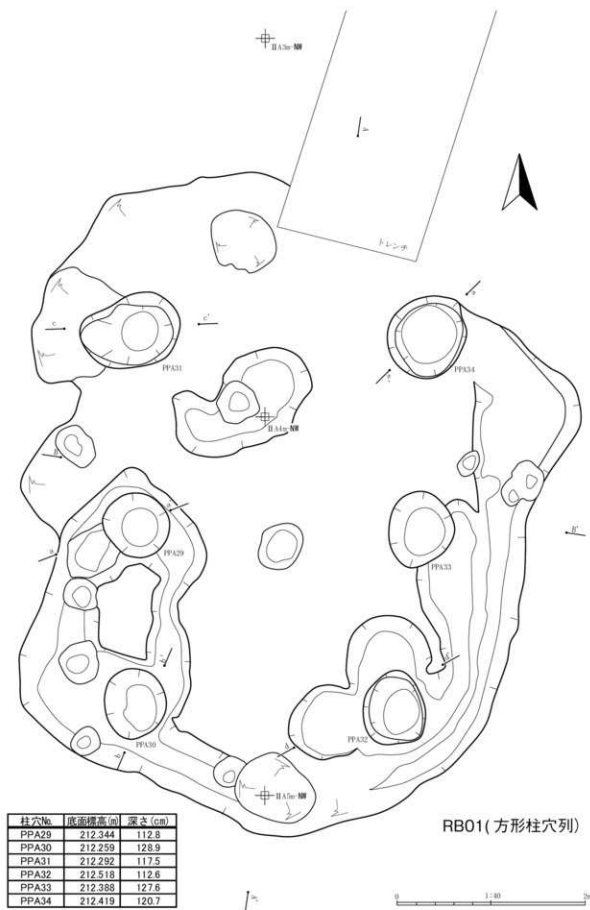
〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。

〔その他の所見〕柱穴規模や柱間寸法は敷土を伴うRB02・03・04によく似るが、V a層下面付近まで掘り下げてから検出したものであるため、敷土の存否は確認できなかった。

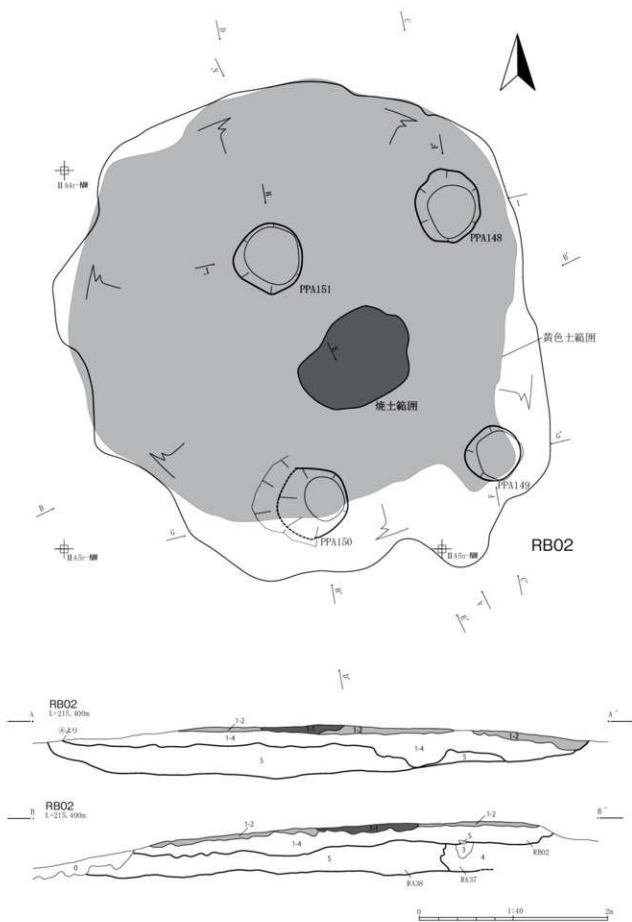
〔出土遺物〕土器（381～383）〈第219図、写真図版169〉。



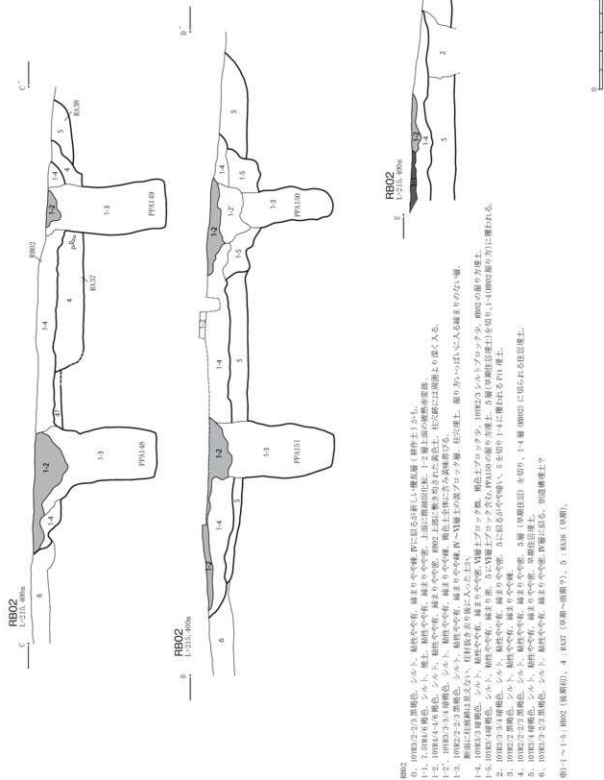
第131図 RBO1平面（礫・黄色土・焼土分布）



第132図 RB01平面(掘方完掘)



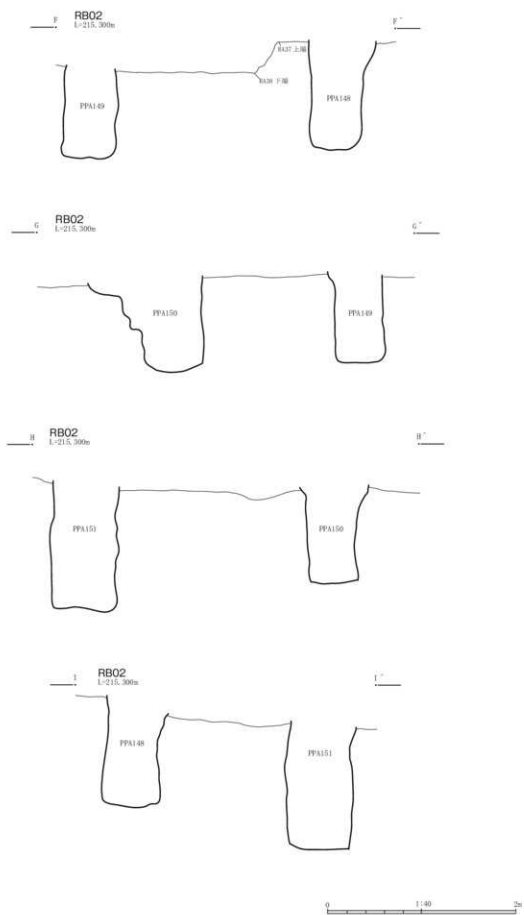
第134圖 RB02



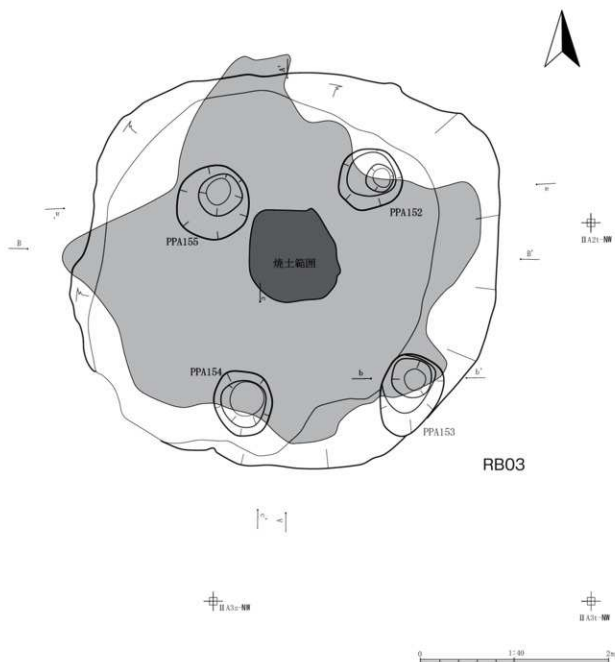
RB02 10923-25 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、厚さ約10cmの土層に埋入した横長楕円（厚約1.5m）の土坑。

- 1-1, 10934-3 赤褐色、シルト、粘土、粘状土含有、層より中下部、厚さ約10cmの土層に埋入した横長楕円土坑、土層上部の遺物集積層。
- 1-2, 10934-4 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、厚さ約10cm、RB02 上部に集まりおぼれた黄土土、石灰質には割層より盛く入る。
- 1-3, 10923-25 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、黄土土全体に含む異状層移行。
- 1-3, 10923-25 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、IV-V層土の底にゴックタテ、石火石土、層りおぼれた土層に埋入した横長楕円土坑。
- 1-4, 10923-3 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、V層土の底にゴックタテ、石火石土、層りおぼれた土層に埋入した横長楕円土坑。
- 1-5, 10923-4 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、V層土の底にゴックタテ、石火石土、層りおぼれた土層に埋入した横長楕円土坑。
- 2, 10923-3-3 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、土に埋入した横長楕円土坑、PP1018の層り方層土、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑。
- 3, 10923-2-2 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、土に埋入した横長楕円土坑、PP1109の層り方層土、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑。
- 4, 10923-2-2 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑、PP1109の層り方層土、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑。
- 5, 10923-4 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑、PP1109の層り方層土、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑。
- 6, 10923-3-2 赤褐色、シルト、粘状土含有、層より中下部、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑、PP1109の層り方層土、5層（厚約10cm）に埋入した横長楕円土坑。

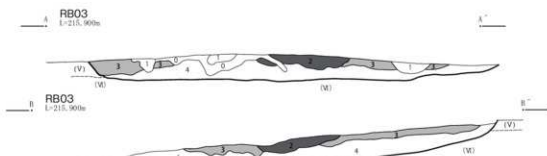
第135図 RB02断面（1）



第136図 RB02断面(2)



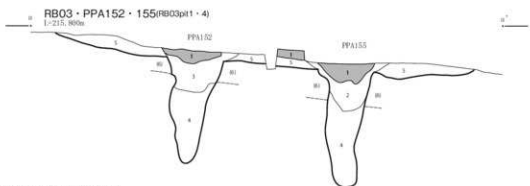
第137図 RB03平面



RB03

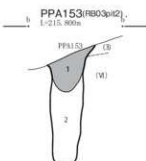
0. 板礎痕
1. 10YR3/2-3 暗褐色-黒褐色。シルト。粘性やや有、締まりやや硬、褐色粒子微塵、層層に散在。
2. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性やや有、締まりやや硬、層層上部が攪拌し生成したもの。
3. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性やや有、締まり密、褐色均された黄土土。
4. 10YR3/3-4 暗褐色。シルト。粘性やや有、締まり密、褐色土ブロック含みや黄味。

寄附穴状の断面込みをもつ4本柱遺構。柱材設置時高直面が、4層下面(張り方直面)が、上面が、暫然としない(以下参照)。張り方の底面は周囲の地層と同方向に下る傾向有り。床面らしい硬化層はなく、埋土との境界は不明瞭。上面に産物・灰化物等の面的な分布もない。底面に付いた、柱状上部に4層(の崩落土?)の痕跡がみられることから、柱材表面の炭層(腐蝕)にはすでに4層は堆積していた(埋められた)と考えられる。これらから、4層下面(張り方直面)を床面とした構造物とは考えづらい。3層の黄色土は、柱材除去後、その痕跡が埋まりきらないうちに、遺構範囲全面に敷きならされている。埋土は3層上面の燃焼行為によって生成したものである。



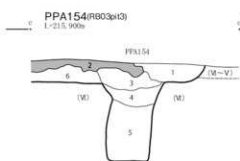
RB03・PPA152・155(RB03pit1・4)

1. 10YR4/4-6 褐色。シルト。粘性やや有、締まり密、遺構範囲に敷き均された黄土土。
2. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有、しまりやや硬、VI層土を全体に含みや黄味帯びる。
3. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有、しまりやや硬、VI層土ブロック(径20~30mm)・4断面6層土ブロック少量含む、隣接層に比して全体に黒味強。
4. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有、しまりやや硬。
5. 10YR3/2-3 暗褐色。シルト。粘性やや有、しまりやや硬。地点によりVI層土ブロック含む。
6. 10YR2/2-3 黒褐色。シルト。下位の早期住居埋土土。



PPA153(RB03pit2)

1. a=a' の4層に同じ。
2. a=a' の4層に同じ。
3. a=a' の6層に同じ。

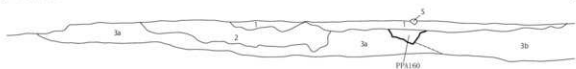
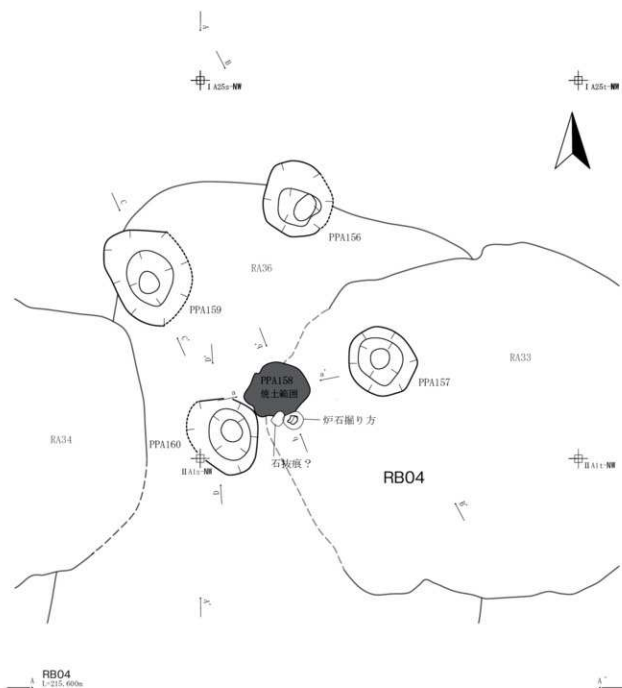


PPA154(RB03pit3)

1. 10YR3/2-3 暗褐色-黒褐色。シルト。粘性やや有、締まりやや硬、層層上部が攪拌し生成したもの、石灰質?
2. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性やや有、締まり密、黄色土。
3. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有、しまりやや硬、VI層土ブロック少量含む、全体やや黄味。
4. 10YR4/4 褐色。シルト。3よりVI層土ブロック多く、黄味強い。
5. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有、締まり密。
6. 10YR3/3-4 暗褐色。シルト、VI層土ブロック少量。

0 1:40 2m

第138図 RB03断面



RB04

1. D²のI層に同じ。
2. 10YR2/2.2の黒褐色。シルト。黄褐色土ブロック(径10～50mm)ややま。粘性やや有。締まり密。(RB04の掘り方が)
- 3a. 10YR2/3黒褐色。シルト。3aに似るがやや明るい。Vb層の
- 3b. 10YR2/2黒褐色。シルト。Vaに似る。

各後の調査で、3a・3bは早期住居跡RA36埋土と判明。

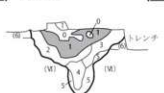


RB04・PPA156・157(RB04p11・2)

- 10R2/3-2/3 黒褐色 シルト、粘性やや有、締まり密、RA33の底面を構成する層（締り方硬土）。
- 本層がRB04の柱穴上面に入る黄褐色土を被覆していることから、RB04はRA33より古いといえる。柱穴は上部を削平されている。
- 10R5/6-4/6 黄褐色・褐色 シルト、粘性有、締まり密、柱穴上部を埋めている黄褐色土。
- 10R3/3-2/3 黒褐色 シルト、粘性やや有、締まりやや密、黄褐色土ブロック少量含む。
- 10R3/3-2/4 暗褐色 粘土質シルト、粘性やや有、締まり密、2が覆ったような土。
- (5) 10R3/3-2/3 黒褐色 シルト、粘性やや有、締まり密。

※RB04は4本柱遺構、上部をRA33・RA34等の暗褐色理土に知られている。本来は他例と同様プラン内に黄色土の敷き均しが施されていた可能性が高い。柱穴は上半部が扁平状にひらき、いずれも同様の堆積状況を示している。

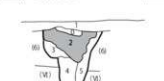
PPA159(RB04p14)



PPA159(RB04p14)

0. 遺構乱
1. B-B'の2層に同じ。
2. 10R3/3-2/3 黒褐色 シルト、粘性やや有、締まり密、VI層土ブロック少量含む。
3. 2に似るが2よりVI層土ブロック多量。
4. 10Y4/6 褐色 シルト、1に似るがやや強い。
5. B-B'の4層に同じ。本遺構の4層より強い。
- (6) B-B'の5層に同じ。

PPA160(RB04p15)



PPA160(RB04p15)

0. 遺構乱
1. 10R2/3-3/3 黒褐色 シルト、粘性やや有、しまりやや密、RA34の理土から連続する暗褐色土。
- 2を被覆（本p11を切っている）
2. B-B'の2層に同じ。
3. B-B'の3層に同じ。
4. 10R2/2-2/3 黒褐色 シルト、粘性やや有、しまりやや密、VI層小ブロック少量（柱筋跡?）
5. 4に似るが、4よりVI層土ブロック多。
- (6) B-B'の5層に同じ。

0 1:80 2m

RB04・PPA154(RB04p13) 炉



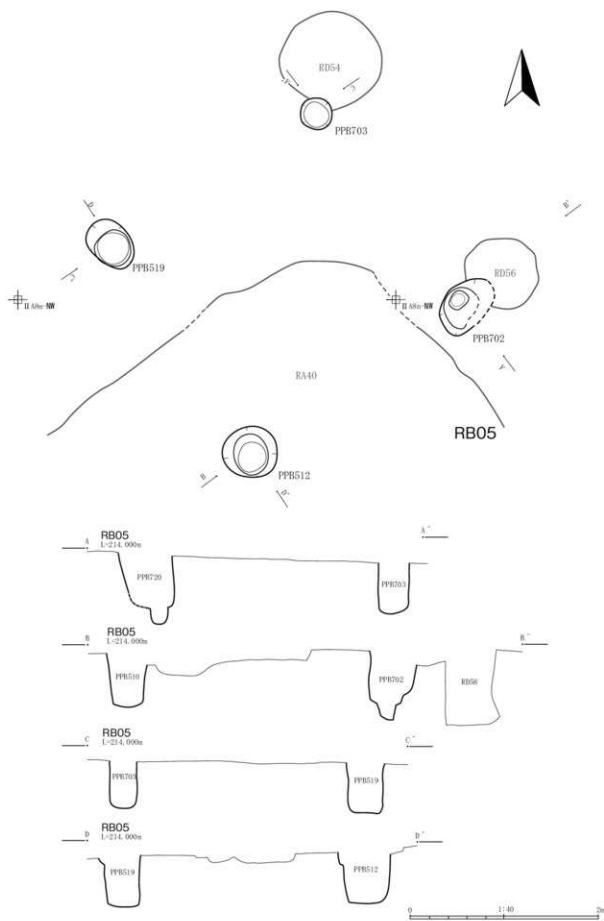
RB04・PPA154(RB04p13) 炉

1. 7.5R4/4 褐色 シルト、粘性中～やや有、締まりやや密、くぼんだ焚火跡に堆積した土層。断面には粘土が細粒0.4(1～2mm程度)土層片が3～5%含む。炭化粒2%。
- 3.5R4/6 赤褐色 シルト、粘性無、締まり密、炭化層。
3. 7.5 R3/2 赤褐色 シルト、粘性無、締まり密、焼熟層に知られるR7土の崩方便土。
- (4) 7.5R2/3 黒色 シルト、粘性中～やや有、締まりやや密、(RA36 理土)。

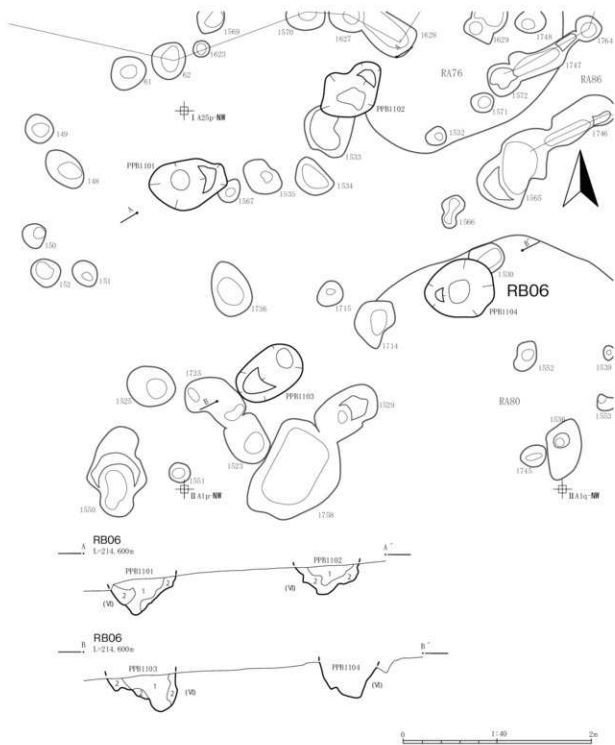
RB04・PPA154(RB04p13) 炉



0 1:20 2m



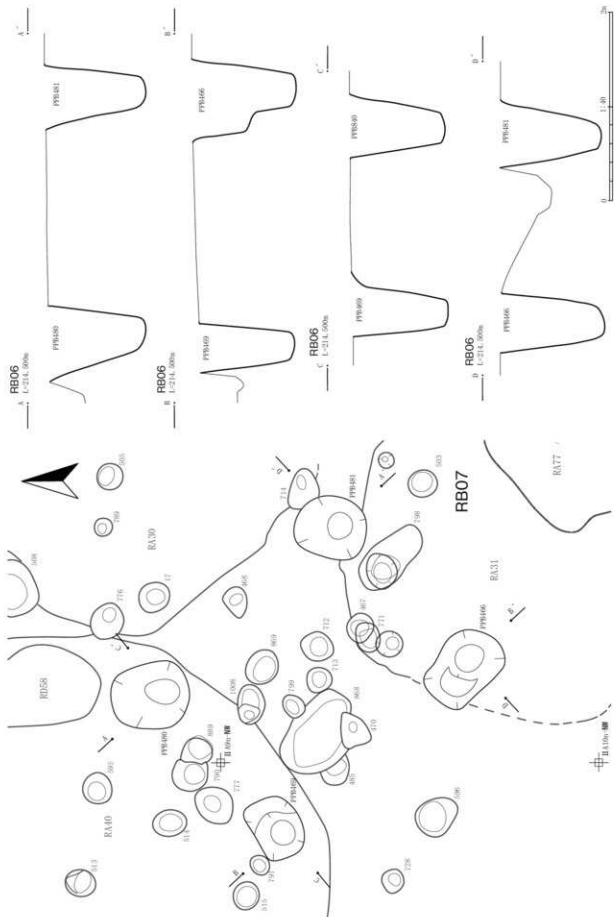
第141図 RB05



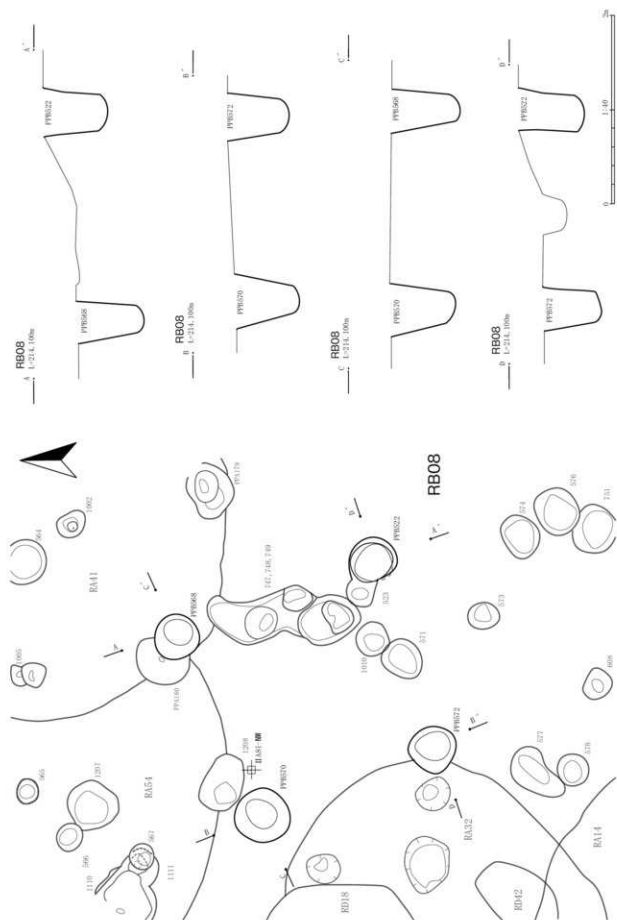
RB06 4本柱遺構

1. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや強。IV～V層相当か。
2. 10YR2/2 黒褐色。シルト。VI層土ブロックやや多。粘性有。締まりやや有。

各PPB1101～1104で構成される4本柱遺構。いずれのピットも上面が広がる扇形林状の形状を呈する。柱脚が抜き取られた結果と見られる。自然傾斜に合わせて、ピットの底面に高低差がある。(斜面上部で高く、下部で低い)。



第143図 RB07



第144図 RB08

(3) 土 坑

RD01土坑 (第145図、写真図版104)

〔位置・検出状況〕北西部、I A 21 n グリッドに位置する。VI層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は122×114cmの略円形、底面までの残存深度は70cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるVI層土ブロック層で、その上位にV a～IV層類似の黒褐色土、III層類似の黒色土が堆積している。III層土については、全体がIII層土主体の根攪乱に著しく侵されおり本来の堆積土であるか判断が難しい。埋土は全体的に混塊土層の様相を呈することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔重複遺構〕なし。RD02・RD04に隣接している。

〔遺構の時期〕埋土の様相および出土土器の年代観から、縄文時代中期末～後期が想定される。

〔出土遺物〕

土器 (384) (第220図、写真図版169)。

石鏃 (1577)。

敲磨器類 (2730)。

RD02土坑 (第145図、写真図版104)

〔位置・検出状況〕北西部、I A 22 n グリッドに位置する。VI層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は100×92cmの略円形、底面までの残存深度は40cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a～IV層類似の黒褐色土、III層類似の黒色土が堆積している。III層土については、全体がIII層土主体の根攪乱に著しく侵されおり本来の堆積土であるか判断が難しい。埋土は全体的に混塊土層の様相を呈することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔重複遺構〕なし。RD01・RD04に隣接している。

〔遺構の時期〕埋土の様相および出土土器の年代観から、縄文時代中期末～後期が想定される。

〔出土遺物〕

土器 (385) (第220図、写真図版169)。

円盤状土製品 (1254)。

RD03土坑 (第145図、写真図版104)

〔位置・検出状況〕北西部、I A 22 m グリッドに位置する。VI層上面において黒色土の不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は104×80cmの不整形円形、底面までの残存深度は26cmである。底面・壁ともに、木根による攪乱で大きく乱されている。

〔埋土と堆積状況〕V a層類似の黒褐色土層が主体で、これをI層相当の根攪乱が上方から切っている。新旧の根攪乱が重複したのもかもしれない。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。

〔出土遺物〕土器（386）〈第220図、写真図版169〉。

R D04土坑（第145図、写真図版105）

〔位置・検出状況〕北西部、I A21 n グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は106×100cmの略円形、底面までの残存深度は28cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a層類似の黒褐色土が主体。根攪乱によりIV層類似の褐色土がブロック状に混入する。堆積要因について、人為・自然の判別は困難である。

〔重複遺構〕なし。RD01・RD02に近接している。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

R D05土坑（第145図、写真図版105）

〔位置・検出状況〕南端斜面部、II A11 i グリッドに位置する。VI層上面において黒色土の不整形な広がりとして検出された。

〔規模・形状〕開口部は180×100cm程度の不整形な楕円形、底面までの残存深度は15cmである。全体に根攪乱で乱され、壁の立ち上がりは不明瞭、底面は斜面方向に沿って傾斜している。

〔埋土と堆積状況〕III層類似の黒色土を主体とする。埋土の上部中央には焼土の集中が認められる。この焼土はブロック状を呈するが、埋設の途中段階で土坑内部に生成したものが、後に木根等の攪乱で乱された可能性が高い。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代後期以降と考えられる。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

R D06土坑（第146図、写真図版105）

〔位置・検出状況〕南端斜面部、II A11 i グリッドに位置する。風倒木痕の壁面（VI層）において黒褐色土の略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面は大きく内傾して断面が三角形を呈する。底面から約80cmのところでも最も狭くなっている。これより上位は本来漏斗状に開くと思われるが後世の風倒木痕によって開口部周辺は失われ、狭窄部より下部のみ残存している。狭窄部径は70cm前後、底面径は170cm前後、底面までの残存深度は106cmである。底面の中央に径26cm、深さ3cmの浅い小穴が検出されている。柱材の埋置・固定は無理であろう。圧痕様の凹みに泥質土が堆積していたものである。

〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるVI層土ブロック層で、その後主体土であるV a層土とVI層土ブロック層が交互に堆積し狭窄部付近までを埋めている。この時点で本土坑は半埋没の凹地となり、そこに深鉢・壺等の土器の大形破片が投げ入れられている。その後はこの上位にIV層類似暗褐色土も堆積が進み埋没を終えている。

〔重複遺構〕なし。上部を風倒木痕に切られている。

〔遺構の時期〕堆積状況および出土遺物から、縄文時代中期末～後期初頭のものと考えられる。

〔出土遺物〕

土器（387～392）〈第220図、写真図版169・170〉。

円盤状土製品（1255～1258）。

敲磨器類（2731）。

RD07土坑（第147図、写真図版106）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡA10 i グリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや内傾して直線的に立ち上がる。底面から80cmほどのところでぐびれて外傾に転じ、開口部は漏斗状に開く。開口部径は約130cm、狭窄部径は約90cm、底面径は約130cm、底面までの残存深度は138cmである。

〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのはⅤa層類似の黒色土（7層）である。上位に重なる黒褐色土（6層）とともに、開口部から流入したものとみられる。流入土は狭窄部を経て落下するため、底面の中央に集中しマウンド状を呈している。この上位を狭窄部付近まで一気に埋めているのは、地山土（Ⅵ層土）ブロック層の4・5層である。狭窄部より下部の壁面崩壊によるものとみられ、本来の壁面はより強く内傾していたものとみられる。

最初に堆積したマウンド状の黒色土層と、壁面崩壊の間からは横転して潰れた深鉢形土器が出土している。床面東縁にはこの土器の底部が正位にのこっており、これを支点に西側に向かって崩落層に押しつぶされた様子がかがえた。壁の崩壊以前は東側の壁際に正位に据え置かれていたものと考えられる。なお、この深鉢の胴部下半付近からは径12cmの礫が1点出土している。本遺跡で複数確認されている、内部に礫を伴う埋設土器に類似する事例といえる。

壁崩壊によって狭窄部以下の大半が埋没したのちは、本土坑は播り鉢状の凹地となっている。この凹地には土器の大形破片やに加え割れた石皿が投棄されて（周囲からずり落ちて？）いる。その後は開口部からの土砂の流入が進んだらしい。埋土にⅢ層土は認められないので、本土坑の埋没はⅢ層堆積以前に完了したとみられる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕堆積状況および出土遺物から、縄文時代後期初頭のものと考えられる。

〔出土遺物〕

土器（393～404）〈第220～222図、写真図版170・171〉。

石鏝（1906）。

石皿（2360a・2360b）。

RD08土坑（第146図、写真図版106）

〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡA12 i グリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土と黒褐色土からなる明瞭な同心円状の略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は128×114cmの略円形、底面までの残存深度は36cmである。全体形は碗形を呈し、壁面及び底面にはやや凹凸がある。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅤa層土である。最下層は地山ブロック層。中間にⅤa層土が堆積し、その上を地山土（Ⅵ層土）類似の褐色土が覆う。全体にⅢ層土による根攪乱が広がっている。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD09土坑（第147図、写真図版107）

〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡA12jグリッドに位置する。Ⅵ層上面において土器片を含む暗褐色の不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は138×108cmの楕円形、底面までの残存深度は26cmである。底面は平坦に整い、壁はやや外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はV a層及びV b層類似土である。底面直上には埋土中最も黒味の強い黒褐色土が堆積し、その上をV b層及びⅥ層土が混入した暗褐色土が覆っている。埋土と壁の識別は困難であり、緻密度の差違等を元に立ち上がり把握したものである。

〔重複遺構〕精査・記録後、周囲からRA22住居跡が検出された。先後関係は本土坑がRA22を切っていることとなるが、本遺構が本来はRA22の埋土の一部であった可能性は大いにある。

〔遺構の時期〕埋土の様相及び出土遺物から、縄文時代早期中葉頃と考えられる。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD10土坑（第147図、写真図版107）

〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡA11iグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は100×68cmの不整形円形、底面までの残存深度は20cmである。全体的に根攪乱に侵されており、壁面及び底面には凹凸が目立つ。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はV a層類似の黒褐色土である。Ⅲ層土による根攪乱が全体に広がるが、本来の埋土にⅢ層土の混入は認められない。

〔重複遺構〕なし。RD06に近接している。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD11土坑（第147図、写真図版107）

〔位置・検出状況〕西北部、I A22kグリッドに位置する。平安時代の竪穴住居跡RA01の北壁際床面において明瞭な黒褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は径130cmの円形、底面までの残存深度は36cmである。底面は平坦に整い、壁はわずかに外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土はⅣ層またはV a層起源とみられる黒褐色土を主体とし、Ⅵ層土ブロックを多く含んでいる。1～3に分層したがⅥ層土ブロックの多寡によるものであり、全体が同時的（おそらく人為的に）埋まったものである可能性が高い。上部を切って重複するRA01の土層断面を観察すると、RA01内の埋没開始時点において本土坑は開口していなかった事が理解され、本土坑埋土とRA01のそれとの関係性が不整合であることは明らかである。またRA01の構築～廃絶～埋没の各時点において当該地点にすでに堆積していたはずのⅢ層（縄文時代後期後半）が本土坑埋土に一切混入しない事実も、本土坑とRA01との間に時間的な隔りがあることを示している。

よって本土坑は、RA01との位置関係からこれに付属する土坑であることが大いに疑われたが、上に掲げた検討結果を受け、RA01とは帰属時期が異なる（古い）遺構であると判断した。

〔重複遺構〕上記の通り、平安時代の竪穴住居跡RA01に切られる。

〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代後期中葉が想定される。付近の類似遺構（RD01・RD02等）の年代から縄文時代中期末～後期に帰属する可能性が高い。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD12土坑（第148図、写真図版107）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 2 n グリッドに位置する。V a 層中において、VI層類似の黄褐色土とV a 層類似の黒褐色土が同心円状に広がる円形範囲として認識された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや内傾して直線的に立ち上がる。底面から120cmほどのところでくびれて外傾に転じ、開口部は漏斗状に開く。開口部径は約140cm、狭窄部径は約80cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は160cmである。

〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのはV a 層相当の黒褐色土（11層）である。開口部からの流入土とみられる密に締まった土層である。この層の上面またはやや埋まった状態で、壁際から計5点の礫（径15～30cm）が出土した。投棄されたかあるいはしっかりと壁際に据え置かれたようにも見える。これらの上位はVI層やV b 層 n ブロックを多く含む締まりを欠いた土層（10層）が置かれている。壁崩落土が投棄土であろう。その後はV a 層類似の流入土（3・6・8・9層）と締まりを欠くブロック層（4・5・7層）が交互に堆積してほぼ大半が埋まっている。

埋没の最終段階に至って、凹地となった開口部には多量の黄褐色土（VI層相当）が堆積している。土層断面に明らかなくとおり、地山として遺構の周囲に堆積するVI層のレベルよりも高位にあり、他所から運んだVI層土を意図的に投入したものと考えられる。黄褐色土（VI層土）の意図的な埋め均し行為は、本遺跡では他の遺構においても複数確認されており、その意味するところを検討する必要がある。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代中期末葉が想定される。周辺の類似遺構の年代から縄文時代中期末～後期に帰属する可能性が高い。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD13土坑（第148図、写真図版108）

〔位置・検出状況〕東端部、II A 1 u グリッドに位置する。V a ～VI層上面において黒褐色土の不明瞭な略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや内湾・内傾して立ち上がる。底面から60cmほどのところまで内傾する壁が残存するが、それ以上の部分は削平されており、また検出面付近では根拠もなく著しいことから本来の形状は明らかでない。現状での開口部は176×158cmの略円形、底面は約140cmの円形、底面までの残存深度は74cmである。

〔埋土と堆積状況〕底面直上に堆積するのは、VI層土ブロック層をやや多く含む土層（7・8層）である。他のフラスコ状土坑と同様、狭窄部の制約を受けて底面中央部に厚く堆積し、本層上面はわずかに高まりマウンド状を呈している。この面上から径30～40cmの大形礫3点が出土した。最大の1点がほぼ中央から、他の2点はそれぞれ北西壁際・東壁寄りに位置する。これらの上位はV a 層類似の黒褐

色土層と、これにVI層土ブロックを含む土層によって埋没しているが、根拠乱が埋土全体に及び明確な層界を認められる部分は限定的であった。したがって堆積過程の詳細については不明である。

〔重複遺構〕なし。類似するRD66・RD67に近接している。

〔遺構の時期〕Va層土を主体とするが、周辺の類似遺構の年代から縄文時代中期末～後期に帰属する可能性が高い。

〔出土遺物〕円盤状土製品(1260)。

RD14土坑(第149図、写真図版108)

〔位置・検出状況〕北西部、IA25nグリッドに位置する。VI層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は230×214cmの円形、底面までの残存深度は18cmである。底面はほぼ平坦に整い、壁は内湾外傾して立ち上がる。底面中央から径24cmの小ピットが検出されているが、本遺構に伴うか否かは不明。

〔埋土と堆積状況〕Va層相当の黒色土を主体とする。下部にはVI層土ブロックがやや多く含まれる。自然の流入土によって埋没したものと見られ、埋土自体は近くに位置する縄文時代早期住居跡のRA16に良く似る。

〔重複遺構〕縄文時代後期住居跡とみられるRA06の下位から検出されたものである。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期の可能性が高い。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD15土坑(第148図、写真図版108)

〔位置・検出状況〕南西部、IIA9iグリッドに位置する。Va～VI層上面において黒褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は134×124cmの円形、底面までの残存深度は26cmである。底面は平坦に整い、壁はわずかに外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はIV層相当の暗褐色土。上部にのみわずかにIII層の橙色粒子が混入する。またVI層土ブロックをランダムに含むが、埋土は概ね一様であり人為的に埋められた可能性が高い。

〔重複遺構〕RA12を切っている。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕石錘(2781)。

RD16土坑(第149図、写真図版108・109)

〔位置・検出状況〕南西部、IIA8jグリッドに位置する。RA12の検出段階において南東壁から張り出す黒褐色土の略円形範囲として検出された。検出面はVa～VI層上面である。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、特に中央部付近がガッチリと硬化している。壁面は下部で直立し、その後内傾して立ち上がる。底面から約100cmのところまでくびれて外傾に転じ、開口部は漏斗状に開く。開口部径は約160cm、狭窄部径は約120cm、底面径は約160cm、底面までの残存深度は172cmである。

〔埋土と堆積状況〕まず底面直上に流入土層の13層、壁際ではその上に崩落土層の12層、さらに上位に再び流入土層の11層が堆積し、底面から約20cmのところまではほぼ水平に埋没している。この時点の

底面上(12層上面～11層中)において、北壁際に小形鉢、南壁際に深鉢、東壁際には径20cmの礫が、それぞれ揃え置かれたような状態で出土した。小形鉢はRA13配石遺構の北端礫下に埋納されたものに良く似ている。小形鉢の置かれた面には焼土の生成しており、また深鉢と礫にも被熱痕跡が認められた。周辺には焼土粒と炭化物の飛散もみられることから、下部の堆積が半埋没状態の土坑内において土器・礫の配置と共に、燃焼行為を伴う何らかの行為が行われたものと推測される。土層断面の焼土層(10層)は、一部再堆積とみられる部分も含むが、この行為に由来するものであろう。

このあと、土坑内は再び流入土によって埋没が進み、さらに崩落土の堆積もあってほぼ狭窄部付近まで埋没が進んでいる。開口部に近い上部壁面には広くRA12埋土が露出しており、付近にはRA12埋土が崩落・再堆積した部分もあって本土坑埋土とRA12埋土の境界が不明瞭となっている。埋没の最終段階には開口部付近は凹地となり、ここにVI層相当の黄褐色土ブロックの投入と、それに続く土器大形破片・ミニチュア土器・石皿等の投棄が行われている。

なお、重複するRA12においても埋没途上に黄褐色土の投入が行われたことがわかっている。本土坑埋土上部に見られる黄褐色土層には、RA12のそれと連続(同時堆積)するか、またはRA12の当該土層の崩落層が一部含まれている可能性があるが、この点について詳細な検討は行えなかった。

〔重複遺構〕RA12大形堅穴住居跡の南東壁際に重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕

土器(405～425)〔第223・224図、写真図版171・172〕。

ミニチュア土器(1148)。

円盤状土製品(1261～1265)。

石鏃(1578・1579・1808～1810・1964・1965)。

筥状石器(2118)。

石錘(2782)。

石皿(2361)。

敲磨器類(2416・2657・2732)。

RD17土坑(第149図、写真図版109)

〔位置・検出状況〕南西部、II A7hグリッドに位置する。RA12大形堅穴住居跡の西壁に張り出す黄褐色土の円形範囲として検出された。当初はRD23と対になってRA12の出入口部を構成するものと思定し精査に着手したが、RA12の精査をすすめる過程でそれぞれ単独の土坑であることが判明したものである。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整う。壁面は下半でやや強く内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立に近くなる。本来はこの上に漏斗状に開く開口部を持っていたと思われるが、RA12の床面より上の部分は、RA12の埋土と共に掘り上げてしまったため記録できなかった。完掘状態での開口部径は120×88cm、狭窄部径は76cm、底面径は約120cm、底面までの残存深度は78cmである。

〔埋土と堆積状況〕底面中央には流入土と思われる黒褐色土がマウンド状に堆積し、壁際にはその上位にVI層土ブロック層が被っている。ここまで埋まった段階(3層下面)で、中央からやや東寄りに径18cmの礫が入れられている。この上はさらに流入土と思われる黒褐色土に覆われ、さらに壁の崩落

土とみられる1・2層の堆積によって最上部（本来の狭窄部付近か）まで埋没している（締まりを欠き炭粒・焼土粒をむ1層はRA12埋土の崩落再堆積層であろう）。

断面図に記録できたのは狭窄部付近までであるが、これより上位がRA12埋土に連続する黄褐色土（RA12の5層及び7層）で埋められていることが確認されている（上記の通り、RA12の西壁から張り出す黄褐色土の円形範囲として検出）。半埋没状態のRA12の壁際付近に掘り込まれた本土坑が、その後住居跡内部の埋め均しに伴い、同時に黄褐色土を充填されたものと考えられる。

なお、埋土上部からは石皿片が出土しており、下部に土器や礫が納められる他の土坑が、開口部付近に石皿を伴う例と共通している。この石皿破片は、東に20m弱離れた地点から出土した別の破片（石皿2362b）と接合した。

〔重複遺構〕 RA12大形竈穴住居跡の西壁に重複し、複式炉前庭部埋土を切っている。

〔遺構の時期〕 埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕 石皿（2362a）。

RD18土坑（第150図、写真図版109）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 8 k グリッドに位置する。V b 層上面において、V a 層類似黒色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 開口部は186×176cmの略円形、底面までの残存深度は28cmである。皿状の断面形を呈し、壁は内湾外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 V a 層土の単層である。この黒褐色土を掘り上げたところ、底面にはVI層、壁面にはV b 層類似の暗褐色土があらわれた。

〔重複遺構〕 RA32に重複しこれを切っている。ただし本土坑埋土が本来はRA32の埋土の一部であった可能性も否定できない。縄文時代早期竈穴住居跡の埋土最上部にスポット状に（中央部に限らず）V a 層土が入る事例がのちの調査で複数確認されており、これに類するものと見なし得るからである。

〔遺構の時期〕 主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代中期末葉が想定される。上述の理由から、本遺構は縄文時代早期に帰属する可能性がある。

〔出土遺物〕 石鏃（1849）。

RD19土坑（第150図、写真図版109）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 8 j グリッドに位置する。VI層上面まで掘り下げたトレンチの底面及び壁面において、黄褐色土とその周囲を同心円状にめぐる黒褐色土からなる円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整っている。壁面は底面から70cmほどのところまでは直立し、それより上はやや内傾して立ち上がる。底面から約140cmのところまで急激にくびれ、大きく外傾して漏斗状に開く開口部へと至る。開口部はトレンチによって西半を失っている。径は150cmほどと推定される。狭窄部径は約90cm、底面径は約130cm、底面までの残存深度は165cmである。他の同種遺構に比べて細身に狭窄部もより狭く、全体が徳利様を呈している。

なお、底面の中央に径20cm、深さ3cmの浅い小穴が検出されている。圧痕様の凹みに泥質土が堆積していたものであり、柱材の埋置・固定は無理であろう。

〔埋土と堆積状況〕 西壁際の底面からは深鉢の大形破片が貼りついたような状態で出土した。この上

を流入土あるいは崩落土とみられる土層が交互に覆い、底面から30～40cm辺りまでほぼ水平に堆積が進んだようである。特記すべきは、これより上方、開口部付近までの厚さ約100cmにわたり、他の混入土を含まない地山黄褐色土（Ⅵ層土）がぎっしりと密に充填されていることである。とりわけ充填土の上半（3層）は実に緻密で、本来の地山層との差違を見いだすことが困難なほどである。この黄褐色土は堆積後次第に収縮して上部ほど緻密さを増したらしく、壁面との間には空隙が生じている。ここに上部から黒褐色土が流入して開口部付近は凹地となり、さらなる流入土の堆積によって埋没を終えている。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕土器（426）（第225図、写真図版173）。

RD20土坑（第150図、写真図版110）

〔位置・検出状況〕南東部、ⅡA11nグリッドに位置する。Ⅵ層上面において、黄褐色土とその周囲を同心円状にめぐる黒褐色土からなる、やや不明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整っている。壁はやや内傾して立ち上がり、上半部から開口部にかけてはほぼ直立となる。開口部は径104cmの円形、底面までの残存深度は86cmである。

なお、底面の中央に径22cm、深さ2cmの浅い小穴が検出されている。圧痕様の凹みに泥質土が堆積していたものであり、柱材の埋置・固定は無理であろう。

〔埋土と堆積状況〕底面中央にマウンド上に堆積する暗褐色土（5層）は周囲に向かって薄くなっている。北東壁際ではこの層の上面において焼土の生成箇所が認められ、また東壁際からは径14cmの礫が据え置かれたかのような状態で出土した。これらを被覆する黒褐色土層（4層）・暗褐色土層（3層）は、Ⅴb層及びⅥ層相当土ブロックを含み全体に締まりを欠くことから、人為的に入れられた土である可能性が高い。最上部に堆積する1層もまたⅥ層ブロックを多く含み、黄褐色土が充填される他例に共通する。

〔重複遺構〕RA21に重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕

土器（427）（第225図、写真図版173）。

削搔器（2230）。

敲磨器類（2606）。

RD21土坑（第151図、写真図版110）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡA8iグリッドに位置する。RA12南壁際の土層断面に、不整合に重複する別遺構として確認された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面は内傾して立ち上がる。底面から約130cmのところで急激にくびれ、大きく外傾して漏斗状に開く開口部へと至る。開口部は本来、RA12に堆積するいずれかの層の上面にあったはずであるが、土層断面に本土坑を確認する以前に多

くの部分を掘り下げてしまったため原形は不明となった。断面の南側に観察される立ち上がりから、径150cm程度の円形の開口部を有していたものと推測される。狭窄部の径は約60cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は200cmである。

〔埋土と堆積状況〕底面直上には黒褐色土（5層）がマウンド状に堆積するが、この上位には大量の地山黄褐色土（Ⅵ層土）が充填され、狭窄部付近まで厚さ120cmにわたり一気に埋められている。充填された黄褐色土は密に締まり混入物も全く認められないことから、壁面に現れるはずの地山層との識別は極めて困難だった。一部、壁面と埋土との間隙にごく薄い黒褐色土層が認められたので、これを元に壁を追跡し全形をあらわすことができた。この充填土はRA12内に埋め均されていた黄褐色土層（RA12の5層及び7層）に連続する可能性が高く、半埋没状態のRA12の壁際付近に掘り込まれた本土坑が、その後住居跡内部の埋め均しに伴い、同時に黄褐色土を充填されたものと考えられる。この後、開口部付近は掘り鉢状の凹地となり上方からの流入土によってRA12とともに埋没したものとみられる。

なお、黄褐色土充填の最終段階（あるいは直後）、狭窄部付近を底面とする凹地内に、大形礫が投げ込まれているのが確認されている。他の土坑において石皿や土器大形片などを投げ入れる例に類似する行為である。

〔重複遺構〕RA12の7層下面以下を切り、それ以上の層に被覆される。またRD40と下半部が重複しこれを切る。

〔遺構の時期〕埋土の様相および重複関係等、層位の事実から縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD22土坑（第150図、写真図版110）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡA6hグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は108×94cmの略円形、底面までの残存深度は84cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅤa層土類似の黒褐色土である。下半部においては、壁崩落土と流入土が互層をなしてレンズ状に堆積した様子が観察される（4～10層）。これを上方から挟むように3層が切り込んでいる。一度埋没した土坑を上方から再度掘り返したようにも思われるが、その他の根拠に乏しく判断できない。上半部にのこった凹地は流入土によって埋没したとみられる。なお、本土坑はRA12の北壁側に並ぶ大形柱穴（PPA41・同43）の延長上に位置しており、これらとの間隔寸法や規模から、RA12に関連する柱穴等の可能性を考慮する必要がある（埋土の断面は「柱穴」のそれに良く類似している）。

〔重複遺構〕なし。RA12の北西に近接する。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕敲磨器類（2658）。

RD23土坑（第151図、写真図版111）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡA7hグリッドに位置する。RA12大形堅穴住居跡の西壁に張り出す黄褐色土の円形範囲として検出された。当初はRD17と対になってRA12の出入口部を構成するものと想

定し精査に着手したが、RA12の精査をすすめる過程でそれぞれ単独の土坑であることが判明したものである。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整う。壁面は下半で内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立し、上端でわずかに開く。本来はこの上に漏斗状に大きく開く開口部を持っていたと思われるが、RA12の床面より上の部分は、検出以前にRA12の埋土と共に掘り上げてしまったため記録できなかった。完掘状態での開口部径は150×130cm、狭窄部径は110×94cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は136cmである。

底面中央には径28cm、深さ6cmの小穴をもつ。また、小穴から壁側に向かって放射状にのびる5条の溝状痕跡も検出されている。棒状材が底面に圧着したような痕跡であり、小穴側が深く壁側が浅いため、壁に向かって先細りとなっている。

〔埋土と堆積状況〕底面直上への黒褐色土（8層）の流入に始まり、以後3層まで、壁崩落土と流入土が互層をなして下半部を埋めている。この段階で掘り鉢状の凹地となった内部に、緻密で混入物のない黄褐色土（VI層土）が充填されている。この上位には再び黒褐色土の堆積が見られるが、締まりを欠く黒褐色土であり、RA12埋土の崩落土層と見られる。以上、断面図に記録できたのは狭窄部付近までであるが、これより上位がRA12埋土に連続する黄褐色土（RA12の5層及び7層）で埋められていることが確認されている（上記の通り、RA12の西壁から張り出す黄褐色土の円形範囲として検出）。半埋没状態のRA12の壁際付近に掘り込まれた本土坑が、その後住居跡内部の埋め均しに伴い、同時に黄褐色土を充填されたものと考えられる。

〔重複遺構〕RA12大形竈穴住居跡の西壁に重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕石匙（2008）、磨製石斧（2337）。

RD24土坑（第152図、写真図版111）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 9 1 グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土の明瞭な略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は164×140cmの略円形、底面までの残存深度は10cmである。底面中央はほぼ平坦、壁に向かって緩やかに高くなり断面形が浅皿状を呈する。南西壁際には炉状の石組みを伴う隅丸方形の掘り込み（46×32cm）が付属する。床面から8cmほど掘り下げて底面を平坦に仕上げ、掘り込みの内壁に長さ10～20cmの礫を据えた構造となっている。礫にはいずれも被熱による赤変が認められる。だが掘り込み内部及びその周辺に、焼土の生成や炭化物の飛散等は認められなかった。このほか、北壁に径60cm強の浅い円形の掘り込みを伴うが、埋土が一様であり付属するものか否かは判断できなかった。

〔埋土と堆積状況〕IV～V a 層相当の黒褐色土による単層である。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代中期末葉～後期初頭に想定される。

〔出土遺物〕筒状石器（2119）。

RD25土坑（第152図、写真図版111）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 9 k グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な楕

円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は156×146cmの略円形、底面までの残存深度は32cmである。底面は平坦に整い、壁は緩やかに内湾しながら立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はV a層土と見られる黒褐色土だが、これにV b層土及びVI層土ブロックを含み全体にやや明るい。根攪乱等、後世の乱れが目立ち堆積過程の詳細な復元はできなかった。

〔重複遺構〕RA14・RA15（縄文時代中期末・後期初）に切られ、RA23・RA24（早期中葉?）を切る。

〔遺構の時期〕埋土の様相及び重複以降との切り合い関係から、縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD26土坑（第152図、写真図版112）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 9 o グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色～暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は150×120cmの楕円形、底面までの残存深度は22cmである。底面は概ね平坦に整い、壁は内湾しながら立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a層類似の黒褐色土を主体とし、壁際ではV b～VI層土のブロックを含む。全体的に根攪乱に侵されており、土層断面の詳細な観察はままならなかった。

〔重複遺構〕RA26を切り、PPB471に切られる。

（PPB471との先後関係は、精査の過程で、断面写真撮影時と解釈が逆転した。）

〔遺構の時期〕埋土の様相及び重複以降との切り合い関係から、縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕

土器（428）〈第225図、写真図版173〉。

尖頭器（1508）。

RD27土坑（第153図、写真図版112）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 9 j グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不整形円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は190×128cmの不整形楕円形、底面までの残存深度は16cmである。底面はやや凹凸が目立つが概ね平坦であり、壁は内湾しながらなだらかに立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V b層類似暗褐色土を主体とする単層である。ブロック状に入る黒褐色土（V a層土）は根攪乱によるものである。

〔重複遺構〕RA27を切り、PPB411に切られる。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕

土器（429）〈第225図、写真図版173〉。

石鏃（1580）。

RD28土坑（第153図、写真図版112）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 9 i グリッドに位置する。VI層上面において褐色土の不明瞭な不整

楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は150×112cmの楕円形、底面までの残存深度は18cmである。底面は概ね平坦に整い、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はV b層類似の褐色土である。周辺の地山土に比して締まりを欠いている。下半部より上半部が黒味を帯びる印象だが、上半部がV a層土の入る根拠攪乱に侵されているためであり、本来は単層とみて差し支えないと思われる。

〔重複遺構〕RA27を切る。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD29土坑（第154図、写真図版112）

〔位置・検出状況〕南東部、II A11 l グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は98×58cmの楕円形、底面までの残存深度は38cmである。開口部から底部に向かって狭くなる、播り鉢状の形状を呈する。

〔埋土と堆積状況〕V b層類似の暗褐色土を主体とする。VI層土ブロックを多く含む層（2層）を間に挟んでいる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕自然礫（2823）。

RD30土坑（第154図、写真図版113）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 9 k グリッドに位置する。RA14（後期住居）の床面に検出された柱穴状ピット群の精査中、これらに切られている別の遺構埋土として認識された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑とみられる。底面は平坦に整う。壁面は下半で内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立し、上端でわずかに開く。さらに上には漏斗状に開く開口部を持っていたと思われるが、RA14に切られており本来の形状は不明となっている。完掘状態での開口部径は132×116cm、狭窄部径は122×112cm、底面径は130×122cm、底面までの残存深度は52cmである。なお底面には径30cmほどの小穴が見られるが、本土坑に付属するものではなく、本来はRA14に伴う柱穴であった可能性が高い（本土坑埋土を切っていたものを完掘時まで認識できなかった結果と思われる）。

〔埋土と堆積状況〕V a層類似の黒褐色土を主体とする。最下層の5層は流入土であろう。狭窄部の影響か、中央が盛り上がるマウンド状の堆積となっている。その上を覆う4層は、V b層類似の暗褐色土ブロックを多く含んでおり、壁の崩落を伴いながら徐々に埋没が進んだことを示唆している。

〔重複遺構〕RA14・RA15と重複し、RA14に切られている。RA15との先後関係は不明。このほか、RD33を切る。

〔遺構の時期〕埋土の様相及び重複遺構との関係から、縄文時代中期末～後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕土器（430・431）（第225図、写真図版173）。

RD31土坑（第154図、写真図版113）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 10 j グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な不

整楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は116×110cmの略円形、底面までの残存深度は32cmである。底面は概ね平坦に整い、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はV b 層土類似の暗褐色土であるが、V a 層類似の黒色土をブロック状に含み全体にやや黒味を帯びる。埋土の上部にはVI層土ブロックが目立ち、下半部に比してやや明るい。

〔重複遺構〕RA25と重複するが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD32土坑（第155図、写真図版113）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 9 j グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は径100cmの略円形、底面までの残存深度は28cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V b 層相当の褐色土が主体で、V a 層相当の黒褐色～暗褐色土ブロックが散見されるものの全体に様である。埋土の最下部には径20cmほどの礫4点を含み、南壁際底面からは尖底土器の大形破片が出土した。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物の年代観と埋土の様相から、縄文時代早期中葉と考えられる。

〔出土遺物〕

土器（432）〈第225図、写真図版173〉。

石皿（2363）。

RD33土坑（第154図、写真図版113）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 9 k グリッドに位置する。VI層上面（RA15床面）において、RD30に連続する黒褐色土の不明瞭な弧状範囲として検出された。

〔規模・形状〕大半をRD30に壊されているが、開口部は概ね径120cm程の楕円形を呈するものと推測される。底面までの残存深度は26cm。残存部では平坦な底面とはほぼ直立して立ち上がる壁が観察される。

〔埋土と堆積状況〕埋土はV a～V b 層土に由来するとみられる赤味のある黒褐色土である。VI層土ブロックを含んで明るく、開口部から底部まで一様である。

〔重複遺構〕RA14、RA15、RD30に切られる。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器（433・434）〈第225図、写真図版173〉。

RD34土坑（第155図、写真図版114）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 9 m グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は72×50cmの楕円形、底面までの残存深度は28cmである。断面形は楕形を呈し、

丸みをもった底部に連続して壁は内湾しながら立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 V b 層相当暗褐色土が主体の単層である。本来の V b 層よりやや暗い。

〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD35土坑（第155図、写真図版114）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 9 j グリッドに位置する。VI層上面において褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 開口部は84×66cmの楕円形、底面までの残存深度は26cmである。底面は平坦に整い、壁はやや外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 V b 層土相当褐色土を主体した単層である。本来の V b 層土よりやや暗い。

〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD36土坑（第155図、写真図版114）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 8 i グリッドに位置する。VI層上面において褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 開口部は82×58cmの楕円形、底面までの残存深度は42cmである。断面形は楕形を呈し、丸みをもった底部に連続して壁は内湾しながら立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 V b 層相当暗褐色土が主体の単層である。本来の V b 層よりやや暗い。

〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD37土坑（第156図、写真図版114）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 8 j グリッドに位置する。V b～VI層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整えられている。壁面は下半で強く内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立、上端でわずかに開く。開口部径は120cm、狭窄部径は110cm、底面径は135cm、底面までの残存深度は76cmである。

〔埋土と堆積状況〕 断面図及び写真ではまず壁際に崩落土層（8・9層）が堆積し、その後に黒色土が流入したよう表現しているが、他の同類遺構の例をもとに写真等を再検討したところ、やはり他例と同様、流入土（7層）が先にマウンド状に堆積し、その後に崩落層が堆積、さらに黒色土4層の流入があって凹地となったところに、黄褐色土（2層）が入れられ、最後に最上部にIV層相当層が堆積して埋没を終えているという過程が読み取れた。

〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 埋土の様相等から縄文時代中期末～後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD38土坑（第155図、写真図版115）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 7 j グリッドに位置する。RA20の床面において黒褐色～暗褐色土の略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 西側をRA12に切られているが、開口部は径140cm程度の円形と推測される。底面までの残存深度は28cmである。底面は平坦に整い、壁はやや外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 V a～V b層土に相当する暗褐色土が主体である。上部の2層は黒味が強いが、ほかは地山VI層土が濁ったような明るい埋土である。

〔重複遺構〕 RA12に切られる。RA20とも重複するが先後関係は不明（同時の可能性も有）。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観と埋土の様相から、縄文時代早期中葉と考えられる。

〔出土遺物〕 土器（435）（第225図、写真図版173）。

RD39土坑（第156図、写真図版115）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 9 h グリッドに位置する。VI層上面～VI層中において褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 開口部は156×94cmの楕円形、底面までの残存深度は26cmである。底面は概ね平坦に整い、壁はやや内湾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕 埋土の主体はV b層類似的褐色～灰褐色土である。断面図及び写真では遺構の上位をVI層上部に相当する黄褐色土が覆っている（掘り込み面がVI層下面となっている）ように表現しているが、周辺の別遺構の堆積状況等をもとに断面写真等を再検討したところ、V b層土主体の1層の上位に、VI層土ブロックを多量に含む層が堆積している状況であることがわかった。つまり初めにV b層土主体の褐色土（1層）が堆積し、その上部にVI層土ブロック層が堆積したということである。

〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD40土坑（第157図、写真図版115）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 8 i グリッドに位置する。RA12南壁寄りの土層断面に、不整合に重複する別遺構として確認された。

〔規模・形状〕 いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面は下半で強く内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立する。開口部は本来、RA12に堆積するいずれかの層の上面にあったはずであるが、土層断面に本土坑を確認する以前に多くの部分を掘り下げてしまったため原形は不明である。本来の狭窄部付近に相当する上端径は約60cm、底面径は約120cm、底面までの残存深度は96cmである。

〔埋土と堆積状況〕 遺物ながら、不手際により図・写真等の埋土断面記録がない。精査時の所見によれば、近接するRD21によく似た堆積状況を示し、下部に自然流入土と見られる暗褐色土が堆積した後は、ほとんどが黄褐色土（VI層）で埋められていたことがわかっている。図はRA12床面での状況を示しているが、上述の通り、本遺構はRA12埋土を切って掘り込まれたものであり、本来はこの上位にも埋土がのびていた。RA12精査時の写真によれば、RA12の埋土を切る本遺構上部埋土もほとんどがVI層土で埋められていること、そしてこの層がRA12の埋土中位に広く埋め均された黄褐色土に連続するものであることがわかる。

したがって、本土坑は半埋没状態のRA12内部（RA12：5層又は7層下面）に掘り込まれ、その後、

RA12への埋め均し行為に伴い、大量のVI層土で埋め戻されたものと考えられる。

〔重複遺構〕RA12の7層下面以下を切り、それ以上の層に被覆される。またRA12付属のPPA130・131を切っている。RD21に下半部が重複し切られている。

〔遺構の時期〕埋土の様相および重複関係等、層位的事実から縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD41土坑（第156図、写真図版115）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 8 g グリッドに位置する。調査区西側境界のVI層上面において黒褐色土の比較的明瞭な半円状範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。西側の半分強が調査区外にあり本来の開口部形状は不明であるが、概ね150cm程度の円形を呈するものであろう。底面は平坦に整っている。壁はほぼ直立して立ち上がり、底面から約50cmのところでは屈曲して強く内傾する。さらに、底面から約90cmのところでは急激にぐびれて外傾に転じ開口部が漏斗状に開く。全体的には徳利様の形状を呈する。狭窄部の径は約80cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は110cmである。

〔埋土と堆積状況〕埋土はVa層類似の黒褐色土を主体とする。全体的に崩落土層と流入土層によって埋没した様子が観察できる。埋没の最終段階には開口部付近がIV層に覆われている。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相及び基本土層との層位的関係性から縄文時代中期末～後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD42土坑（第157図、写真図版116）

〔位置・検出状況〕南西部、II A 8 k グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色～暗褐色土の楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は100×60cmの楕円形、底面までの残存深度は32cmである。底面は丸みをもち、内湾して立ち上がる壁に連続している。

〔埋土と堆積状況〕埋土はVa層類似の黒褐色土を主体とする。

〔重複遺構〕RA14に被覆され、PPB614に切られる。RA32と重複するが先後関係は不明（同時の可能性有）。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積年代は縄文時代早期中葉～中期末葉とみられる。

〔出土遺物〕土器（436）〈第225図、写真図版173〉。

RD43土坑（第157図、写真図版116）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 t グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は140×130cmの略円形、底面までの残存深度は36cmである。底面は平坦に整う。壁は下端がわずかに外に張り、その後直立して立ち上がる。周辺の類似遺構に照らせば、本土坑もいわゆるフラスコ形土坑であった可能性が高く、後世に上部を大きく削平されたと考えられる。

〔埋土と堆積状況〕底面を覆う4・5層はVI層土ブロックを含む崩落土とみられ、4層が堆積した時

点で底面から約20cmまで埋まっている。この段階（4層上面）で、径25cmほどの礫1点が内部中央に入れられている。その後は黒褐色土（V a層相当）が流入し埋没が進んだと考えられる。本土坑は調査区内のほぼ最高地点にあたる尾根頂部に位置しており、表土の流出が激しかったと推測される。本土坑の上部埋土もこれにより失われたと考えられる。

〔重複遺構〕RG01に切られる。RD44とも重複するが先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕埋土の様相及び類似遺構の年代観から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD44土坑（第157図、写真図版116）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 t グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は112×80cmの楕円形、底面までの残存深度は22cmである。底面は丸みをもち、内湾する壁に連続して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の大半を根攪乱による暗褐色土に侵されている。わずかに壁面付近に、埋土と考えられるV b層類似の褐色～暗褐色土が観察されるが、根攪乱によってVI層が濁った部分とも考えられる。

〔重複遺構〕RD43と重複するが先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD45土坑（第157図、写真図版116）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 23 u グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は70×60cmの略円形、底面までの残存深度は16cmである。底面は丸みをもち、内湾する壁に連続して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕埋土の多くを根攪乱である暗褐色土に侵されている。底面付近に埋土と考えられるV b層類似の褐色～暗褐色土が観察されるが、根攪乱によってVI層が濁った部分とも考えられる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD46土坑（第157図、写真図版117）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 23 u グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は114×102cmの略円形、底面までの残存深度は12cmである。丸みを持った底面に連続してなだらかに立ち上がり、断面形が浅皿状を呈する。

〔埋土と堆積状況〕暗褐色土を主体とする。RD44・RD45の埋土に見られる根攪乱層によく似るが、全体形状も整っており、人為による遺構の可能性は否定できない。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD47土坑（第158図、写真図版117）

〔位置・検出状況〕 南西部、I A 23 s グリッドに位置する。RG02の壁面（VI層）において黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 いわゆるフラスコ形土坑である。狭窄部付近から上をRG02に切られている。底面は平坦に整い、壁はやや内傾して直線的に立ち上がる。現状での開口部は78×60cmの楕円形、底面は86×76cmの楕円形、底面までの残存深度は60cmである。

〔埋土と堆積状況〕 V a 層相当の黒褐色土を主体とする。下部はVI層土ブロックを少量含む。全体に自然の流入土によって埋没したものと判断される。

〔重複遺構〕 RG02に切られる。

〔遺構の時期〕 埋土の様相等から縄文時代中期末～後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD48土坑（第158図、写真図版117）

〔位置・検出状況〕 北東部、I A 23 s グリッドに位置する。V b～VI層上面において周囲より暗い不明瞭・不整形な範囲として検出された。

〔規模・形状〕 いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、しっかりと締まっている。壁は下半部では内傾して立ちあがり、底面から30cm程のところで屈曲して急激に外反に転じている。埋没の過程においてやや大きな壁の崩落があったものとみられ、特に上半部は原形を大きく損ねている可能性が高い。現状の開口部は156×130cmの楕円形、狭窄部が128×108cmの楕円形、底面までの残存深度は58cmである。

〔埋土と堆積状況〕 V a 層類似の黒褐色土を主体とする。北側から落ち込んだようなVI層土を多く含む層（2～4層）が大半を埋めており、人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。特に、RA12の壁際付近に集中する複数のフラスコ形土坑に見られるように、仮に本土坑が（廃絶後の）RA77の壁際に設けられ、その後RA77内部への土砂の投棄が行われたとすれば、本土坑に北側から一気に土砂が流入した状況も理解できる。可能性の一つとして指摘しておきたい。

〔重複遺構〕 北壁にRA77に帰属するPPB701が重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕 埋土の様相及び重複遺構との関係から縄文時代後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD49土坑（第158図、写真図版117）

〔位置・検出状況〕 北東部、I A 23 r グリッドに位置する。V b～VI層上面において暗褐色土のやや不明瞭な略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 全体形状は円筒形に近いが、壁下端がわずかに張り出す特徴を持つことから、本来はいわゆるフラスコ形土坑であったとみられる。開口部は径110cm、底面は径90cm、底面までの残存深度は56cmである。

〔埋土と堆積状況〕 底面中央から径26cmの扁平な角礫が一点、据え置かれたように出土した。底面からは5cmほど浮いている。これを覆うのはIV層土に似た暗褐色土主体の単層で、VI層土の小ブロックを全体に一緒に含んでいる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から縄文時代後期初頭を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD50土坑（第159図、写真図版118）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 q グリッドに位置する。V b～VI層上面において暗褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕現状の開口部径は約150cm、底面径150cm、底面までの残存深度は48cmである。底面はほぼ平坦に整い壁際でわずかに高まる。壁下端が外側に張り出し、主に下半部では壁が内傾することから、いわゆるフラスコ形土坑であったとみられる。後世に上部（狭窄部～開口部）を大きく削平された可能性が高い。

〔埋土と堆積状況〕底面直上は崩落土ブロックを含む褐色土（5層）と、流入土と見られる暗褐色土（4層）によって薄く覆われている。底面上が10cmほど埋まった時点で当たるこの面の中央から、深鉢形土器1点が横位で潰れた状態で出土した。また土器の直上と周囲からは、径15～20cm程度の礫が土器に添えられたような状態で計5点出土した。この上は壁崩落土とみられる褐色土（3層）によって厚く覆われ、その後もV層類似の黒褐色土（2層）が流入するなどして堆積が進んだものと見られる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び埋土の様相から縄文時代中期末と考えられる。

〔出土遺物〕

土器（437・438）（第226図、写真図版173）。

鐸形土製品？（1174）。

敲磨器類（2607）。

RD51土坑（RA13関連遺構）（第159図、写真図版118）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 n グリッドに位置する。RA13本体の環状配石列と張出部の礫群とが接する範囲の西端にあたる地点である。RA13の下部構造を精査するため配石を除去しながらV a層を面的に掘り下げたところ、V a層中において、V b層土及びVI層土ブロックを多量に含んだ土による明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は楕円形。開口部径156×92cm、底面径134×62cm、底面までの残存深度は74cmである。底面は壁際まで平坦に整えられ、壁はほぼ直立する。長軸を東西方向に持つ（RA13の長軸とは直交する）。RA13に関連する墓塚であると考えられる。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。

〔埋土と堆積状況〕埋土はV b～VI層土のブロックを一様に関り、開口部の西側から流し込まれたような堆積状況を示すことから、人為的な埋め戻しが行われたものと判断される。地山土の混入で埋土全体が明るみを帯びるため本来の主体土の判別は困難だが、底面付近にV a層相当の黒褐色土の堆積（7層）があることや、埋土最上部を除きⅢ層に含まれる橙色粒子が混入しないことなどから、掘り込み面（構築時期）はⅣ～V a層上面と推測される。

埋土の最上部（2層下面から上）には、中央よりやや東に寄った位置に径50cm前後の礫がまとめて入れられている。この集石はRA13の敷土面より上位に露出しており、また、本土坑の輪郭に沿って、RA13の敷土が断絶していることなどから、RA13への敷土・配石が行われた後に、構築されたものと

判断される。とはいえ、RA13内における位置を考慮すれば、本土坑とRA13の間に大きな時間差は想定し得ない。

〔重複遺構との先後関係〕上記のとおり、RA13の（一部の）礎設置及び黄褐色土敷き均し行為に後続するものと考えられるが、大きな時間差は想定できない。

〔遺構の時期〕層位的関係性から縄文時代後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD52土坑（第164図、写真図版118）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 o グリッドに位置する。RA13の下部構造を精査するため配石を除去しながらV a 層を面的に掘り下げたところ、VI層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は164×92cmの楕円形、底面までの残存深度は18cmである。底面はやや凹凸が目立ち、壁は概ね直立して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V b 層土類似の暗褐色土を主体とする。底面や壁との境界は不明瞭である。

〔重複遺構〕V a 層相当土を埋土とする柱状ビットに切られている。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD53土坑（第159図、写真図版119）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 5 m グリッドに位置する。V a ～VI層上面において暗褐色土及び褐色土からなる同心円状範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整えられている。壁面は下部で強く内傾するが、底面より60cm程度のところからはほぼ直立、上端ではごく緩く開いている。開口部径は136cm、狭窄部径は106cm、底面径は160cm、底面までの残存深度は165cmである。

〔埋土と堆積状況〕4層以下は地山土を比較的多く含む締めまりを欠いた土層である。数度にわたる壁の崩落によって下半部が埋まり、その後は上方からの流入土（3層以上）によって埋没を終えたものと考えられる。2層はIV層土に顕著な褐色土ブロックにも似るが、同種遺構の最上部に複数例確認されているV b ～VI層土の埋め均しに共通するものと思われる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び埋土の様相から縄文時代後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕土器（439・440）〈第226図、写真図版173〉。

RD54土坑（第158図、写真図版119）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 m グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は108×100cmの略円形、底面までの残存深度は14cmである。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内湾して緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。

〔埋土と堆積状況〕V b 層土類似の暗褐色土を主体とする。壁及び底面との境界に堆積する2層はVI層との区別が難しい褐色土だが、地山層に比してわずかに暗く締めまりが弱い。本遺跡の早期遺構の多くに共通することであるが、埋土の掘削後、一定の時間を経ると壁面の周囲がわずかに暗く変化し、

さらに掘り広げるべきであることに気付かされる場合がままある。本土坑についても同様であった。

〔重複遺構〕RB05のPPB703に切られる。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器(441)〈第226図、写真図版174〉。

RD55土坑(第160図、写真図版119)

〔位置・検出状況〕南西部、II A 8 m グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部径154×100cmの楕円形、底面までの残存深度は32cmである。底面はやや丸みを持ち、壁は内湾しながら立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a～V b層土が主体。壁際と床面付近に地山VI層土の再堆積層が観察される。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器(442・443)〈第226図、写真図版174〉。

RD56土坑(第160図、写真図版119)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 8 n グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁はやや内傾して直線的に立ち上がる。狭窄部付近から上を削平されているとみられる。現状での開口部径は78cm、底面径は130cm、底面までの残存深度は78cmである。

〔埋土と堆積状況〕V a層相当の黒褐色土を主体とする。流入土の堆積が底面中央付近から始まりマウンド状の土層が形成されたのち、漸次表土の流入が続き埋没が進んだものと見られる。VI層土の崩落がほとんど見られないことから、現存する壁面は相当程度原形をとどめていると考えられる。

〔重複遺構〕RB05のPPB702に切られる。

〔遺構の時期〕埋土の様相及び類似遺構の年代観から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕石鏃(1850)、石錘(2783)。

RD57土坑(第160図、写真図版120)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 m グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は118×88cmの楕円形、底面までの残存深度は16cmである。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内湾して緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。

〔埋土と堆積状況〕V b層土に類似する暗褐色土が主体。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕土器(444)〈第226図、写真図版174〉。

RD58土坑（第160図、写真図版120）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 8 n グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は136×86cmの楕円形、底面までの残存深度は16cmである。底面は凹凸が目立ち、壁は内湾しながら立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕図上ではV a～V b層土主体の単層（1層）と解釈しているが、重複するRA40との先後関係は判然とせず、むしろ2～5層まで含めてRA40に帰属する可能性も否定できない。

〔重複遺構〕RA40と重複するが先後関係は不明。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD59土坑（第161図、写真図版120）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 5 o グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は156×70cmの長楕円形、底面までの残存深度は28cmである。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内湾して緩やかに立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a～V b層土に類似する黒褐色土が主体。VI層土ブロックを少量含む。

〔重複遺構〕RA49に重複するが、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD60土坑（第161図、写真図版120）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 n グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は124×58cmの長楕円形、底面までの残存深度は18cmである。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内湾して緩やかに立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a～V b層土に類似する黒褐色土が主体。V b～VI層土ブロックを少量含む。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD61土坑（第161図、写真図版121）

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 5 n グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部が径110cmの円形、底面までの残存深度は18cmである。底面は平坦に整い、壁は内湾しながら立ち上がる。底面の形状・規模はフラスコ形土坑によく似るが、RA13の配石面を掘り込み面と仮定すれば本来の深さは最大でも50cm程度であろう。隣接するフラスコ形土坑RD53に比して著しく浅いことから、本土坑がフラスコ形土坑である可能性は低いと考えられる。

〔埋土と堆積状況〕V a層類似の黒褐色土を主体とする。壁際及び底面にVI層土の崩落層が観察される。

〔重複遺構〕RA13本体（円環状の石列）内部の西縁に位置している。RA13の下部構造精査のため付

近を面的に掘り下げた際に検出されたものであり、先後関係は不明である。

〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代後期前葉頃が想定される。帰属時期の詳細は不明である。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

R D62土坑（RA13関連遺構）（第161図、写真図版121）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 5 n グリッドに位置する。RA13本体（環状配石列）内部における大形礫の集中箇所として認識され、その後下部構造精査時の土層断面において、これらの礫群を内包する掘り込みとして確認されたものである。

〔規模・形状〕土層断面で確認したものであり、記録できたのは畦幅約40cm分のみである。幅は約80cm、長さは110cm以上と推測され、おそらく楕円形に近い形状であったと思われる。掘り込み面と推定されるRA13内部上面（配石面）からの深さは30cmで、RD51など、RA13に伴う墓塚とみられる楕円形土坑に比較すれば浅い掘り込みである。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。

〔埋土と堆積状況〕遺構の底面がVI層に達していないため、主にV a 層が壁面と底面を構成している。埋土の主体はV a 層相当の黒褐色土で、多量の褐色土ブロックを一緒に含んでいる。人為による一括埋土であろう。掘り込みの最上部は、埋土に含まれるブロックによく似た褐色土層に被覆されている。この褐色土はRA13本体の内部に広がりを持って分布する、おそらく人為の堆積層であり、この層の堆積の直前又は同時に、土坑内部に礫がまとめて入れられたと考えられる。礫は上部を地表に露出するように埋置され、その後付近で行われた燃焼行為により上部に焼土が生成、礫の一部にも被熱痕跡がのこされたと考えられる。以上を整理すると、本土坑の掘削→埋め戻し→礫の設置・褐色土敷き均し、焼土生成（礫被熱）という流れを読み取ることができる。

ただし、先述の通り、土坑の埋め戻し土に含まれる褐色土ブロックは上部を被覆する褐色土層によく似ており、両者が同一起源だとするとRA13内部への敷き均しと本土坑の掘削時期が前後してしまう（本土坑の埋め戻し以前に褐色土が堆積していなければならない）。①土坑内部の褐色土ブロックと上部の褐色土層が起源を異にする、あるいは、②先にRA13内への褐色土の堆積（敷き均し）があり、その後土坑を掘削、礫埋置の際に再度褐色土に覆われた、のいずれかということになろう。付近におけるV a 層の上位には褐色土ブロックの混入を特徴とする基本土層IV層の堆積を想定しうることも問題を複雑にしている。RA13の形成過程における本土坑の位置付けにとって極めて重要な意味を持つ要素であるが、精査では明確な層位的事実として把握することができなかった。今後の検討に際してはこの点に十分な留意が求められる。

〔重複遺構〕RA13の主軸上、本体（円環状石列）の北縁寄りに位置する。RA13に関連（付属）すると見られるが、上記の通り掘削が行われた詳細な時期については明らかでない。

〔遺構の時期〕層位的事実等から縄文時代後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

R D63土坑（第162図、写真図版121）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 2 s グリッドに位置する。VI層上面において褐色土と黒褐色土からなる明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。開口部は172×160cmの略円形、底面までの残存深度は65cm。底面は平坦に整えられ、壁はやや内傾して立ち上がり底面から35cm程のところまで屈曲して外

傾に転じている。

〔埋土と堆積状況〕底面直上から下半部にかけては崩落土層とみられるやや締まりを欠いた土が堆積している（3～7層）。これらの崩落層に挟まれて、底面の上位約10cmから大形礫1点（46×22cm）が出土した。6層上面の段階で内部中央に据え置かれたものと見られる。その後この礫は壁上部の崩壊による3・4層に覆われ、さらに凹地となった上半部には流入土（2層）が堆積するなどして埋没が進んだらしい。

なお、本土坑は北側でRB03方形柱穴列と重複している。RB03は堆積過程の最終段階に内部へ黄褐色土の敷き均しが行われたことが確認されているが、本土坑の埋土最上部にも同様の黄褐色土（1層）が観察されている。本土坑の黄褐色土層はRB03の位置する北側に偏在することからも、両者における黄褐色土の埋め均しが同時的に行われた可能性が高いと考えられる。

〔重複遺構〕RB03の南東部に重複している。RB03の完掘後に検出されたものであるが、先後関係を示す層的事実は確認できていない。上記の通り、両者の埋土最上部に観察される黄褐色土は同時に埋め均されたものと見られる。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕

土器（873）〈第256図、写真図版198〉。

石鏃（1581）。

RD64土坑（第162図、写真図版121）

〔位置・検出状況〕北東部、II A 1 t グリッドに位置する。VI層上面において褐色土及び暗褐色土の比較的明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は径112cmの円形、底面までの残存深度は34cmである。底面はやや丸みを帯び、内湾する壁に連続して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a～V b 層土に類似した暗褐色土を主体とする。上部にはVI層土に似る褐色土が入り込んでいるが、人為か否かの区別は難しい。

〔重複遺構〕RA35と重複するが、先後関係を示す層的事実は確認されていない。

〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代後期中葉が想定される。帰属年代について詳細は不明である。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD65土坑（第162図、写真図版122）

〔位置・検出状況〕北東部、II A 1 u グリッドに位置する。VI層上面において大形礫とその周囲に分布する暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は72×64cmの略円形、底面までの残存深度は14cmである。底面はほぼ平坦、壁は内湾して緩やかに立ち上がる。相当程度上部を削平されているものと見られるが、本来の形状は不明である。

〔埋土と堆積状況〕IV～V a 層土に類似する暗褐色土を主体とする。最上部の検出面付近、底面から約8cmのところに40×20cmの大形礫が入れられている。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕出土土器片の年代及び主体土の堆積年代から縄文時代後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕 縄文時代後期初頭とみられる土器細片が出土している（不掲載）。

R D66土坑（第163図、写真図版122）

〔位置・検出状況〕 北東部、II A 1 u グリッドに位置する。VI層上面において比較的明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕 いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや強く内傾して立ち上がる。壁は底面から約75cmのところまで急激に屈曲し外傾に転ずる。本来はこの上に漏斗状の開口部を持っていたとみられるが、本土坑は調査区内においても高地点にあるため、上部をやや大きく削平・流失している可能性がある。完掘状態での開口部径は165×148cm、狭窄部径は110×94cm、底面径は約160cm、底面までの残存深度は86cmである。

〔埋土と堆積状況〕 底面直上は広く流入土層の7層に覆われている。Va層類似の黒褐色土で、焼土粒・炭粒を含み全体に赤味を帯びる。この層の上面からは径20～50cmの大形礫、計9点が出土した。中央部のほか壁際に寄せ置かれたものもみられる。これらの礫には被熱による赤変が認められ、7層に含まれる焼土・炭化物との関連性がうかがわれる。またこれらの礫と同様、壁際に伏せ置かれたような状態で深鉢の大形破片が出土している。これらの遺物分布面は、崩落土とみられる締めりを欠く土層（3～5層）によって狭窄部付近まで厚く覆われ、結果的に開口部付近は凹地となったらしい。この凹地にはVI層土類似の褐色土（1～2層）が入れられている。このような埋没過程は、他のいくつかのフラスコ形土坑にも共通して認められるものである。

〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 出土土器の年代観及び埋土の様相から、縄文時代後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕

土器（445～447）〈第226・227図、写真図版174〉。

石錘（2780）。

敲磨器類（2659）。

R D67土坑（第163図、写真図版122）

〔位置・検出状況〕 北東部、I A 25 u グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色・暗褐色土からなる明瞭な同心円状の範囲として検出された。

〔規模・形状〕 底面は平坦に整い、壁の下端は抉れて内湾、内傾して立ち上がる。底面から約30cm程のところまで屈曲して外傾に転じ、やや大きく開いて開口部へと至る。いわゆるフラスコ形土坑であったとみられ、本来はさらに上位に狭窄部と開口部を持つはずだが、本土坑は調査区内においても高地点にあり、上部をやや大きく削平・流失しているものとみられる。完掘状態での開口部径は194×176cm、底面径は134cm、底面までの残存深度は68cmである。

〔埋土と堆積状況〕 南壁際の底面上から礫1点（径約20cm）が出土した。これを覆うように下半部には崩落土層とみられるやや締めりを欠く土が堆積している（4～6層）。凹地となった上部には流入土とみられる黒褐色土の堆積が進んだ様子が認められる。黄褐色土のブロック層である2層は、他のフラスコ形土坑にも見られる埋め均し土の可能性があるが、上部を大きく失つてとみられる本土坑においては、通常の崩落層と区別する根拠に乏しく判断することは難しい。

〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 埋土の様相から縄文時代後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕

土器 (448・449) (第227図、写真図版174)。

石皿 (2364)。

敲磨器類 (2418)。

RD68土坑 (RA13関連遺構) (第164図、写真図版123)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 n グリッドに位置する。RA13本体の南側に張り出す礎群の中央にあたる地点である。RA13の下部構造を精査するため敷土・配石を除去しながらV a 層を面的に掘り下げたところ、V b～VI層上面において、黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は概ね楕円形だが、直線的な側辺が平行するように見えることから、小判形あるいは隅丸長方形に近い。開口部径132×88cm、底面径108×64cm、底面までの残存深度は34cmである。底面は平坦に整えられ、壁は下端部が内湾しそこからわずかに外傾しながら直線的に立ち上がる。長軸を南北方向に持つ (ほぼRA13主軸に沿う)。RA13に関連する墓竈であると考えられる。RA13に関連する墓竈であると考えられる。RA13関係図 (第42～48図) を併せて参照されたい。

〔埋土と堆積状況〕埋土はV a 層土類似の黒褐色土を主体とし、特に下半部にV b及びVI層土とみられるいわゆる地山土が混入する。本土坑はVI層上面で検出されたが、本来はRA13の礎配置面付近に掘り込み面を持っていたと考えられ、本来は80cm近い深さをもってたと推測される。

VI層上面より上位の堆積状況を記録したRA13張出部の断面図 (第44図 ②A-②A') をみると、RA13の張出部に礎とともに敷き均された黄褐色土層 (6 a・6 b層) が本土坑の上位を広く覆い、さらに本土坑の上位のみ、わずかに沈み込んでいる状況が見取れる。このことから、本土坑の「掘削→埋没」はRA13張り出し部への礎配置や黄褐色土敷き均しに先行して完了したこと、そして、本土坑の埋没後、埋土の沈縮が完了しないうちに黄褐色土敷き均し等の行為が行われたこと、が理解される。

ところで、上述のとおり墓竈とみられる本土坑であるが、土層断面を見る限り、一度に全て埋め戻されたような様子は認められず、むしろ自然の流入土による埋没にも見える。このことは人為的な埋め戻しが明らかなRD51との相違点である一方、大形礎や土器が据え置かれたフラスコ形土坑において自然流入・自然崩落層によって下半部が埋没し、その後最上部を黄褐色土で塞がれる事例によく似ており、慎重な検討が必要である。

なお、底面からは副葬品とみられる石器類が出土した。南端部の底面直上からやや大形の石鏃1点、これに近接して底面上約4cmのところから異形石器1点が出土し、さらに北端部でも底面上約5cmのところでは石鏃1点が確認された。埋土からはこのほかに2点の石鏃が出土しており、計4点の石鏃 (有茎鏃) と1点の異形石器が副葬品として納められていたものとみられる。

〔重複遺構との先後関係〕上記の通り、本土坑の掘削～埋没は、RA13張出部の礎配置及び黄褐色土敷き均し行為よりも古いことが明らかである。ただし、埋没の後、黄褐色土敷き均し行為等がなされるまでに大きな時間的隔絶はなかったものと推測される。

〔遺構の時期〕層位的関係性 etc から縄文時代後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕

土器 (848) (第255図、写真図版196)。

石鏃 (1811～1814)。

異形石器 (2799)。

RD69土坑（RA13関連遺構）（第162図、写真図版123）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 n グリッドに位置する。RA13本体（円環状石列）の内側南縁、RA13張出部との接点に相当する地点である。RA13の下部構造を精査するため配石を除去しながらV a層を面的に掘り下げたところ、V b～VI層上面において、黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は長楕円形、開口部径128×62cm、底面径114×50cm、底面までの残存深度は18cmである。底面は平坦に整えられ、壁はわずかに外傾して直線的に立ち上がる。長軸を東西方向に持つ（RA13主軸と直交する）。RA13に関連する墓壇の可能性が高い。RA13に関連する墓壇であると考えられる。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。

〔埋土と堆積状況〕埋土はV a層土類似の黒褐色土を主体とし、特に下半部にV b及びVI層土とみられるいわゆる地山土が混入する。本土坑はVI層上面で検出されたが、本来はRA13の礎配置面付近に掘り込み面を持っていたと考えられ、本来は80cm近い深さをもっていたと推測される。

VI層上面より上位の堆積状況を記録したRA13の断面図（第43図①A～①A'・第44図⑤A～⑤A'）には土坑上位での土層の落ち込みが明瞭に認められ、特に、①A～①A'では円環状石列の掘方と顕著な褐色土（7層）が土坑の開口部付近を埋め均し、同時に礎の配置がなされた様子が良く見て取れる（この褐色土は張出部に敷かれた純粋な黄褐色土に比して濁りがありやや暗く、両者に時間差が存在する可能性もあるが、用いられ方が共通している）。これらから、本土坑の「掘削→埋没」は開口部付近への礎配置や褐色土敷き均しに先行して完了したこと、そして、本土坑の埋没後、埋土の凝縮が完了しないうちに褐色土敷き均し等の行為が行われたこと、が理解される。

ところで、上述のとおり墓壇である可能性をもつ本土坑であるが、土層断面を見る限り、一度に全て埋め戻されたような様子は認められず、むしろ自然の流入土による埋没にも見える。このことは人為的な埋め戻しが明らかなRD51との相違点である一方、RD68の埋土の状況や、大形礎や土器が据え置かれたフラスコ形土坑において自然流入・自然崩落層によって下半部が埋没し、その後最上部を黄褐色土で塞がれる事例によく似ており、慎重な検討が必要である。

〔重複遺構との先後関係〕上記の通り、本土坑の掘削～埋没は、開口部付近への礎配置及び褐色土埋め均し行為よりも古いことが明らかである。ただし、埋没の後、褐色土埋め均し行為等がなされるまで、大きな時間的な隔たりはなかったものと推測される。なお、本土坑の掘削・埋没・礎配置及び褐色土埋め均し行為が、RA13全体が最終形に至る過程のどの段階に位置づけられるのか、また、RA13に関連する他の土坑（墓壇）との時間的關係性について決定しうる層位的事実は確認できておらず、慎重な検討を要する。

〔遺構の時期〕層位的関係性等から縄文時代後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD70土坑（第162図、写真図版123）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 6 n グリッドに位置する。VI層上面において暗褐色土の不整形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部径108×72cmの不整形円形、底面までの残存深度は12cmである。底面はやや丸みを持ち凹凸がある。壁は内湾しながらならからに立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕V a～V b層土が主体。壁際と床面付近に地山VI層土の再堆積層が観察される。

〔重複遺構〕RA13の下位に位置する。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD71土坑（第163図、写真図版123）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 q グリッドに位置する。VI層上面において褐色土のやや不明瞭な略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は168×156cmの略円形、底面までの残存深度は36cmである。底面は概ね平坦に整う。壁はわずかに外傾して立ち上がり底面から約20cmのところやや急に外反して、上半部が一回り大きく開いている。

〔埋土と堆積状況〕埋土はV b 及びVI層の再堆積土からなると思われ全体に明るい印象だが、中位にV a 層類似黒褐色土の薄層（3層）を挟んでいる。断面には北西方向から堆積が進んだ様子が認められる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD72土坑（第164図、写真図版142）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 r グリッドに位置する。V b 層上面において検出されたRZ10埋設土器の精査に際し、その下位に重複する土坑状の落ち込みとして認識された。

〔規模・形状〕重複するRD73・RZ10によって大きく破壊されているが、オーバーハングする壁面が認められることから、いわゆるフラスコ形土坑であったと考えられる。底面は中央部がやや低くなるが滑らかに整えられている。壁面は底面付近から側方に大きく抉り込んだように張り出し、すぐに急激に内傾に転じて立ち上がる。壁面は底面から20～30cm程度しか残存しておらず、これより上位の様相は不明となっている。残存状態において最も狭窄する部分の径は126×100cm、底面径は約130cm、検出面から底面までの残存深度は60cmである。

〔埋土と堆積状況〕遺構内の本来の堆積層は重複遺構によって大きく乱れており、詳細は不明となっている。壁際に崩落土層とみられるVI層土ブロック層（4 b 層）、その上位にはV a 層相当の流入土が堆積している。

〔重複遺構〕RD73・RZ10に切られている。

〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

〔その他所見〕重複するRD73及びRZ10は、本土坑の埋設が完結する前、開口部付近が凹地となったところを選んで設置された可能性が高いと思われる。

〔出土遺物〕

土器（450～452）（第227図、写真図版174）。

鐸形土製品（1171）。

円盤状土製品（1259）。

匏状石器（2117）。

※以上の遺物はRD73との重複部から出土したものである。

RD73土坑（第164図、写真図版142）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 r グリッドに位置する。RD72の底面において重複する土坑状の落ち込みとして検出された。

〔規模・形状〕検出面はRD72底面だが、RD72の埋土（埋設途中か）を切って構築されたことが土層断面からわかっている（後述）。しかし重複部における本土坑の壁面は、一部でRD72のそれを共有するらしいことや、両遺構の埋土の境界が判然としないことなどから、RD72底面より上位における本土坑の形状はよくわかっていない。おそらくRD72の埋土を概ね円形に掘り下げ、底面に到達した後に、さらに下位へ楕円形の土坑を構築したものと考えられる。

RD72の底面にみられる開口部は96×60cmの楕円形を呈し、概ね直立あるいは内傾する壁面を持つ。底面は114×66cmの楕円形。RD72底面からの深さは34cm、RD72の検出面（V b 層面）からの深さは100cm前後である。

〔埋土と堆積状況〕断面B-B'はRD72と本土坑の重複部の土層断面を示したものである。図に見る通り、RD72底面よりも上位に堆積する暗褐色土層（1層）が、本土坑底面付近まで連続して堆積している。したがって、B-B'を記録した中央部～南部においては、本土坑とRD72が壁面を共有していることがわかる。一方、RD72開口部北端を通る断面A-A'では、RD72のオーバーハング部に堆積した黒褐色土（4 a 層）を、本土坑及びRZ10埋設土器が切っている様子が確認された。

このような土層断面から堆積過程を詳細に復元することは困難だが、完掘後の形状を立体的に観察した結果、本土坑は、半埋没の状態のRD72を再掘し、その底面をもう一段深く楕円形に掘り下げたものと判断した。本土坑の最低面からは長径40cmほどの大形礫がやや北東側に寄って出土している。墓塚である可能性高いとみられる。

〔重複遺構〕RD72を切り、RZ10に切られている。

〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕土器（453）（第227図、写真図版174）。

RD74土坑（第165図、写真図版124）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 2 q グリッドに位置する。V b 層上面において黒褐色土の明瞭な略円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部径約80cmの略円形、底面までの残存深度は52cmである。底面は中央がわずかに低い皿状を呈し、滑らかに整っている。壁は直立～わずかに内傾する。いわゆるフラスコ形土坑と見られる。

なお、作業指示の不徹底により、完掘時に開口部付近を甚だしく掘り広げてしまった。縄文時代早期遺構埋土によく似た、開口部周辺のV b 層（早期の埋土によく似る）を掘削対象土層と誤認したためである。

〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるVI層土ブロック層（5層）で、その上位はV a 層相当の黒色土とIV層相当の暗褐色土の混土層（3層）で一気に埋められている。底面中央の約10cm上位からは、径20cm弱の礫が置かれたような状態で出土している。

〔重複遺構〕RA75・79・83等を切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代後期初頭か。

〔出土遺物〕土器（454～456）（第227図、写真図版174）。

RD75土坑（第165図、写真図版124）

〔位置・検出状況〕北東部、I A 25r グリッドに位置する。V b 層上面において黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は75×58cmの楕円形、底面までの残存深度は26cmである。断面形は碗形で底面から内湾しながら自然に壁が立ち上がっている。南東側の内外にそれぞれ径20～30cmのピットをもつ。

〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるVI層土ブロック層（4層）で、その上位はV a 層相当の黒色土及びIV層相当の暗褐色土を主体とする土層によって埋没している。レンズ状の堆積をなすが、層界には凹凸が目立ち、底面直上と埋土上部からそれぞれ同一個体とみられる土器片が出土していることなどから、短時間のうちに人為的に埋められたものである可能性が高い。なお、南西壁際の小ピットにも土坑本体の埋土が連続している。同時に埋まったものと考えられる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

〔出土遺物〕土器（457）（第227図、写真図版174）

RD76土坑（第165図、写真図版124）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 2 p グリッドに位置する。VI層上面において黒褐色土の不整な瓢箪形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は208×154cmの鶏卵形、底面までの残存深度は60cmである。丸底状の底面をもち、最深部を北東寄りに持つ丸底状の底部を持つ。壁は下半で直立に近く、上半部は漏斗状に外反する。特に最深部から東側の壁面にかけてスロープ状にかけあがっている。

〔埋土と堆積状況〕底面直上は崩落土とみられるVI層土ブロック層に覆われ、その上位にはV a 層土を主体とする黒褐色土が堆積している。VI層土ブロックの多寡で分層しているが、人為的に埋められている可能性が高い。埋土下部には赤変の弱い焼土ブロックが比較的多く含まれる。類似する焼土は底面～東側壁面に転々と残存することから、上記の焼土ブロックはこれらが下部に崩落したものと考えられる。

〔重複遺構〕直接的な重複関係にある他遺構はなし。周辺の縄文時代早期遺構のうちV b 層土を埋土の主体とする一群よりは新しいと考えられる。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代中期～前期初頭か。

〔出土遺物〕

土器（458）（第227図、写真図版175）。

敲磨器類（2559）。

RD77土坑（第109図、写真図版124）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 3 p グリッドに位置する。RA69の埋土上面で、褐色土円形範囲の周囲に同心円状に黒色土帯が巡る範囲として検出された。当初、風倒木根と考えていたが、底面付近に弱変焼土の生成が確認されたことから、RD76に類似する土坑の可能性があるものと判断し精査を行った。

〔規模・形状〕開口部は132×126cmの略円形、底面までの残存深度は54cmである。底面は丸底状を呈する。壁は下部で直立に近く、中～上部は弱く内湾しながら外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕底面には赤変の微弱な焼土の生成が認められる。同様の焼土は壁面にも斑状に残存している。この面はⅤa層相当の黒褐色土を主体とする土層に覆われており、この土層にも類似の焼土ブロックが含まれることから、上部からの土壌の流入等に伴って壁面焼土層が崩落したものとみられる。本層堆積の後、凹地となった本遺構内部は検出面まで一気にⅥ層相当土によって埋められている。

〔重複遺構〕RA69を切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期初頭か。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD78縮し穴（第166図、写真図版125）

〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡA2oグリッドに位置する。Ⅵ層上面において橙色粒子を含む黒褐色土の明瞭な長楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は290×42cmの細長い楕円形、底面までの残存深度は116cmである。底面は長さ298cm、幅は最大でも8cmと極めて細く、両端から中央部まではほぼ水平となっている。横断面はY字状を呈し、底面から90cmほどのところまではほぼ直立し、開口部でわずかに開く。長軸両端の壁はごくわずかに内傾し開口部にむかって直線的に立ち上がっている。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅣ層土とみられる暗褐色～黒褐色土である。下部に壁崩落土とみられる黄褐色土層を挟むほかは、概ね上方からの流入土によって埋没したものと推測される。埋土最上部には橙色粒子を含むⅢ層土の流入も認められる。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土主体土の堆積年代から、縄文時代後期初頭以降に構築され後期中葉には埋没を終えたものと考えられる。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD79縮し穴（第166図、写真図版125）

〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡA4qグリッドに位置する。Ⅵ層上面において橙色粒子を含む黒褐色土の明瞭な長楕円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕開口部は358×82cmの細長い楕円形、底面までの残存深度は122cmである。底面は長さ322cm、幅は10cm前後と極めて細く、両端から中央部まではほぼ水平となっている。横断面はV～Y字状を呈し、底面から100cmほどのところまではわずかに外傾して立ち上がり、開口部がやや大きく開いている。長軸両端の壁は直立あるいはごくわずかに外傾し開口部にむかって直線的に立ち上がっている。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅣ層土とみられる暗褐色～黒褐色土である。下部に壁崩落土とみられる黄褐色土層を挟むほかは、概ね上方からの流入土によって埋没したものと推測される。埋土上部は橙色粒子を含むⅢ層土によって埋没している。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土主体土の堆積年代から、縄文時代後期初頭以降に構築され後期中葉には埋没を終えたものと考えられる。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RD80陥し穴 (第167図、写真図版125)

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 4 r グリッドに位置する。当初、RB02内部に敷き均された黄褐色土範囲の西縁部に重複する細長いⅢ層土範囲として認識された。これに似た根拠乱が周囲に点在していたため、この時点では遺構として扱わず、RB02の精査に先に着手したのだが、RB02の完掘後、VI層上面において橙色粒子を含む黒褐色土の明瞭な長楕円形範囲として検出されたため、精査に着手したものである。

〔規模・形状〕検出後に残存する開口部は300×38cmの細長い楕円形、底面までの残存深度は146cmである。本来の掘り込み面は周囲に堆積するV層よりもさらに上位にあったと考えられるので、平面規模・深さともに残存値を大きく上回っていたものと推測される。底面は長さ276cm、幅は8cm前後と極めて細く、両端から中央部まではほぼ水平となっている。横断面は細いV字状を呈し、底面から現在の開口部まではわずかに外傾して直線的に立ち上がっている。長軸両端の壁はほぼ直立している。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はIV層土とみられる暗褐色～黒褐色土である。下部に壁崩落土とみられる黄褐色土層を挟むほかは、概ね上方からの流入土によって埋没したものと推測される。埋土上部は橙色粒子を含むⅢ層土によって埋没している。

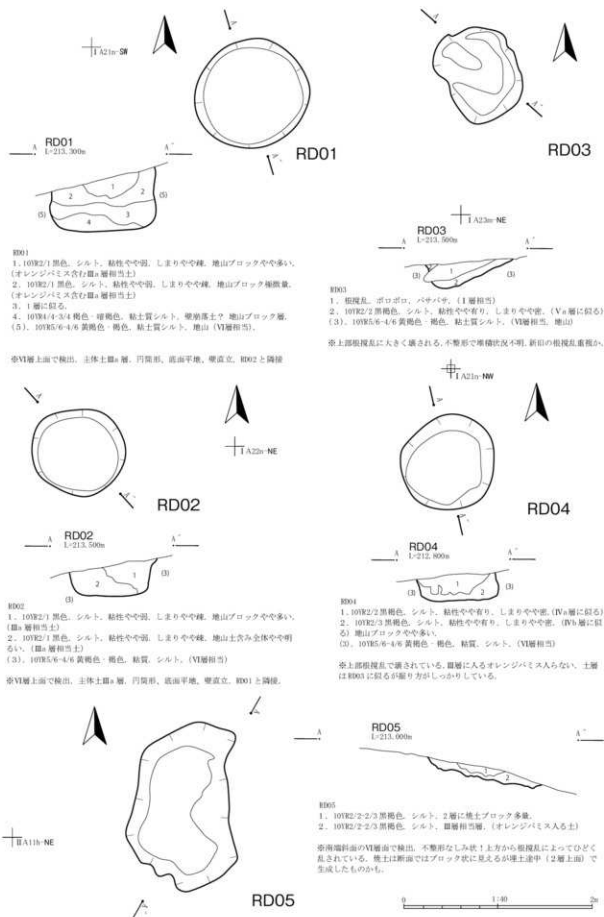
〔重複遺構〕RB02内に敷き均された黄褐色土層を切っている。

〔遺構の時期〕埋土主体土の堆積年代から、縄文時代後期初頭以降に構築され後期中葉には埋没を終えたものと考えられる。

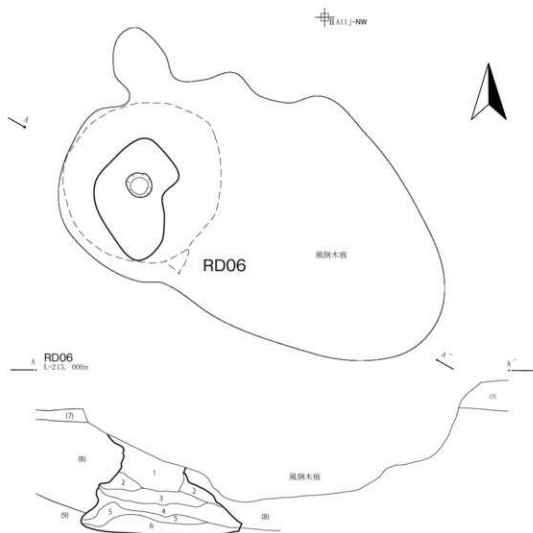
〔出土遺物〕

土器 (736) (第248図、写真図版191)。

敲磨器類 (2417・2608)。



第145図 RD01～05



RD06

1. 101K3/2-3/3 黒褐色・緑褐色。シルト、粘性やや有り、しまり密。炭化物(φ5-10mm)少量。
2. 101K2/2 黒褐色。シルト、地山ブロック少量含む。(3層に地山ブロック入る層)
3. 101K2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまり密。炭化物(φ5-10mm)微量。1層より厚っぽい。
4. 101K2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまり密。地山ブロック少量。
5. 101K2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや疎。地山ブロック少量。
6. 101K2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや疎。地山ブロック多量。

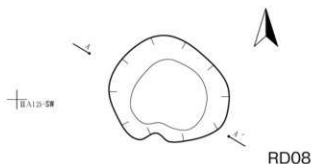
(7). 101K5/6-4/6 黄褐色・褐色。シルト、V層上部に相当。以下地山。(8)より意味がある。

(8). 101K5/4-3/6 に近い黄褐色・黄褐色。粘土質シルト、V層下部に相当。

(7)よりしまり密。

(9). 7.51K1/6-3/4 褐色・緑褐色。砂質シルト、φ5mm強の小礫(軽石?)多量。酸化鉄染漬し濃い。

寄上部を風間木に切られている。層上にオレンジバネを含まない。風間以後のもの。断面は平坦、断面大きく内傾し断面に凸角部。開口部は断面が広い。たん草まつたのり下断面が広がっている。検出面はV層上面(南傾斜面)。層間土が大量に入る風間木に切られている。

RD08
A 1:212 100m

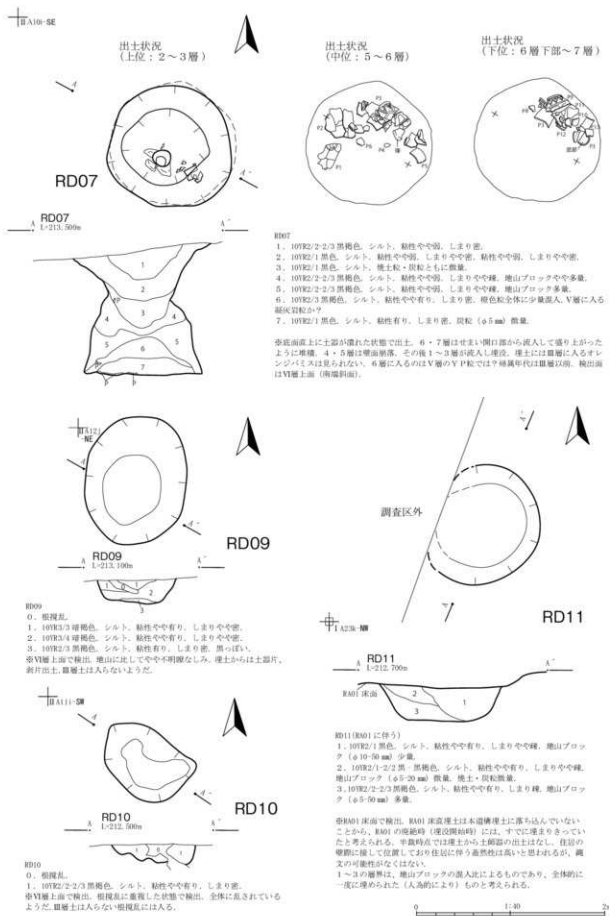
RD08

1. 101K4/4 褐色。シルト、地山V層上。
2. 101K2/2 黒褐色。シルト、3層より厚っぽい。
3. 101K2/3 黒褐色。シルト、地山ブロック少量。
- (4). 101K4/4-4/6 褐色。シルト、V層以下地山。

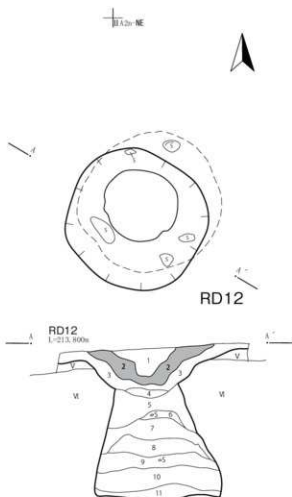
寄上部と同心円状に検出。上部からオレンジバネ入る黒色土(層0)の根拠が見入ることから層0層以後のものと思われる。

0 1:40 2m

第146図 RD06・08



第147図 RD07・09~11



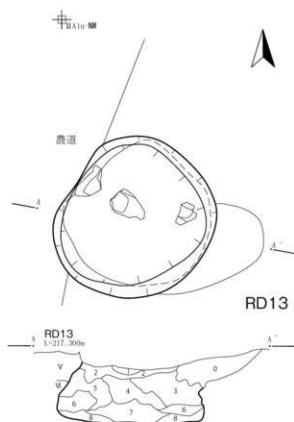
RD12

RD12
L=213.800m

RD12

1. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト、粘性有り。しまりやや砂、IV層土に似る。
2. 10YR2/2 黒褐色。シルト、VI層土ブロック（大きな土塊）多量。
3. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性有り、しまり密。
4. 2層に似る。
5. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り。しまりやや砂、VI層ブロック少量。
6. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性有り、しまり密。ベターロとしてゐる。
7. 3層に似る。
8. 4層に似る。
9. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト、1層に似る。
10. 5・7層に似る。
11. 6・8層に似る。

※2層はVI層土ブロック、崩落土状に見えるがVI層土面より上位に位置することから、上部構造にVI層土が用いられていたのかも。底面からやや深いところで壁跡に大型縦石あり。



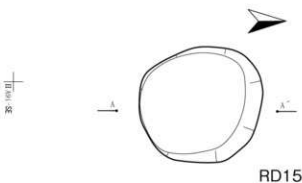
RD13

RD13
L=217.300m

RD13

0. 10YR2/4 暗褐色。シルト、地山（VI層）ブロック多量。粗粒状。
1. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまり密。
2. 10YR2/2-2/3 暗褐色。黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまり密。1層より明るい。
3. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや密。炭粒散見。
4. 10YR2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや密。地山（VI層）ブロック少量含む。明るい。
5. 10YR2/2 黒褐色。シルト、3層に良く似る。
6. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまり密。1層に似る。
7. 10YR2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや密。地山（VI層）土全体に多量。
8. 10YR2/3 黒褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや密。地山（VI層）ブロック少量。

※上部を削平されたフラスコ状土坑と思われる。壁の崩落と流入土により崩壊埋没したものと思われる。



RD15

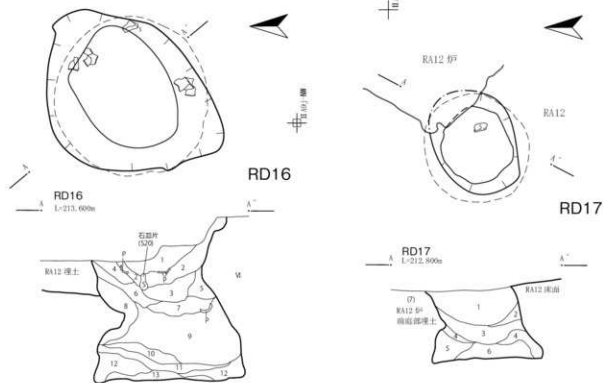
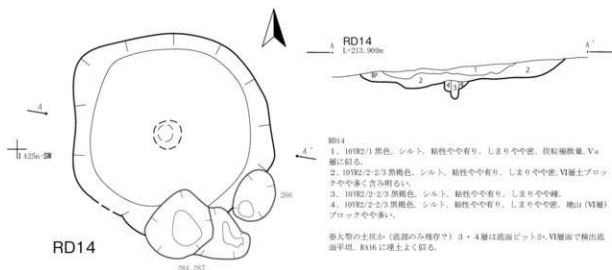
RD15
L=213.400m

RD15

1. 10YR2/2-2/3 暗褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや砂、VI層土ブロック散見、IV層土土塊が上部にIV層土のオレンジパキス含む。

※大断面 RD12 の南側断面に土が中に垂れ下り、これをまわっている。底面平地で壁はしっかり立ち上がる埋土はIV層に似たやまの暗褐色シルト。上部にのみ部分的に崩層由来のオレンジ粘土を含む。地山VI層の混入もあるがランダムな入り方で全体に一様、人為的埋土の可能性。

0 1:40 2m



RD16

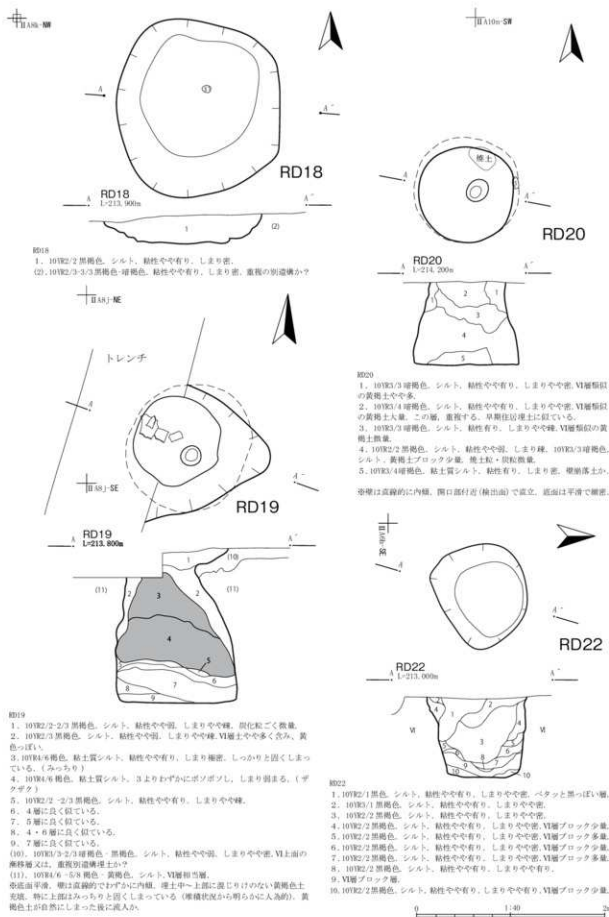
- 101R2/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや密、VI層土小ブロックやや多い。
- 101R2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや疎、アガツカ、炭粒 (φ5-10mm) 極微量。
- 101R2/3 黒褐色、シルト、2層に似る、VI層土全体に炭粒含有、やや明るい。
- 101R2/3-3/4 緑褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや密、VI層土多量、黄色い層。
- 101R2/3 黒褐色、シルト、3層に似る、3層よりVI層土混入多い。
- 3層と同土。
- 3層に準じたブロック・図形・尺多量、粘性やや有り、しまりやや密。
- 101R2/3 黒褐色、シルト、5・6層に似る、6層より図形やや多い。
- 101R2/2 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや密。
- 3R14-4/8 赤褐色、シルト、塊土、上面及び下面近くはブロック状を呈するが現地性の可能性有り。
- 101R2/2 黒褐色、粘土質シルト、粘性有り、しまり密、炭粒 (φ10mm) ごく微量。
- 101R2/3 黒褐色、シルト、VI層ブロック多量、粘性やや有り、しまりやや疎、赤褐色土。
- 101R2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや密。

※RA12 南東壁に重複し、これを超える。RA12 埋土が壁に現れる部分では立ち上がり不明瞭。
12層土から深縁 (大型破片) 出土 (南壁に寄る)、底面は甲面に繋がる中央付近のみがわずかり緩化、壁面は下層がほぼ直立、中部は壁より上層で外傾。

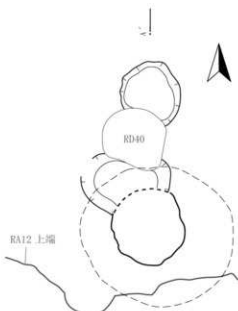
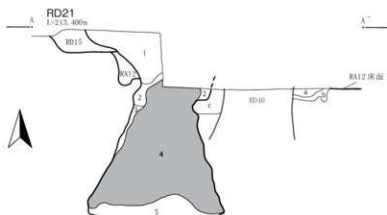
RD17

- 101R2/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや疎、炭片 (φ10~20mm) 散 (目立つ)。
- 101R2/2-2/3 黒褐色、シルト、しまり疎、VI層ブロック多。(壁面跡)
- 101R2/2 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや密。
- 101R2/2-2/3 黒褐色、シルト、VI層ブロック多。(壁面跡)
- 101R2/2-2/3 黒褐色、シルト、VI層ブロック少。(ブロック跡のみ)
- 101R2/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性有り、しまりやや密。
- 101R2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや疎、RA12 出入口 pit-埋土

0 1:40 2m



第150図 RD18～20・22

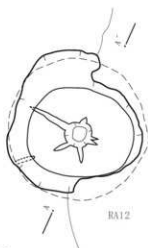



RD21

RD21

- a. 101K5/8-4/6 黄褐色・褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや有り、VI層土。(人為的に入れられた黄褐色土か)
 b. 101R2/2-2/3 黒褐色・黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。炭粒層。炭粒層多量。
 c. 101R2/2 黒褐色。シルト。粘性有り。しまり密。炭粒や中多量も層より落ちている。RA12p(14)の埋土から連続して残っている。(埋設時の埋土だろう。)
 1. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや疎。炭粒層。炭粒層多量。
 2. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。1層にVI層土ブロック多量。
 3. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。1層に良く似る。
 4. 101R4/6-5/8 褐色・黄褐色。シルト。粘性やや有り。しまり密。ガッチリしまっている。(土じりのないVI層土)。
 5. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや疎。

※RA12 南壁付近でRA12埋土を切ってつくられたフラスコ。ほぼ大半が4層で埋められている。



RD23

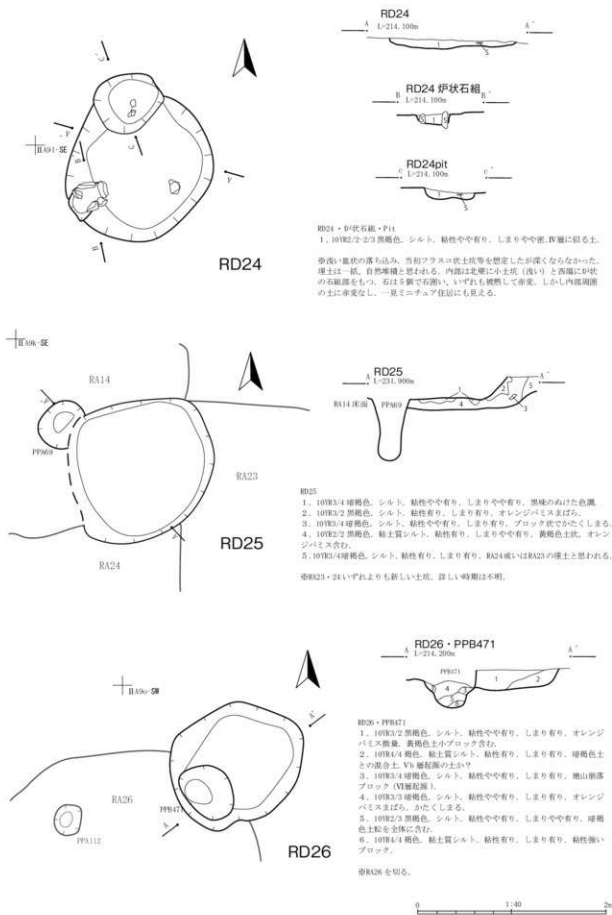
RD23

1. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや疎。6.9mm径の小炭粒散在に含む。
 2. 101K5/4-4/6 に近い黄褐色・褐色。粘土質シルト。粘性やや有り。しまり極密。ガッチリ。人為的に埋められたものだろう。
 3. 101R2/1-2/2 褐色・黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。落ちている。
 4. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。1層に似る土にVI層小ブロック少。
 5. 101R5/8-4/6 黄褐色・褐色。粘性弱。しまりやや疎。ブロック(VI層土ブロック)層。埋土層土。
 6. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。
 7. 101R2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや疎。VI層土小ブロック多量。
 8. 101R2/1-2/2 褐色・黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。2層に似る。

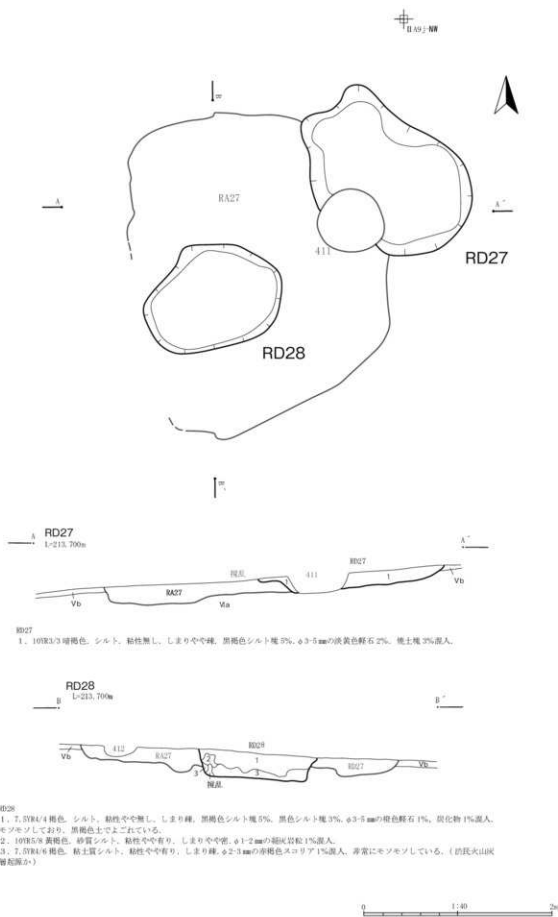
※当利2層土を断面と照証。一旦浅い土坑として処理したが2層が露れることがわかり西壁。半埋設の状態で2層によって埋められたものと思われる。2層は土じり気がなくブレンシ。ガッチリしまっており断山によく似る。



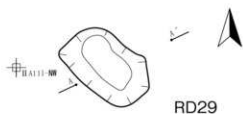
第151図 RD21・23



第152図 RD24～26



第153図 RD27・28



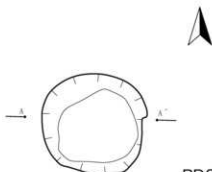
RD29



RD29

1. 7.5YR3/4暗褐色、シルト、粘性無し、しまり練、YP2%、炭屑石1%混入、(Vb層に起因か)
 2. 7.5YR4/6-10YR4/6褐色、シルト、粘性無し、しまりやや練、黄褐色土塊5%、YP%混入
 3. 10YR4/6褐色、シルト、粘性やや無し、しまりやや練、黒褐色土塊10%・黄褐色土塊3%、YP2%混入
 4. 7.5YR5/6明褐色、シルト、粘性やや有り、しまり練、底面付近に塊状で散見される。

+ 目録位置



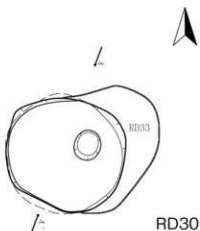
RD31



RD31

1. 7.5YR4/4褐色、シルト、粘性無し、しまり練、黄褐色シルト塊5%、YP2%
 2. 7.5YR2/2黒褐色、シルト、粘性無し、しまり密、褐色シルト塊7%、YP(φ5-10mm)10%
 3. 7.5YR5/6明褐色、シルト、粘性無し、しまりやや密、褐色シルト小塊3%、YP1%、(黄褐色土塊少)
 4. 7.5YR5/6明褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや練、黄褐色シルト小塊2%。

+ 目録位置



RD30



RD30

1. 10YR3/2黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや有り、本底掘戻。
 2. 10YR3/3暗褐色、シルト、粘性あまり無し、しまりやや有り、YPおよび白色のバミスを全体に含む。
 3. 10YR3/4暗褐色、シルト、粘性やや有り、しまりあまり無し、泥入物無し。
 4. 7.5YR2/2黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまり有り、YP、白色バミスをまばらに含む、掘くしまる。
 5. 10YR3/4暗褐色、粘土質シルト、粘性有り、しまり有り、壁の掘じりが4層より多い、掘くしまる。
 6. 10YR4/3に近しい黄褐色、シルト、粘性有り、しまり有り、3層に層状に入る、YPの泥入物少量。

形上にあるBA15床面で検出。BA15の柱穴構造物に壁が広がることから土坑を確定した。

+ 目録位置



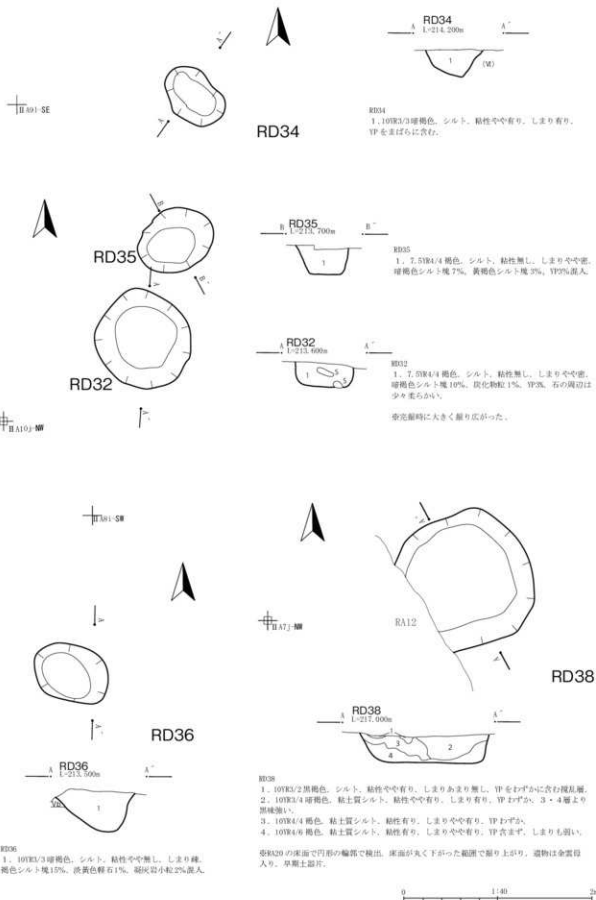
RD33



RD33

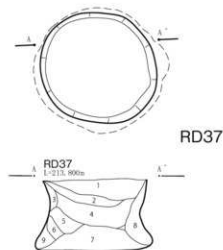
1. 7.5YR2/2黒褐色、シルト、粘性無し、しまりやや密、明褐色シルト塊5%・YP2%混入。

0 1:40 2m



第155図 RD32・34～36・38

11 48.2E



RD37

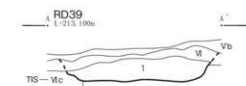
RD37

- 10181/1/1 黒色、シルト、粘性無し、しまり練、出生スコリア10%、炭化物粒1%混入、褐色シルト小塊3%。
- 10181/6 褐色、シルト、粘性やや無し、しまり練、赤褐色スコリア2%、黒褐色シルト小塊5%、淡黄色スコリア1%混入。
- 7, 51933/3 暗褐色、シルト、粘性やや無し、しまり練、非常にモゾモゾしている、黄褐色シルト小塊3%、(礫状粘土層)。
- 10182/1 黒色、シルト、粘性やや有り、しまり練、赤褐色スコリア1%、褐色シルト塊3%、炭化物粒1%。
- 10183/4 暗褐色、シルト、粘性無し、しまり練、黒色シルト塊10%、淡黄色緑石3%。
- 10185/6 黄褐色、シルト、粘性無し、しまり練、黒色シルト塊7%、(礫状粘土層)。
- 10181/7/1 黒色、シルト、粘性やや有り、しまり練、暗褐色シルト塊3%、褐色シルト塊3%。
- 10183/4 暗褐色、シルト、粘性無し、しまり練、褐色シルト塊5%、黒褐色シルト小塊3%、(礫状粘土層)。
- 10183/4 暗褐色、シルト、粘性無し、しまり練、礫状粘土層。

11 48.28E



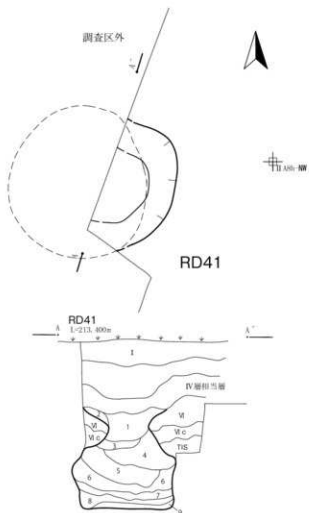
RD39



RD39

- 10181/6 褐色、シルト、粘性無し、しまりやや硬、褐色シルト塊20%、1P10%、炭化物小粒1%混入。

調査区外



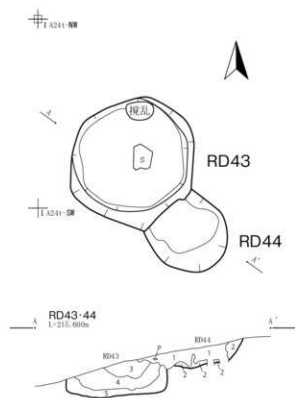
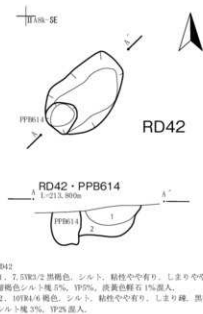
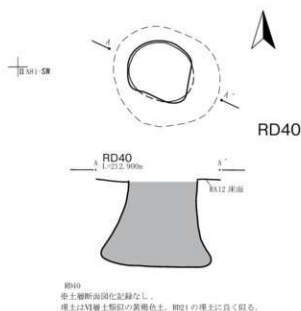
RD41

RD41

- 10182/2 黒褐色、シルト、粘性無し、しまり練、褐色シルト塊10%混入、暗褐色シルトしみ状にみられる、IV層状混入。
- 10181/6 褐色、シルト、粘性無し、しまり練、暗褐色シルト塊2%・褐色緑石3%混入。
- 10181/7/1 黒色、シルト、粘性無し、しまり練、暗褐色シルト塊7%混入。
- 10183/4 暗褐色、シルト、粘性やや有り、しまり練、褐色シルト塊7%、黒褐色シルト塊3%混入。
- 10182/2 暗褐色、シルト、粘性無し、しまり練、褐色シルト塊10%混入。
- 10185/6 黄褐色、シルト、粘性やや無し、しまり練、非常にモゾモゾしている、赤色スコリア2%、黒褐色シルト塊3%混入。
- 7, 51933/4 暗褐色、シルト、粘性有り、しまりやや硬、黄褐色シルト塊2%混入。
- 7, 5184/6 褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや硬。
- 10187/3/2 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまりやや硬、黄褐色シルト粒3%混入。

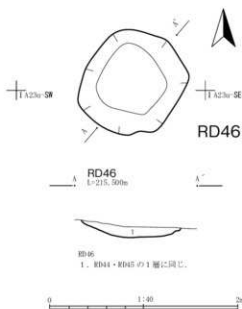
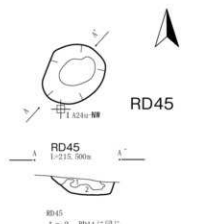


2 遺構

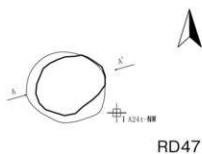


- RD43・44
1. 10TR3/3 暗褐色。シルト、粘性やや有。締まりやや密。VI層土ブロック・黒色土ブロック含む。木屑多。根痕見だらう。
2. 10TR4/4-3/4 相一暗褐色。シルト、粘性やや有。締まり密。
3. 10TR2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有。締まりやや密。炭化物粘層部。
4. 10TR2/2 黒褐色。シルト、粘性やや有。締まりやや密。VI層土ブロック少量。全体やや黄味。
5. 10TR3/4 暗褐色。シルト、粘性やや有。締まりやや密。VI層土全体にやや多く含む黄味強い。

※1～2：RD44、3～5：RD43。RD44は根痕見の可能性高い。RD43は印痕形あるいはアラスコ型土。遺物は平均に集っている。埋土は層別落の5・4層。混入上の3層の順に堆積。主堆土の暗褐色シルトは7層ベースだらう。上面にわずかに含まれる褐色砂子（生田スロリア）は2層層表からの混入だらう。



第157図 RD40・42～46



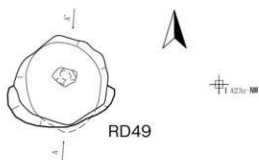
RD47



RD47

1. 10YR2/2-3 黒褐色。シルト。粘性有。締まり密。
2. 10YR3/2-3 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。VI層土小ブロック（径2～10mm）少量。1より明るい。

VI層土小ブロック（径2～10mm）少量。1より明るい。



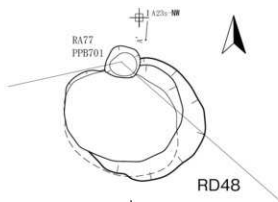
RD49



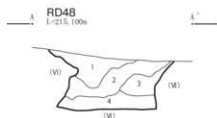
RD49

1. 10YR3/3-4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや疎。全体にVI層土小ブロック（径5～10mm）少量含む。

※VI層土ブロックの入り方は全体に一律であり、一度に埋まったものとみられる。人為の可能性大。埋土の主体の暗褐色土はIV層土による隠る。Ⅱ・V層土が入る他の遺構に比して明るい印象。



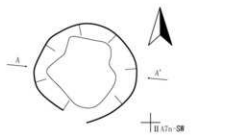
RD48



RD48

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性有。締まりやや疎。埋土中。最も厚い部分。
2. 10YR3/2-3 黒褐色。暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。VI層土含む。1より明るい。
3. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。VI層土含む。2より明るい。
4. 10YR3/2-3 黒褐色。暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。2に似る。

※断面は平坦に敷いた。全体がやや硬化したようにしっかりしている。



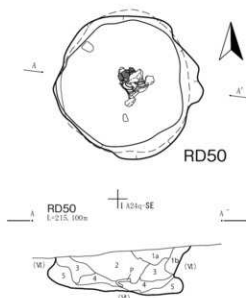
RD54



RD54

1. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性無。締まりやや密。黒褐色シルト塊7%。Vb層主体（PbIV）。
2. 10YR4/4 褐色。シルト。粘性無。締まり密。Vb層主体の埋土混入土層（P2～P8）。早期の土灰。2層は一見埋土のようだが、少し時間をおくと硬くなり、隠れる土であることが判別できる。

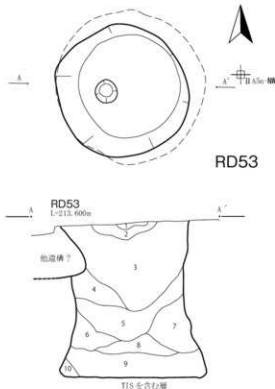




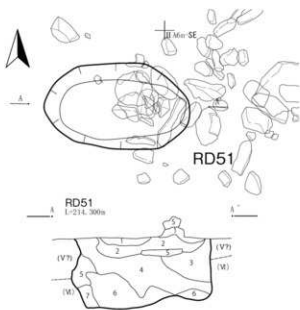
RD50

- 1a. 2. 10YR3/2-3/3 黒褐色・暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。断面片散見。全体に焼土を含み希疎。
 1b. 10YR4/3-4/4 褐・暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。VI層土プロット多数。互層に似る。礫層跡土だろう。
 2. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。炭化粘粉散見。黒褐色の褐色粘粉層（上方からの埋込によるもの）
 3. 10YR4/3-4/4 褐・暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。褐色土プロット多く含む全体明るい。
 4. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。本層上面に土器等の遺物分布。流入土だろう。
 5. 10YR4/4 褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。断面直上を覆う礫層跡土。

断面直は平坦。全体にやや硬化ししっかりと締まっている。



RD53



RD51

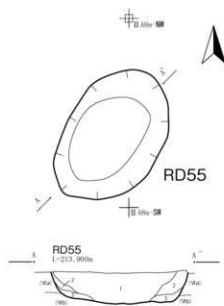
1. 10YR3/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。2層より明るい。RA33内部に広がる暗褐色土に似る。
 2. 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。全体に褐色土(VI層土)プロットを散見含む。
 3. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。混入物ほとんどなく2・4より厚疎な層。
 4. 10YR2/2-2/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。2より似るが褐色土の混入多い。
 5. 10YR3/4-4/4 褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。褐色土プロット多。
 6. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。Vh-Viの粘厚層か。
 7. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性有。締まりやや有。

谷東西長軸の横断面。直面は比較的平坦。壁はほぼ直立。しっかりと整った断面。土質は RA33 の現状の埋込土の硬さより若干軟らかい（産地別では RA33 の硬さ程度）。直面上部に 100 cm 以上の礫層出土（2層目上面に若干な状態）。直土は全体に埋込土(VI層)プロットを含む。A 高の約一層直土とみられる。直土は内側から深し込まれている。内部にはほとんど出土遺物なし。直面からも崩壊。断面直より上段にも、本土に接すると思われる礫が出土している。これらは RA33 の褐色土より若干軟らかい出土しているため、本土は RA33 の硬さより若干柔らかいものと考えられる。

RD53

1. 10YR2/3 暗褐色。シルト。粘性なし。締まりやや有。IV-V 主体か。
 2. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。黒褐色シルト小プロット7～10%。9層目に含まれる褐色プロットの疎層か。火山灰? (サンブル採取)。
 3. 10YR2/2 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。褐色・黄褐色スロア? (径 10 mm) 1～2%。褐色スロア? (径 2～3 mm) 10～15%。Vh 主体。
 4. 10YR2/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。褐色シルト小塊 5%。Vh 層土粉状に 10～15%。Va～Vb 主体。
 5. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。VI層土 15～20%。褐色シルト塊 15～20%。4に似る。
 6. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。褐色シルト小塊 1%。Vh 層土主体。礫層跡土層。
 7. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。褐色シルト塊 20%。VI層土の崩壊層。
 8. 10YR2/2-2/3 黒褐色・暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。黄褐色シルト (約 1%)。Vh 層土主体。
 9. 10YR2/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや有。VI層土 (約 1%)。小塊 7～10%。褐色シルト塊 7%。炭化物約 3～5%。産スロア? 1%。礫層跡の土器片出土。
 10. 10YR5/6 黄褐色。シルト粘性やや有。締まりやや有。礫層跡土。

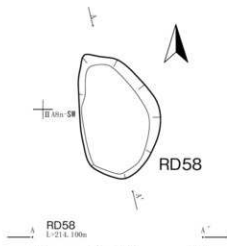
0 1:40 2m



RD55

1. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性無。締まりや中密。(V~Vb層主体)。Vb層厚20% (IPを多く含む)。凝灰岩小粒7~10%。
2. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性無。締まりや中密。(Vb層主体)。Vb層厚10%。凝灰岩小粒5~7%。
3. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性や中硬。締まりや中密。Vb層主体の礫山崩入土層 (IPほとんど含まない)。

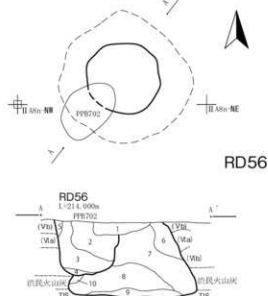
※掘りすぎか、北側の2層はなくなりまわっており、ガリガリすき。凝灰岩小粒。



RD58

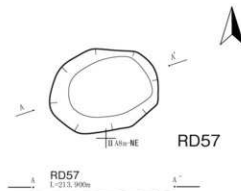
1. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性中~やや中硬。締まりや中密。棕色軽石(径3~5mm)10%。褐色シルト塊10~15%。IV層主体。一部埋没だろう。
2. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性中。締まり中~やや中密。IP1~2%。Va~Vb主体。
3. 10YR3/2 黒褐色。シルト。粘性中。締まりや中密。IP5%。
4. 10YR4/6 褐色。シルト。粘性やや中。締まり中。
5. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性やや中硬。締まりや中密。IP2~3%。

※草層(1のみ)、2~3はBA40 埋没小。



RD56

1. 10YR2/1 黒色。シルト。粘性中~やや中。締まり中~やや中硬。棕色軽石(生出土層コア)7~10%。
2. 7.5YR2/1 黒色。シルト。粘性中~やや中。締まり中~やや中硬。棕色軽石3~5%。褐色シルト塊10~15%。
3. 7.5YR2/1 黒色。シルト。粘性中。締まりや中硬。炭化物粒1~2%。褐色粘土塊3~7% (p5703の1層に共通)。棕色軽石15~20%。
4. 10YR3/6 黄褐色。シルト。粘性やや中。締まりや中密。黒色シルト塊3~5%。
5. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性やや中硬。締まりや中密。黒色シルト塊30%。
6. 10YR2/1 黒色。シルト。粘性無。締まりやや中硬~中。褐色シルト塊10~15%。棕色軽石1~3%。
7. 10YR1, 7/1 黒色。シルト。粘性中。締まりやや中硬。棕色軽石(IP?径5~15mm)10~15%。
8. 7.5YR1, 7/1 黒色。シルト。粘性やや中。締まり中~やや中硬。棕色軽石3~5% (7より少ない)。褐色小粒1~2%。
9. 7.5YR2/1 黒色。シルト。粘性。締まりとも8より強い。棕色軽石5%。褐色シルト小塊3%。
10. 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性中。締まりやや中硬。VI層土の二次堆積(崩落土)。

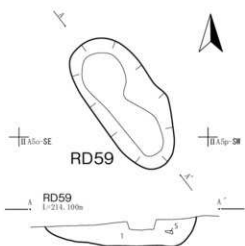


RD57

1. 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性無。締まり中~やや中硬。炭化物粒1%。Vb層厚1%。Vb層主体の草層。形状はRD54に似る。浅い埋没の土坑(早期?)。

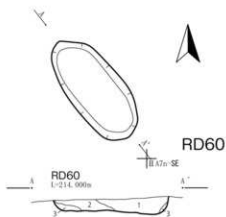
0 1:40 2m

第160図 RD55~58



RD59

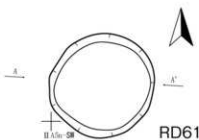
1. 10YR2/3 黒褐色、シルト、粘性無、締まり密、V層主体で10T～10S層に、Vb層厚10%、一括処理。



RD60

1. 10YR2/3 黒褐色、シルト、粘性やや弱、締まりやや密、黒味の強いVb層主体、Vb層厚7～10%、S層に広がる。
2. 7.5 YR3/4 暗褐色、シルト、粘性やや弱、締まりやや密、Vb層厚10%（Vb層主体）。
3. 10YR4/6 褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、Vb層主体の地山混入土層、黒褐色シルト層15～20%。

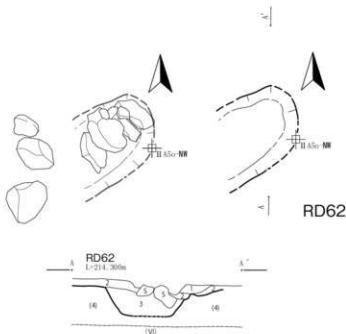
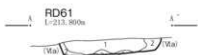
※全体的に早期の型式の葬儀状況と異なる。



RD61

1. 10YR2/3 黒褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、Vb層小塊7%（V層範囲）、褐色軽石1%。
2. 10YR3/4 暗褐色、シルト、粘性中、締まりやや密、埋溜薄土層（Vb層範囲）。
3. 10YR4/6 褐色、シルト、粘性中、締まり中（Vb層範囲）、黒褐色シルト層10～15%。

※フラスコの下部のみ？



RD62

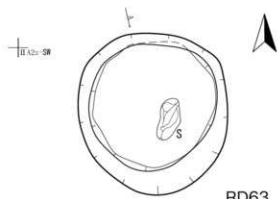
RD62

1. 7.5YR4/6 褐色、シルト、粘性有、締まり密、2の被焼成。
2. 10YR3/3-4 暗褐色、シルト、粘性やや弱、締まり密、Rd13内部に広がる暗褐色土。
3. 4に2のブロックをやや多量に含む、入為による一括埋土だらう。
4. 10YR2/2-3 黒褐色、シルト、褐色土ブロックを全体に含む（結果的にVb層土～早期居住層の埋土となった）。

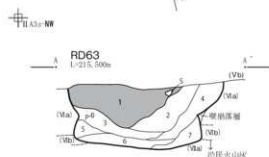
※本土坑はR051に類似の縄文形土坑（墓坑）か、土坑の「掘り込み～埋め戻し」は、Rd13内の暗褐色土堆積（4期前後2層）より古い、1層の地土生成にさきかたぬ本土坑上部の大形線には土割（地土割）に非発が認められる。土坑（R062）掘削→埋め戻し（埋設葬）→Rd13内部に暗褐色土堆積（焼成均し？）→地土生成（被焼成）の順。

0 1:40 2m

第161図 RD59～62

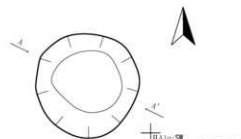


RD63

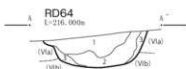


RD63

1. 10YR4/6 褐色。シルト、粘性中、締まりやや密、(黄色土層)。層の中央部ほど黄色がきれて周囲ほど黒色まで内れている。黒褐色シルト10～15%。
2. 7.5YR2/2 黒褐色。シルト、粘性無、締まりやや密。(IV～V層範囲)。黄色土層5～7%。炭化物粒2～3%。
3. 10YR2/3 茶褐色。シルト、粘性中、締まりやや疎。炭化物粒1～2%。(V～Vb層主体)。V層境まで2%。明黄褐色シルト境20～25%。土器片含む(甲)。
4. 10YR2/2 茶褐色。シルト、粘性無、締まり疎、明黄褐色シルト境30～40%。壁上部(Ma層)をまきこんだV層主体の順落土層。
5. 10YR2/3 茶褐色。シルト、粘性中、締まりやや疎。明黄褐色シルト境3%。(V層主体)。
6. 10YR5/8 黄褐色。シルト、粘性無、締まり中、壁(オーバーハンフ部分)にVb層順落土層。黒褐色シルト小塊10～15%。
7. 10YR3/4 暗褐色。シルト、粘性中、締まりやや疎。黒褐色シルト小塊7%。褐色シルト小塊3%。(IV～V層範囲)。
8. 10YR5/6 黄褐色。シルト、壁順落土層。



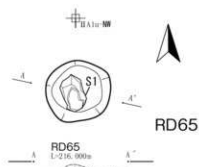
RD64



RD64

1. 7.5YR4/4 褐色。シルト、粘性無し、締まりやや密。暗褐色シルト境10～15%。炭化物粒1%。小礫(径5～10mm)1～2%。
2. 10YR3/3 暗褐色。シルト、粘性中、締まりやや密、V_a～V_b層に属する。V_a層土小塊7～10%。
3. 10YR5/6 黄褐色。シルト、粘性無し、締まり中～やや密。暗褐色シルト境3%。壁順落土層。

※1はRD62の黄色土に似るが、やや非線を描びる。



RD65



RD65

0. 掘戻基。

1. 10YR2/3 茶褐色。シルト(V_a～V_b)。粘性やや中。締まりやや疎。
2. 10YR3/4 暗褐色。シルト、粘性やや中。締まりやや疎。V_b層土を少量含む黄褐色。

※横出面で大形竈(40×20cm)出土。上部が崩平されている可能性高い。後層粘土器の破片出土。



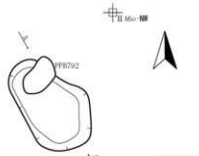
RD69



RD69

1. RD66の1層と同じ、粘性無、締まりやや疎。褐色軽石(径3mm)2～3%。IV～V層土層。
2. RD66の2層と同じ、粘性中、締まりやや疎。IV層土層?
3. RD66の4層と同じ、黄褐色軽石1～2%。

※内面?



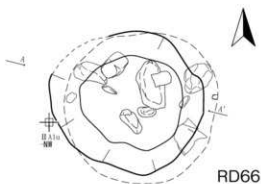
RD70



RD70

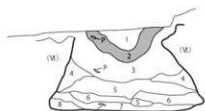
1. 10YR2/2.5 シルト、粘性無、締まり中、柱穴埋土。(V_b層主体)。
2. 10YR3/3 暗褐色。シルト、粘性無、締まりやや密。褐色シルト境10～15%。V_b層土層。
3. 10YR5/6 黄褐色。シルト、粘性無、締まりやや密。V_b層境3%。V_b層主体。(堆土崩入土層)。

0 1:40 2m



RD66

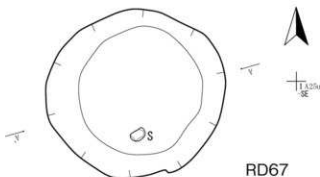
RD66
1/214, 300m



RD66

- 10YR5/4 暗褐色。シルト。粘性有。締まり密。2のにごったものか。
- 10YR4/6 褐色。シルト。粘性有。締まり密。VIに似る。
- 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや疎。1に似た褐色土ブロック多。炭化物粒(径5mm)微量。
- 10YR3/3 暗褐色。シルト。3にVI層ブロックやや多量。
- 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。VI層土ブロック多量(ほぼブロック層)。
- 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。炭化物粒(径2〜5mm)微量。本層下面に腐。土溜集中。
- 7.5 5Y5/3-3/1 黒褐色。暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。全体に腐。土溜集中。塊状性有。
- 10YR3/4 暗褐色。シルト。VI層土ブロック層。

※VI〜VIII層土面で検出。褐色。黄色。暗褐色土が同心円状に現れたもの。底面は平坦に上とのびている。三角アラスコ部に内挿する直線的な立ち上がり。底面は全面腐土を多く含む赤味の強い土層に覆われ、その上面に土層。腐が分布。腐は表面が赤黄。中心部に集中して出土(開口部からそのまま下に落下したよう)。東壁部に接して腐層が覆れている(オーナーバンドした壁の跡にあたる)。



RD67

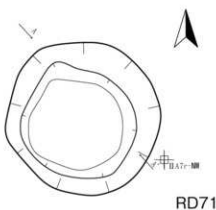
RD67
1/214, 600m



RD67

- 10YR2/2-2/2 黒褐色。シルト。粘性有。締まり密。やや赤味もつ。
- 10YR3/4 暗褐色。シルト。粘性有。締まりやや密。VI層ブロックやや多量。全体黄色味。炭化物粒(径2〜5mm)微量。
- 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。炭化物粒(径2〜5mm)微量。
- 10YR3/3-4 暗褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや疎。VI層土ブロック少量。炭化物粒(径2〜5mm)微量。
- 10YR2/2-2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや疎。
- 10YR3/4 暗褐色。シルト。VI土ブロック多量に含む。5に似るがVI層土ブロック多。

中核出由VI層土面。1・2・3〜4層が同心円状に見えた。底面平坦で東面。壁は壁が30cm程まで内傾し、屈曲して外傾に転がる。本家はアラスコ部だろう。層土の下部では顕微鏡的明確な段片が見入る。層土全体がやや赤味を帯びることから、層土が流入しているものとみられる。



RD71

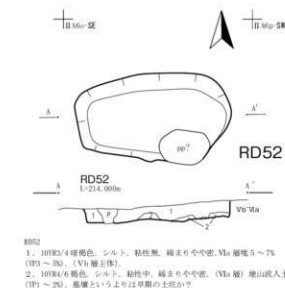
RD71
1/214, 800m



RD71

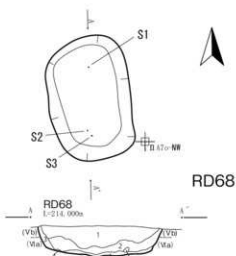
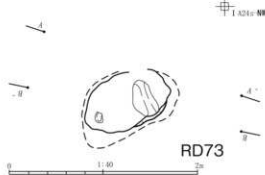
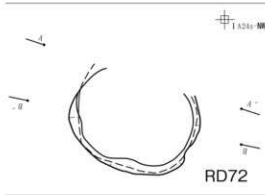
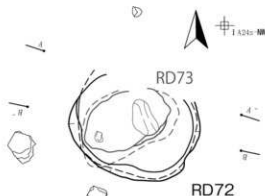
- 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性無。締まり疎。TP(1〜2%)少量含む。炭化物粒IX。(Vb〜Vc層土層)。灰遺構か?
- 10YR4/4 褐色。シルト。粘性無。締まりやや密。暗褐色シルト塊7〜10%。Vb層土層。VP3〜IV。
- 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性無。締まり密。非常に固くしまっている。炭化物粒3〜5%。
- 10YR5/8 黄褐色。シルト。粘性無。締まりやや密。Vb層土層(開口の崩落土層か?)。腐泥質小片2〜3%。VPIX。黒褐色シルト塊3〜5%。
- 10YR5/6 黄褐色。シルト。粘性やや有。締まりやや密。沢尻火山灰土層(TIX含む)。西壁(斜面下方)主体に見られる。

0 1:40 2m



R002

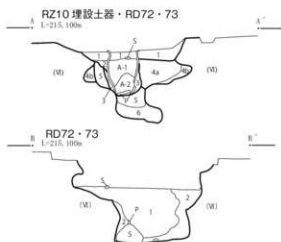
1. 10YR3/4 暗褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、Vh層 5~7% (IPI ~ 30)、(Vh) 層土体。
2. 10YR4/6 褐色、シルト、粘性中、締まりやや密、(Vh) 層 埋山状入土 (IPI ~ 20)、墓壁というよりは早期の土坑か?



R006

1. 10YR3/2 黒褐色、シルト、粘性無、締まりやや疎、褐色軽石 (径 5mm) 1%、IV ~ V層 主体小穴。
2. 10YR2/3 黒褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、褐色軽石 (径 5mm) 1%、VI層 主体小穴 (西側小穴)。
3. 10YR4/4 褐色、シルト、粘性無、締まり密、Vh層 主体、Vh層 小穴 5~7%。
4. 10YR4/6 褐色、シルト、粘性無、締まり中、淡黄色軽石 1%。

赤土層上で穴 (平土) 有。北側と南側に各 1 はりつくように出土している。墓としての最初の特徴土 (西側小穴?)、2 墓土も配石に関係する墓坑と考えられるが R068 より浅く、規模も小さい。R002 で右隣出土。



R027・73・RZ10 埋設土器

1. 10YR3/2-3 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、4 より明るい。
2. 10YR3/3 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、VI層土ブロック少量。
3. 10YR3/3 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、VI層土ブロックやや多。
- 4a. 10YR2/2 黒褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、Vh に沿る。
- 4b. 4a に VI層土ブロック少量。
5. 10YR3/3 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや疎、VI層土ブロックやや多。
6. 10YR3/3 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや疎、VI層土ブロックやや多。

- A1. 10YR2/3 シルト、4a に沿るやや明るい、粘性やや有、締まりやや密。
A2. 10YR2/3 シルト、VI層土小ブロック少量、粘性やや有、締まりやや密。

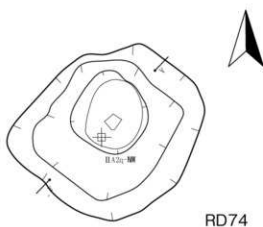
赤新田関係 RZ10>R073>R027

R072

R072 の北西縁の一部を壊して重畳する (西縁と土?) 円形土坑。いったん R072 と底面を共有した後、南東側をさらに一段、長機円形に掘り下している。下部土坑の壁はオーバーハンダシ、底面中央部に径 50×30 cm 程度の丸石が埋められる。墓坑であろう。

R073

R073 の北西縁の一部を壊して重畳する (西縁と土?) 円形土坑。いったん R072 と底面を共有した後、南東側をさらに一段、長機円形に掘り下している。下部土坑の壁はオーバーハンダシ、底面中央部に径 50×30 cm 程度の丸石が埋められる。墓坑であろう。



RD74

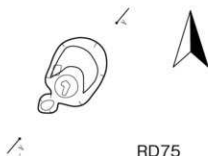


RD74

①、植栽孔。

1. 10V2/3 黒褐色、シルト、3よりやや明るい。
2. 10V2/3 緑褐色、シルト、粘性やや有、締まり密。
3. 10V2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、50mm 厚片ごく微。
- 10V2/3 シルトブロック多（土よりVを2とVを3の混層）。
4. 10V2/3 緑褐色、シルト、粘性やや有、締まり密、VIブロック多（前後層マ）。
5. 10V2/3 緑褐色、シルト、粘性有、締まりやや密、VI上ブロックやや多。
- 4に似る。

※1・2：別F19・3～5（RD74 埋土、注は門間に近いアスロ付、底面重物に繋ぐ。壁は直立～わずかに直線内傾、底面直上にVIブロック入るほかは、黒褐色土塊の埋土、3層は上下下部まで一様、即表土のV₀で一気に埋められたか。



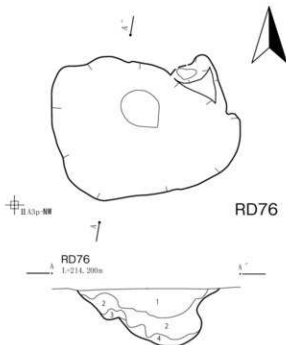
RD75



RD75

1. 10V3/4 暗褐色、シルト、粘性有、締まりやや密。
2. 10V2/3 緑褐色、シルト、粘性有、締まり密。
3. 10V3/4 暗褐色、シルト、1層のブロック層、粘性有、締まり密。
4. 10V3/4 暗褐色、シルト、VI層土ブロック（西側層）。
5. 10V3/4 暗褐色、シルト、1層に良く似るやや明るい。
6. 10V3/4 暗褐色、シルト、VI層土ブロック層。

※埋土上面から土層片多、底面にも土層片あることから、土とともに埋められたものと見られる。レンズ状構構に見られるが、層界に凹凸あり、人為的と見られる。南部に重複の小ピットとの新垣は不明。



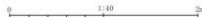
RD76



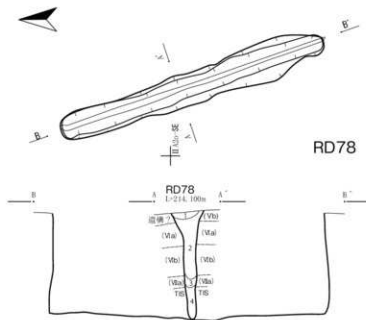
RD76

1. 10V2/3 黒褐色、シルト、粘性有、締まりやや密、VP層片ごく微。
2. 10V3/4 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、VIブロック微、VP層片ごく微、人跡あり。
3. 10V3/4 暗褐色、シルト、粘性やや有、締まり密。
4. 10V3/4 暗褐色、シルト、粘性有、締まりやや密、VIの西側層。

※輪状状況はひょうたん形に近い不整形、本来は円形か、2層にはVI層土ブロック（50～100mm）が自立か、人為埋土の可能性大、底面実測りに500mm程の一辺の正方形の柱石跡のよう・・・、埋土は表土塊片あるかも、要確認、形状は下半部が円形土塊、上半部が上端崩壊のように、崩壊状に広がっている。東壁を上にしたひょうたん形で、東壁がやや急なスロープ状にかけあがっている。他成層部分は土は底面から東壁にかけて点状するが、完全のため掘った土をすべて取り除くと崩壊残らない。人高層壁が知られることから発掘時に掘き残されたかやR66の南東部に重複する。埋土はR66のそれを切っている。連続状柱穴の埋土（真黒い土、V₀層のベース）に良く似ている。発掘時、壁面に部分的、黄褐色土の生成が認められる。2・3層には他土ブロック微量含む。

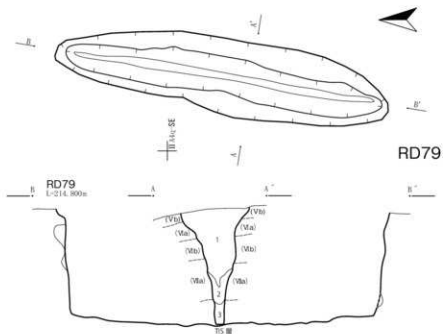


第165図 RD74～76



M79

1. 10181/7/1 黒色、シルト、粘性無、締まり疎、生土スコリア 15～20% (IV層底層)。
2. 10182/1 黒色、シルト、粘性無、締まりやや疎、褐色シルト塊 5～7%、IV層主体。
3. 10185/6 黄褐色、シルト、粘性中、締まりやや密、黒褐色シルト小塊 10～15%、VI層硬質土層。
4. 10182/2-2/3 黒褐色～緑赤褐色、シルト、粘性中、締まり疎、褐色小粒 10%、IV層主体の初期堆土。



M79

1. 10183/2 黒褐色、シルト、粘性無、締まり疎、褐色シルト塊 5～7%、生土スコリア 5～7%、III～IV層主体。
2. 10185/6 黄褐色、シルト、粘性中～やや中、締まりやや疎、VI層を主体とする初期堆土層。
3. 10183/4 黄褐色、シルト、粘性無、締まり疎、黒褐色シルト塊 15%、褐色シルト塊 20%、IV層を主体とする初期堆積土。

0 1:40 2m

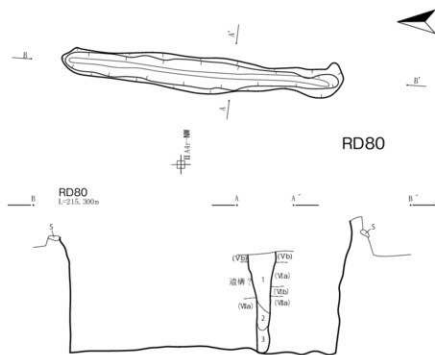


図80

1. 10YR2/2 黒褐色、シルト、粘性無、締まりやや中硬、褐色シルト小塊3～5%、生虫スコリア?～10%。
2. 10YR5/6 黄褐色、シルト、粘性やや弱、締まり中硬、X層を主体とする硬軟部土層。
3. 10YR2/3 黒褐色、シルト、粘性無、締まり中硬、X層を主体とする粘軟部土層。

0 1.00 2m

(4) 炉跡・焼土遺構 (第3表、第168～183図、写真図版126～137)

検出された焼土遺構の多くは、本来、住居跡等に付属するものと考えられるが、ここでは帰属先不明の焼土遺構、計47基をまとめて報告する。第3表にはこれらの位置・規模・出土遺物等をまとめて示した。

これらのうち、縄文時代後期初頭の可能性が高いと考えられるものを抽出してみたい。時期推定の根拠として、①該期土器を燃焼面またはそれと同面の隣接地点に伴うもの、②V a層上面において検出されたもの、③該期住居に付属する炉として石囲部を持つ(可能性が高い)ものを対象とする。

この結果、47基中33基がこの条件に該当した(RF01～04・06・10～12・14～25・28・30～34・37・38・40～43・45)。これらは、北半部ではI A 25 q 付近・I A 25 n 付近・II A 2 m 付近・II A 2 u 付近、II A 3 r 等に、南半部ではII A 6 l・II A 9 j・II A 10 m 付近・II A 9 o 付近に分布している。このように縄文時代後期初頭を中心とした時期に位置づけられる炉跡は、調査区中央部(II A 2 p グリッド付近)を取り囲むように概ね環状に分布する該期の他遺構と、同様の分布傾向を示すことが看取される。

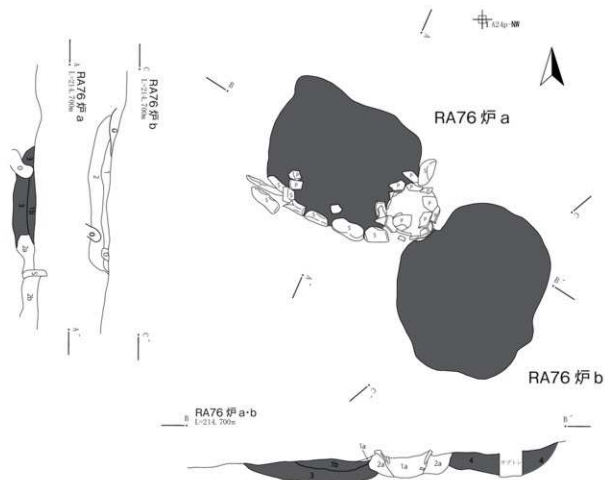
なお、炉跡に伴う土器は、第228図・写真図版175に掲載した。

※第168図上段に掲載の「RA76印a・炉b」は、平成21年度調査で検出され、当初帰属先不明の炉跡として取り扱っていたが、平成23年度調査の結果、RA76に伴うことが判明したものである。編集の都合により、他の帰属不明炉跡とともに図示することをご容赦いただきたい。

2 遺構

第3表 RF炉跡(焼土)一覧

遺構名	旧名	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	焼土厚 (cm)	出土遺物	発掘 初期	石函	所見
EA769a	SN01	I A24a	86	67	6				
EA769b	SN02	I A24p	93	83	8				
RF01	SN03	I A24n	84	57	8		△	○	
RF02	SN04	I A24l	65	56	12		△	○	
RF03	SN05	I A25e	82	76	10		△	○	
RF04	SN06	II A2m	62	59	7	土器(439)・磁器器類(2661)	○	○	
RF05	SN11	II A3	63	55	7				
RF06	SN13	II A8m	60	49	8		○	○	RA149に類似(大形罐)
RF07	SN14	II A10k	65	55	7				
RF08	SN15	II A10i	118	45	10				
RF09	SN16	I A24l	60	39	4				
RF10	SN17	I A25e	74	61	11		△	○	
RF11	SN22	II A6i	82	75	12		○	○	
RF12	SN23	II A9	97	63	12			△	
RF13	SN24	II A9b	62	53	9				
RF14	SN25	II A2h	76	64	11	土器(461)・石鏡(1583)	○	○	
RF15	SN26	II A2b	56	55	8			○	
RF16	SN27	II A2v	75	72	8			△	△
RF17	SN28	II A2h	117	100	5	土器(462)・石鏡(2267)	○	○	
RF18	SN29	II A3a	89	68	15			○	
RF19	SN33	II A10l	82	72	12	土器(463)	○		
RF20	SN34	II A10m	75	38	14	土器(464)	○	△	
RF21	SN35	II A11m	51	50	8	土器(465)	○	○	
RF22	SN36	II A10m	64	59	7	土器(466)		△	
RF23	SN37	II A9a	92	76	14			△	○
RF24	SN38	II A9a	60	50	9			△	△
RF25	SN39	II A10m	96	65	24	土器(467~469)		△	
RF26	SN41	II A10l	53	48	11	石鏡(1584)・石靶(2030)			
RF27	SN42	II A10a	73	67	10	土器(470)・鹿状石器(2120)			
RF28	SN43	II A9l	57	52	6			△	△
RF29	SN44	II A9m	55	20	12	石鏡(1907)・磁器器類(2560)			
RF30	SN45	II A9a	78	59	14			△	○
RF31	SN46	II A8p	70	65	13			△	○
RF32	SN55	II A5r	54	47	7			△	△
RF33	SN59	I A25q	65	46	6			△	△
RF34	SN60	I A25q	50	40	5			△	○
RF35	SN62	II A2p	63	44	不明				
RF36	SN63	II A3p	71	57	7				
RF37	SN64	II A3r	42	40	11			△	○
RF38	SN66	II A4a	55	52	7			△	△
RF39	SN67	II A1p	75	57	10				
RF40	SN68	II A6p	50	46	6			△	△
RF41	SN69	II A7a	31	30	5				
RF42	SN70	II A3m	72	50	7			△	△
RF43	SN71	II A3a	29	15	10			△	
RF44	SN72	II A7a	40	32	9				
RF45	SN73	II A4a	43	34	7			△	△
RF46	SN74	II A5p	94	45	7	石鏡(1585)			
RF47	SN75	II A5q	46	31	6				



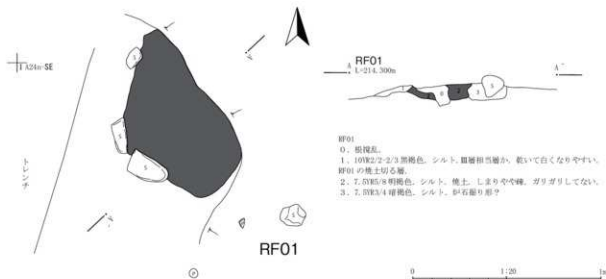
RA76 炉 a・b (A-A・B-B)

0. 掘残瓦。
 1a. 7.03K3/4 褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや密、焼土粒 (φ5mm) 極微量。
 1b. 7.03K5/6 明赤褐色。シルト、焼土、粘性やや有り、しまりやや密。
 2a. 7.03K3/4 暗褐色。シルト、粘性やや有り、しまりやや密、焼土粒 (φ5mm) 極微量。
 2b. 10YR3/4 暗褐色。シルト。
 3. 03K5/6-4/8 明赤褐色。赤褐色。シルト、強変焼土。上面が焼地層か。
 4. R07 がト焼土。

炉石遺跡、東端に土器埋設、竈の残存は南辺のみ。土器埋設部範囲が重複する R07 が a の焼土を切っている。

RA76 炉 b (C-C)

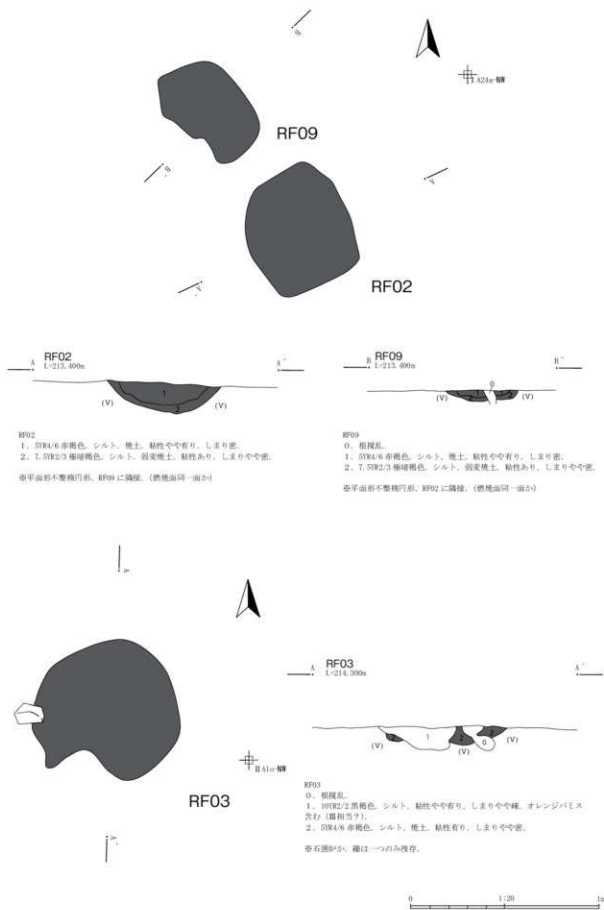
0. 掘残瓦。
 1. 03K5/6 明赤褐色。シルト、ガリガリの焼土とヒビがあってブロック状。上面が焼地層か？
 2. 03K5/6-4/8 明赤褐色。赤褐色。シルト、焼土、粘性やや有り、しまり密。



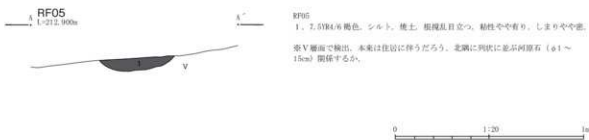
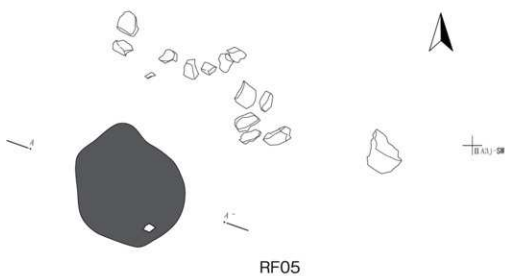
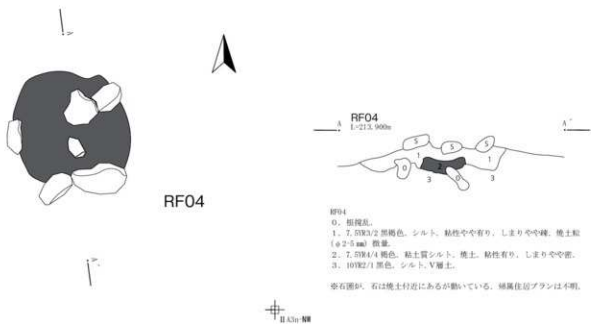
RF01

0. 掘残瓦。
 1. 10YR2/2-2/3 暗褐色。シルト、黒曜石当量か、若い白くなりやや多い。RF01 の焼土切る層。
 2. 7.03K5/6 明褐色。シルト、焼土、しまりやや密、ガリガリしてない。
 3. 7.03K3/4 暗褐色。シルト、伊石取り形？

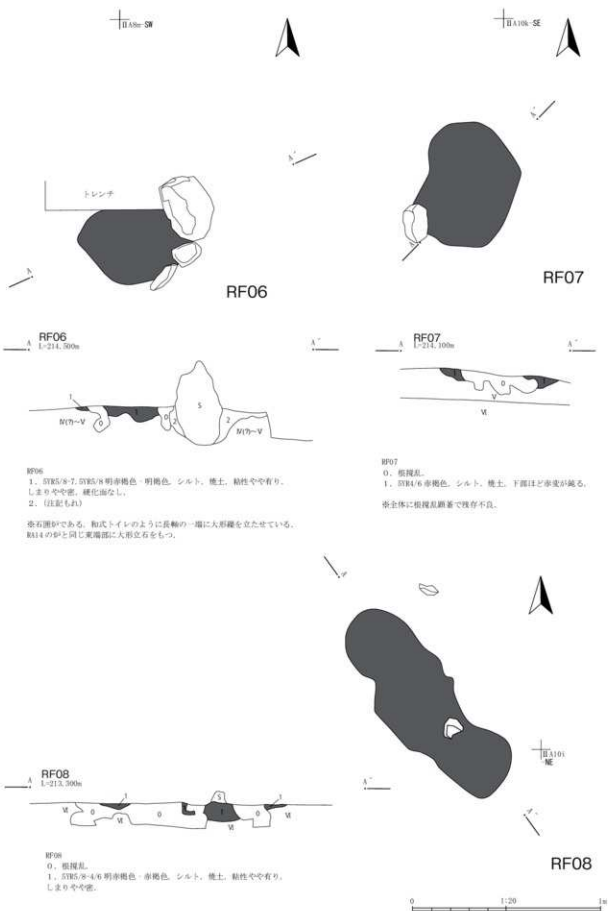
第168図 RA76炉・RF01



第169図 RF02・03・09

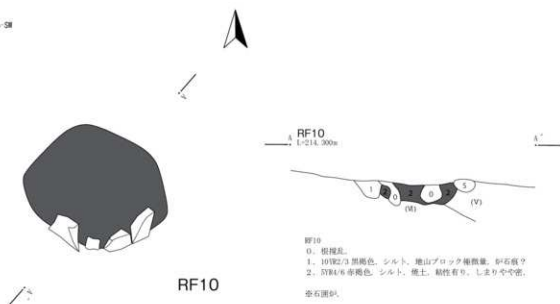


2 遺構

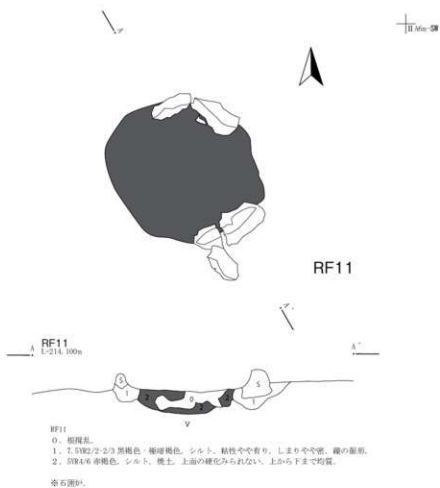


第171図 RF06～08

T14250-08



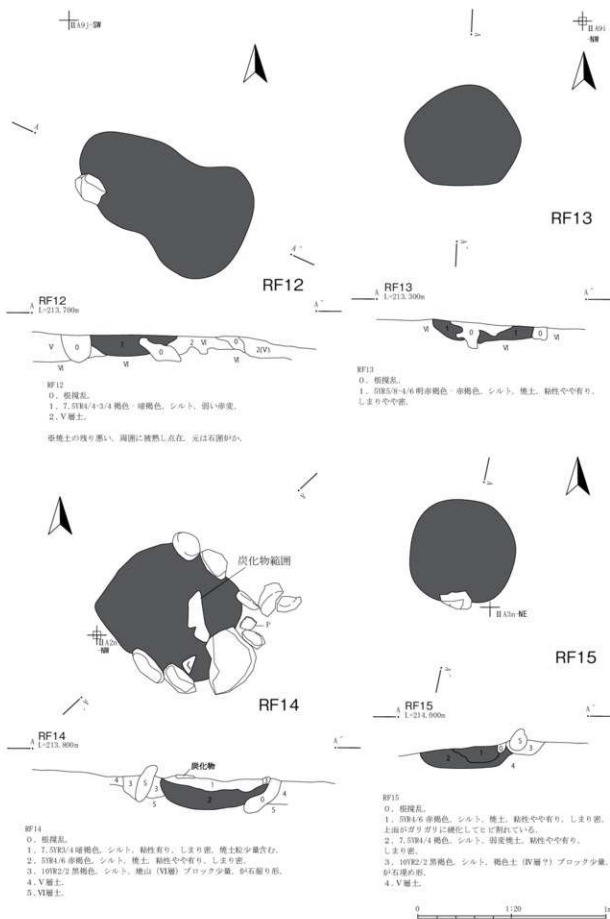
RF10



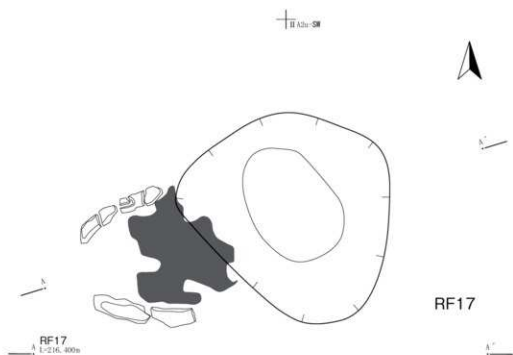
RF11

0 1:20 3m

2 遺構

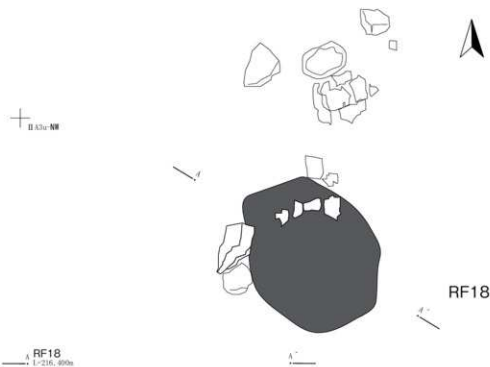


第173図 RF12～15



RF17

1. 10YR3/1 黒褐色。しまり有り、農道の土と同じ。
2. 10YR3/2 黒褐色。
3. 7.5YR4/3-6/4 褐色。に深い褐色。焼土卓餅。
4. 10YR3/2 黒褐色。炭化物微量。
5. 10YR2/1 黒色。全体に炭化物散在。大きな材料も含む。縦らから。
6. 10YR5/3 に近い黄褐色。堆積土上の円柱状山尻。

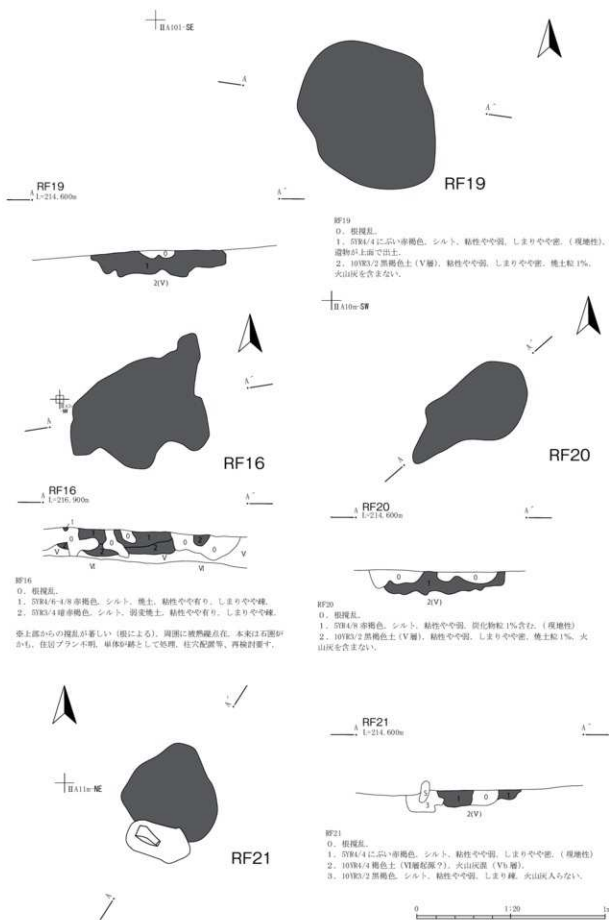


RF18

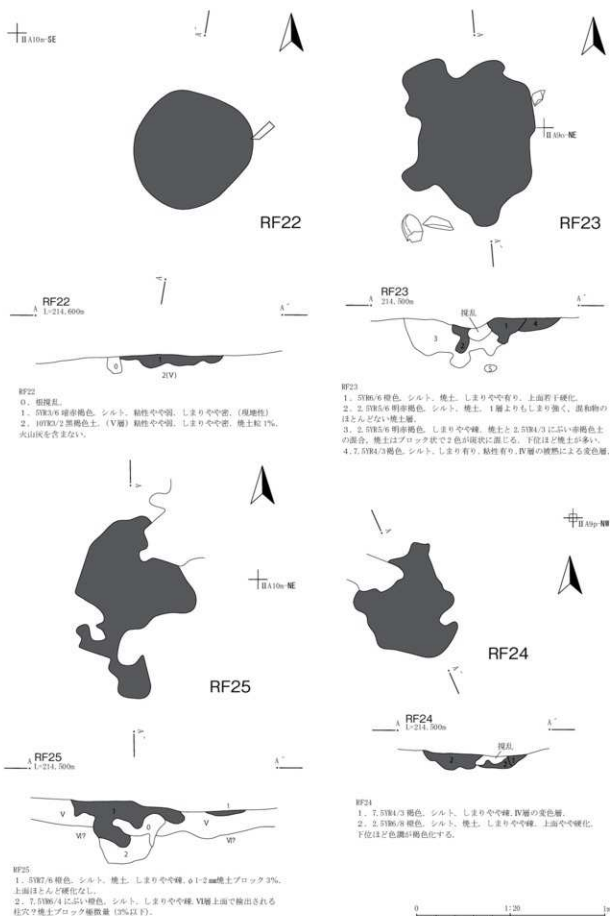
0. 掘残土。
1. 5YR4/6-4/8 赤褐色。シルト、焼土。縦性や中有り。しまりや中密。

0 1/20 3m

第174図 RF17・18

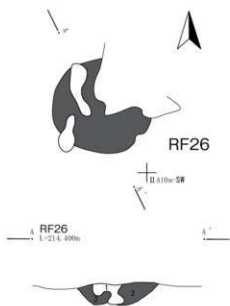


第175図 RF16・19～21

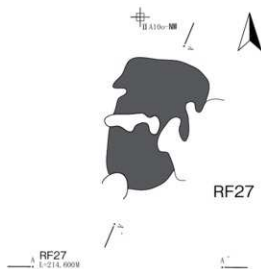


第176図 RF22～25

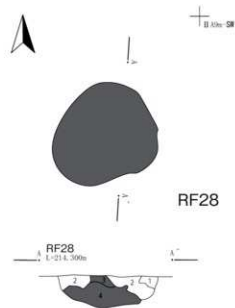
2 遺構



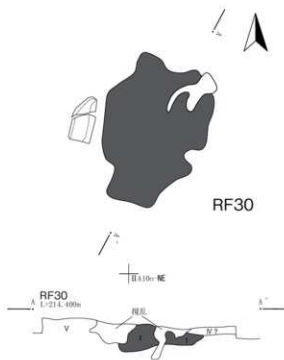
RF26
1. 2. SV85青灰褐色、シルト、しまりやや礫、オレンジパミス3%含む。地土編年の中にあるが地上ではない（埋没）。
2. 3. SV86/4に深い褐色、シルト、粘土、しまりやや礫、燃焼面より下位の赤色変色層。



RF27
0. 板瓦片。
1. SV86(幸6/4)褐色に深い褐色、シルト、粘土、しまりやや礫。



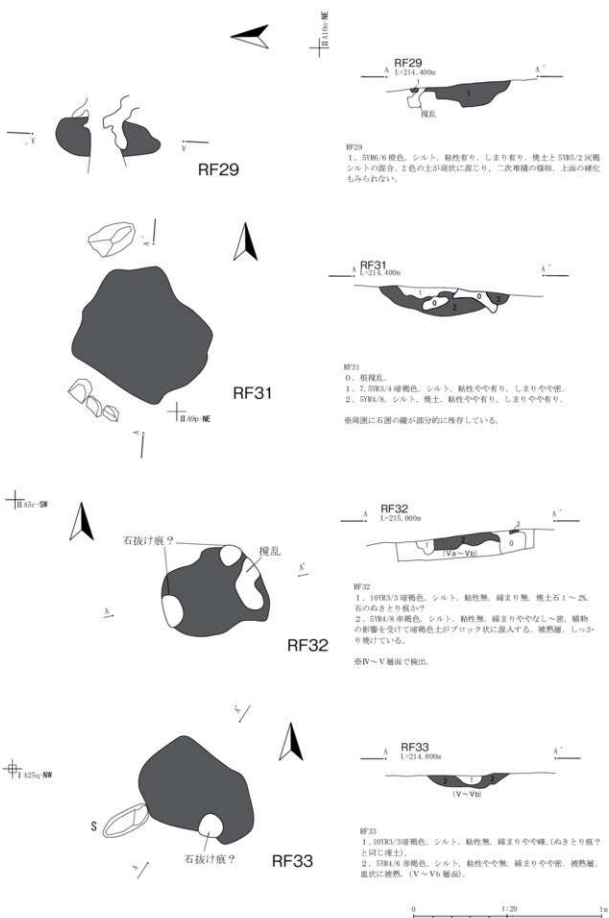
RF28
1. SV84/2灰褐色、シルト、しまり有り、地土の極小粒(φ1mm程度)を含むためやや赤みがある。
2. SV86/2灰褐色、シルト、粘性有り、しまり有り、1層より地土粒の割合が多い(40%)ためより赤く見える。
3. SV87/6褐色、シルト、粘土、しまりやや礫、地土の上位層であるが上面の硬化はみられない。
4. 2. SV86/6褐色、シルト、粘土、3層よりしまりのある燃焼面本体、遺物も無く均質。
※3・4層が地土の燃焼面に関する土層。



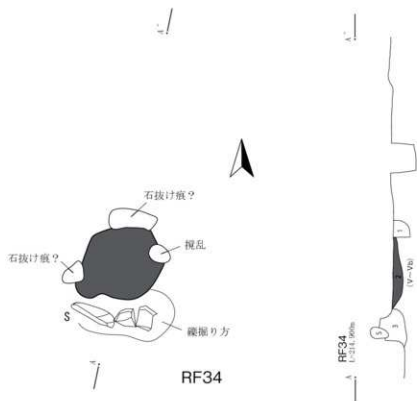
RF30
1. 2. SV85/8明赤褐色、シルト、粘土、粘性弱、しまりやや有り、上面は若干硬いが全体的にサラサラ。下位及び南側ほど色調が褐色に近くなる。

0 1:20 1m

第177図 RF26～28・30

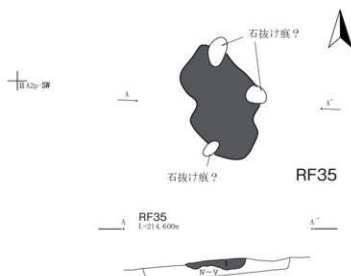


第178図 RF29・31～33



RF34
 1. 5.0302の緑褐色シルト、粘性無、締まりやや密（粘土より硬7%）
 2. 5.0304の赤褐色シルト、粘性やや密、締まりや中、被熱層、風乾に乾燥（V～VI層面）
 3. 5.0302の黒褐色シルト、粘性やや密、締まりや中、粘性層が1～2%、砂色層が1～2%、砂の層が厚く、

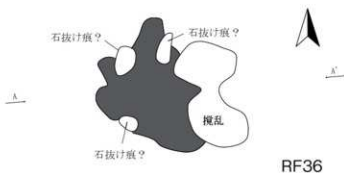
11025r 5M



RF35 検出面 IV～V層面上部

1. 10YR5/6 黄褐色シルト、粘性無、締まりやや密 洗製石 2～3%・粘土 1%混入、被熱層ではない。
 西側には1×3mm程度の炭化物が20cm四方に散在している。配石周辺の黄褐色シルトに埋没する。

0 1:20 2m



RF36



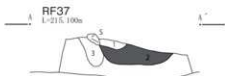
RF36 検出面：IV～V層面上部

1. 5YR4.8赤褐色シルト、粘性無、締まりやや密、焼熟層。上面には燧石の焼土粒10～15%と土器小片含む。断面図には反映されないが、小形土器のプランが3ヶ所あり。石の抜き取り痕の可能性ある。西側はやや黄色みが強い（土色絵では色がみられないが）。

※断面に炭化物粒（1×3mm）が散在している。



RF37

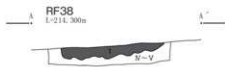


RF37

1. 7.5YR4.4褐色、シルト、粘性無、締まり中。
2. 5YR4.8赤褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、焼熟層。（V層焼熟）
3. 7.5YR3.3緑褐色、シルト、粘性無、締まり稀。石の南方埋土。



RF38



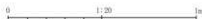
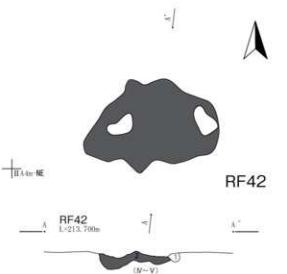
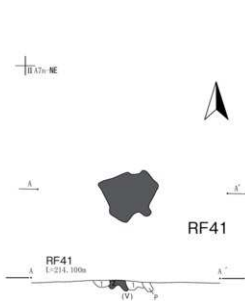
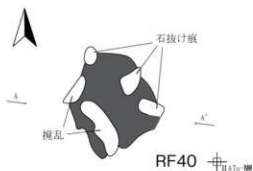
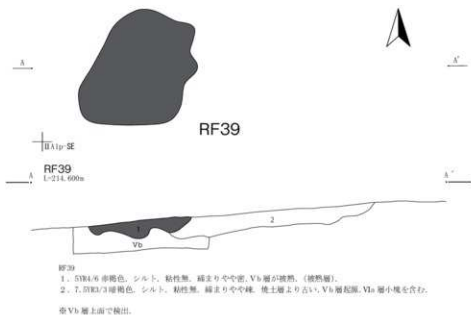
RF38 検出面：IV～V層面上部

1. 5YR4.8赤褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、焼熟層。上面に燧石の焼土粒3～5%含む。断面図には反映されないが、焼土燧石縁辺に石抜き痕の可能性ある小楕円プランもつ。

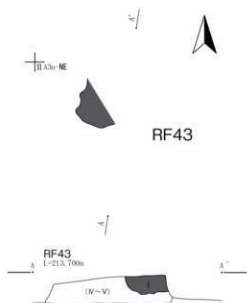


第180図 RF36～38

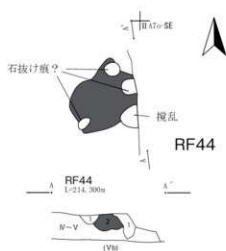
2 遺構



第181図 RF39~42

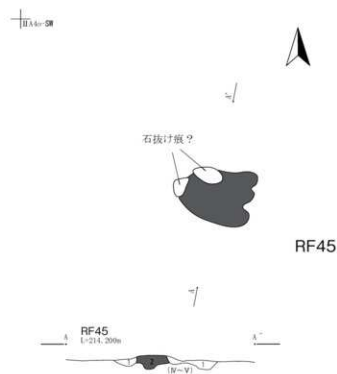


RF43 検出面・IV～V層上面
 1. 3YR2.5/4 暗赤褐色～暗赤褐色、シルト、粘性無、締まり中、微熟層
 (炭素粒石1%混入)。



RF44
 1. 10YR2/1 黒色、シルト、粘性無、締まり無、焼土石1～2%混入、石の抜き取り痕あり。
 2. 3YR3/3 暗赤褐色、シルト、粘性無、締まりやや硬、面的に微熟しているが、黄褐色土塊7%の混入が見られ、微熟焼土の可能性が高い。モゾモゾしている。

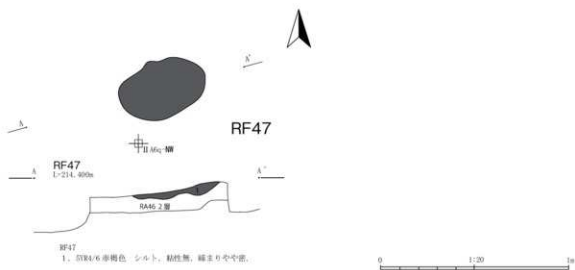
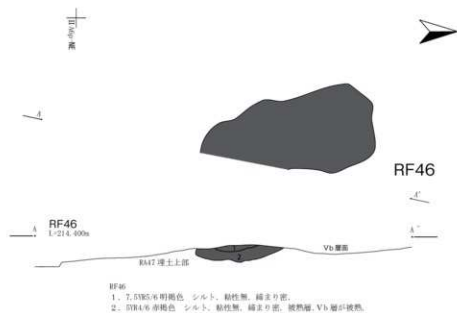
※IV～V層で検出。



RF45
 1. 10YR3/4 暗褐色、シルト、粘性無、締まりやや密、配石の粗方厚土、黒褐色土小塊 2%。
 2. 3YR4/6 赤褐色、シルト、粘性やや弱、締まり中、微熟層。



2 遺構



(5) 土器埋設遺構

R Z01土器埋設遺構 (第184図、写真図版138)

〔位置・検出状況〕中央西部、II A 1 n グリッドに位置する。V a 層上面において深鉢形土器の一部を検出し精査に着手した。

〔規模・形状〕深鉢形土器をほぼ正位に埋設した遺構である。皿状の掘り込みの底面に口縁部が表れるよう、胴上部～底部が埋められている。本来は完形個体であったと思われるが、口縁部付近が潰れ土器の内外に破片が沈み込んだ状態となっていた。底部の穿孔・打ち欠きはない。口縁部周囲の掘り込みの径は75cm程と推定される。土器の上端から掘り込み底面までの深さは38cmである。

〔埋土と堆積状況〕埋設土器の掘方にはV a 層土とVI層土のブロックからなる土(2層)が埋め戻され、土器の下半部が固定されている。浅い掘り込みの底面に埋め込まれた状態となった土器の内部には、流入土とみられるIV～V a 層主体の黒褐色土(1層)の堆積が進み、さらにそのまま口縁部周囲の掘り込みも連続して埋めている。土器内の埋土下部に口縁部破片の出土も認められることから、埋設後の土器内部は埋められることなく、空間を維持した状態であったと推測される。なお、土器内埋土には灰のような白色粒子が斑状に点在していた。骨片等の可能性を視野に土壌分析を実施したが、岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるとの結果を得ている(→附編1(3)、試料No.1)。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器(482)〈第229図、写真図版176〉。

石鏃(2084)。

R Z02土器埋設遺構 (第184図、写真図版138)

〔位置・検出状況〕北西部、I A 23 k グリッドに位置する。V a 層中において深鉢形土器の一部を検出し精査に着手した。

〔規模・形状〕椀形の掘り込みに深鉢形土器をほぼ正位に埋設した遺構である。土器はほぼ完形に近いが、口縁部付近を水平に削りとりられており本来の姿は不明である。底部の穿孔・打ち欠きはない。掘り込みの上端径は75cmほどと推定される。土器の上端から掘り込み底面までの深さは45cmである。

〔埋土と堆積状況〕掘り込みの下部にはV a 層土及びVI層土のブロックからなる土(3層)が埋め戻され、土器の下半部が固定されている。土器の内部にはV a 層主体の黒褐色土(1 a・1 b層)が堆積し、土器上半部の外側にもこれに良く類似する黒褐色土(2層)が連続して堆積していることから、埋設後の土器内部は埋められることなく、空間を維持された状態であったと推測される。なお、土器内埋土の下部には灰のような白色粒子が斑状に点在していた。骨片等の可能性を視野に土壌分析を実施したが、岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるとの結果を得ている(→附編1(3)、試料No.2)。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代中期末葉の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器(483)〈第229図、写真図版176〉。

R Z03土器埋設遺構（第184図、写真図版139）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 7 i グリッドに位置する。RA12大形堅穴住居が埋設する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12の埋土のうちIV層相当の堆積層下面から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。

〔規模・形状〕 搦鉢状の掘り込みに深鉢形土器を正位に埋設した遺構である。土器はほぼ完形である。底部の穿孔・打ち欠きはない。掘り込みの上端径は60cm前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは42cmである。

〔埋土と堆積状況〕 RA12の床面直上に堆積している黒色土層（7層）の上面から掘り込まれた搦鉢状の掘方に深鉢形土器が正位に据えられたのち、土器の周囲には掘り上げた黒色土と地山VI層土のブロックからなる土（6層）が埋め戻され、土器の下半部が固定されている。その後、土器の内部にはV a層主体の黒褐色土にVI層土を含むやや明るい土（4層）が堆積し、土器上半部の外側にもこれに良く類似する土（5層）が連続して堆積していることから、埋設後の土器内部は埋められることなく空間を維持された状態にあり、その後土器内部と口縁部外周が同時的に埋設したものと推測できる。掘り込みが埋設した後は、RA12の壁際から流入したIV層相当層（3層）に厚く覆われ、その上位も順次Ⅲ層相当層（1層）に覆われていった過程が理解できた。なお、本遺構の東側には近接して2点の大形礫が出土している。いずれも径50cm前後の花崗岩で、本遺構の掘り込み面である7層（V層相当）上面に据え置かれたようだ。いずれも火を受け表面に赤変が認められる。またこれらの大形礫に添えられたかのように、径8cmほどの球状礫も出土した。これらの礫と本遺構との関連性については明らかでない。

〔重複遺構〕 RA12埋土最下部（V層相当）を切り、埋土中部以上（IV・Ⅲ層相当）に被覆される。

〔遺構の時期〕 埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（484）（第230図、写真図版177）。

R Z04土器埋設遺構（第185図、写真図版139・140）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 6 i グリッドに位置する。RA12大形堅穴住居が埋設する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12の埋土のうちIV層相当の堆積層下面から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。

〔規模・形状〕 搦鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。南側（RA12の内側）にわずかに傾くが、レンズ状堆積による凹地の内部上面（掘り込み面）の傾斜に口縁をあわせて埋設した結果のようにも思われる。土器は完形に近いが底面部分を丸々失っている。掘り込みの上端径は55cm前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは46cmである。

〔埋土と堆積状況〕 RA12大形堅穴住居跡の内部は壁際からの土壌の流入によってレンズ状の堆積が進み、本遺構が設置された時点においては、中央部が低く壁際が高い皿状の凹地となっていたと考えられる。本遺構はRA12の北西壁際付近に位置しており、本遺構の掘り込み面からRA12の床面までには約30cmの土壌の堆積があった。IV層相当層の下面から掘り込まれた搦鉢状の掘方には深鉢形土器が据えられ、その後、土器の周囲には掘り上げたRA12埋土（2層）が埋め戻されている。その後、土器の内部にはV a層主体とみられる黒褐色土が（1層）が堆積している。堆積の様相から流入土と見られ、埋設後の土器内部は埋められることなく空間を維持された状態にあったものと推測される。土器内が流入土壌で満たされた後は、RA12の凹地内はIV層相当土によって広く覆われたものとみられ

る。なお、埋設土器の内部からは径8cmの楕円形礫1点が出土している。底面から10cm弱のところであり、礫が置かれた面より下位の埋土には斑状に点在する灰のような白色粒子が認められた。骨片等の可能性を視野に土壌分析を実施したが、岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるとの結果を得ている(→附編1(3)、試料No.3)。

〔重複遺構〕RA12埋土下部を切り、埋土中部以上(IV層相当)に被覆される。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器(485)〈第230図、写真図版177〉。

自然礫(2815)。

R Z05土器埋設遺構(第185図、写真図版139・140)

〔位置・検出状況〕南西部、II A 6 i グリッドに位置する。RA12大形竪穴住居が埋設する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12壁際の埋土中から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。

〔規模・形状〕掘鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。南側(RA12の内側)に傾いているが、レンズ状堆積による凹地の内部上面(掘り込み面)の傾斜に口縁をあわせて埋設した結果のようにも思われる。土器は口縁と底部の一部を欠損している。口縁の欠損は後世の削平、底部については打ち欠きの痕跡等が認められないことから取り上げの際に見落としの可能性があり、本来はほぼ完形に近かったと考えられる。掘り込みの上端径は65cm前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは35cmである。

〔埋土と堆積状況〕RA12大形竪穴住居跡の内部は壁際からの土壌流入によってレンズ状の堆積が進み、本遺構が設置された時点においては、中央部が低く壁際が高い皿状の凹地となっていたと考えられる。本遺構の位置するRA12の北西壁際はすでに厚い堆積層に覆われており、本遺構の掘り込み面はRA12の検出面とほぼ同じ高さとなっている。掘り鉢状の掘方に据えられた深鉢形土器はその周囲をRA12の埋土とみられる黒褐色土(2層)によって埋め戻されている。その後、土器の内部にはVa層主体とみられる黒褐色土(1a層)が堆積している。堆積の様相から流入土と見られ、埋設後の土器内部は埋められることなく空間を維持された状態にあったものと推測される。なお、埋設土器の内部からは径5cmの礫1点が出土している。底面から12cm程のところであり、礫が置かれた面より下位の埋土(1b層)には斑状に点在する灰のような白色粒子が認められた。土壌分析は実施していないが、RZ01・RZ02・RZ04等で検出の同種粒子の分析では岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるという結果が得られている。なお、土器の北側に接するようにして2点の礫(径24cm程)が出土している。意図するところは不明であるが、本遺構に添え置かれたものと考えられる。

〔重複遺構〕RA12の壁上端と埋土の一部を切っている。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器(486)〈第230図、写真図版177〉。

円盤状土製品(1267)。

R Z06土器埋設遺構(第185図、写真図版139・140)

〔位置・検出状況〕南西部、II A 6 i グリッドに位置する。RA12大形竪穴住居が埋設する過程におい

で、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12の埋土中から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。

〔規模・形状〕 播鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。土器は胴下部のみが残存し、破片が内側に落ち込んだような状態で出土した。本来は完形に近かった可能性もあるが定かではない。残存する掘り込みの上端径は38cm、土器の上端から掘り込み底面までの深さは28cmである。

〔埋土と堆積状況〕 RZ04・RZ05と同様、RA12大形竈穴住居跡の埋設過程に生じた凹地内に土器を埋設したものである。本遺構の位置を考慮すれば、掘り込み面はRZ04と同程度の高さにあったものと推測されるが、RA12の精査時に検出されたものであり、上部の状態は確認できなかった。掘方に据えられた深鉢形土器はその周囲をRA12の埋土とみられる黒褐色土（2層）によって埋め戻されており、その後、土器の内部には流入土と思われる黒褐色土（1層：Ⅳ～Ⅴa層相当）が堆積している。上部の破片が内部に落ち込んでいることも考慮すれば、埋設後の土器内部は埋められることなく空間が維持された状態にあったものと推測される。

〔重複遺構〕 RA12の床面及び埋土の最下部を切っている。

〔遺構の時期〕 埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（487）〈第230図、写真図版177〉。

RZ07土器埋設遺構（第186図、写真図版140）

〔位置・検出状況〕 南西部、II A 7 h グリッドに位置する。RA12大形竈穴住居が埋設する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12に付属する複式炉の埋土上部から深鉢形土器の一部が現れたことから、埋設土器の可能性があると認識し精査に着手した。

〔規模・形状〕 播鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。土器はほぼ完形で、正位に据えられている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘り込みの上端径は50cm前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは26cmである。

〔埋土と堆積状況〕 RA12大形竈穴住居跡に付属する複式炉は、平面規模が3.5×2.1m、住居床面からの最大深度が62cmと極めて大きなものである。RA12の廃絶後、床面に開口する炉内には土埃等の堆積物が真っ先に流入したものとみられる。本遺構は、この複式炉内が流入土等により住居床面レベル付近まで埋没した時点において、この埋土を切って設置されたものとみられる。複式炉の一部を構成する石囲部の南壁上部に重複する地点に位置するが、炉跡が埋没した後の設置であり、土器の埋設行為と炉との直接的な因果関係はないと考えられる。ただし、埋没が完了する前、内部が凹地状を落ち込みとなっていた段階の行為だとすれば、凹地の「落ち際」を選んで設置したものと捉えることもでき、RA12内で検出されている他の埋設土器に共通する特徴といえる。掘方に正位に据えられた土器の周囲は、Ⅴa層類似の黒褐色土とⅥ層土のブロック（2層）によって埋め戻されている。特記すべきは、土器の内部に黄褐色粘土が充填されていたことである。底部から口縁に至るまで、団子状の小塊が密に詰められていた。小塊ごとに酸化・白色化の度合いが異なるため両者が斑状に混在し、空隙にはわずかに黒色土の浸透も認められるが、粘土塊そのものに不純物の混入はない。粘土の充填と土器の埋設行為の先後関係については不明とせざるを得ない。

〔重複遺構〕 RA12の炉跡の壁上端と埋土の一部を切っている。

〔遺構の時期〕 埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器 (488) (第231図、写真図版178)。

※土器本体は完形の状態では埋設されていたが、器壁が薄く脆弱であったため、取り上げ時に分解した後、接合不能となった破片が生じた。復元できた一部のみを掲載している。

R Z08土器埋設遺構 (第186図、写真図版141)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 8 p グリッドに位置する。V b～VI層上面において、暗褐色土の円形範囲とその西縁に露出した深鉢形土器の一部として検出された。

〔規模・形状〕土坑状の掘り込みに深鉢形土器を掘え下部を埋めた遺構である。土器は掘り込みの西壁に寄せて置かれている。口縁部を欠損しており、破片が内側に落ち込んだような状態で出土した。本来は完形に近かった可能性もあるが定かではない。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘り込みの上端径は65cm、深さは22cm、土器の上端から掘り込み底面までの深さは34cmである。

〔埋土と堆積状況〕土坑状の掘り込みには地山ブロックを多く含む土が埋め戻され、西壁に寄せられた土器が固定されている。土器は胴上部から上を削平されているが、土器内部に口縁部破片が落ち込んでいることから、本来は完形であった可能性があり、また、土器内部は埋められることなく一定期間、空間が維持された状態にあったものと推測される。その後、土器の内部にも堆積がすすみ、埋土上部にはVI層土類似の黄褐色土が堆積するなど、人為的な埋め戻しを示唆する状況も認められる。土器東側上部から掘り込みの上部にかけては、流入土と見られる黒褐色土が連続して堆積している。最終段階には土器の上部を一部破壊しながら自然堆積が進み、埋没を終えたものとみられる。なお、土器内の最上部から凹石1点が出土している。埋設土器に伴う礫の可能性も否定できないが、層位的には土器の埋没後に位置づけられることなど、他例とは異なる点に注意が必要である。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器 (489) (第231図、写真図版178)。

敲磨器類 (2662)。

R Z09土器埋設遺構 (第187図、写真図版141)

〔位置・検出状況〕北東部、I A 25 r グリッドに位置する。V a～V b層上面において深鉢形土器の一部を検出し精査に着手した。

〔規模・形状〕土器より一回り大きな円筒形の掘方に、深鉢形土器をほぼ正位に埋設した遺構である。本来は完形個体であった可能性があるが、口縁部付近が削平されている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘方の径は38cm、土器の上端から掘り込み底面までの深さは32cmである。

〔埋土と堆積状況〕埋設土器の掘方にはV a層土とVI層土のブロックからなる土(4層)が埋め戻され、土器の周囲が固定されている。その後、土器の内部にも堆積がすすみ、埋土上部にはVI層土類似の黄褐色土が堆積するなど、人為的な埋め戻しを示唆する状況も認められる。黄褐色土の堆積はRZ08に共通している。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器 (490) (第231図、写真図版178)。

R Z 10 土器埋設遺構 (第187図、写真図版141・142)

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 r グリッドに位置する。V b 層上面において概ね円形を呈する明瞭な黒色土範囲として検出。土坑と判断し精査を進めたところ、底面から環状に露出した土器口縁が確認されたことから、埋設土器と判断した。

〔規模・形状〕土坑状の掘り込みの底面に深鉢形土器(491)を埋設した遺構である。土器は掘り込み内のやや北寄りに設置されている。ほぼ完形で、口縁部が掘り込み底面から10cm近く突出するよう正位に据えられている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘り込みの開口部径は約130cm、深さは22cm、土器口縁から掘方底面までの深さは45cmである。

〔埋土と堆積状況〕掘方には地山ブロックを多く含む土が埋め戻され、土器の固定がなされている。土器の内部にはV a 層相当の黒褐色土が堆積し、下部にはわずかにVI層の小ブロックがみられるが、ほぼ一様の様相を呈する。自然堆積が否かについては判然としな。土器内は土坑状の掘り込みの底面と同レベルまで埋まった後、最後は土坑状の掘り込みとともに口縁部付近が埋没している。

なお、土器内の最上層から径10cm弱の礫と石鏝が出土している。埋設土器に伴う礫の可能性も否定できないが、層位的には土器の埋設後に位置づけられることなど、他例とは異なる点に注意が必要である。また、土坑状掘り込みの北東壁上部から石皿が出土している。

〔重複遺構〕RD73・74を切っている。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭～前葉の遺構と判断される。

〔その他の所見〕土坑状の掘り込みの内部に埋設される点や、口縁部付近に石皿(板状礫)を伴う点、後掲、RZ11に共通の特徴である。本例の場合は下位にRD72・73も存在することから、埋設地点は凹地となっていた可能性が高いと考えられる。

〔出土遺物〕

土器(491・492)(第232図、写真図版179)。

石鏝(1815)。

石皿(2368)。

敲磨器類(2609)。

R Z 11 土器埋設遺構 (第188図、写真図版142)

〔位置・検出状況〕北東部、I A 24 s グリッドに位置する。V b 層上面において、被熱痕跡の認められる板状礫と正位の深鉢が近接して出土したことから、土器埋設遺構の可能性のあるものと判断し、精査に着手した。

〔規模・形状〕土坑状の掘り込みの内部に深鉢形土器(493)を埋設した遺構である。土器は掘り込み内の北東寄りに設置されている。胴部上半は欠き、下半部が正位に据えられている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。上部は部分的に削平を受けている可能性があるが、土器上端と板状礫が近接して同面にあることから、ほぼ原形をとどめているものと推測される。掘り込みの開口部径は約80cm、深さは20cm、土器口縁から掘方底面までの深さは26cmである。

〔埋土と堆積状況〕掘り込みの内部はV b～VI層土を全体に含んで明るみを持つ暗褐色土が堆積している。底面から上部まで一様の埋土である。土器はこの埋土を上方から掘り込んで埋設されている。土器埋設の掘方の底面は、土坑状掘り込みの底面より約8cm深く掘り下げられている。

土器内部には、下半にV a 層土を主体とする黒褐色土(4層)、上半部にはVI層土ブロックの多い土層(3層)が堆積している。この上位の2層は土器の内外に連続していることから、おそらく2層

下面が埋設当時の本遺構上面であったと推測される（土器の先端が若干露出する位置となる）。

なお、埋設土器掘方先端の南西側からは、これに近接して据えられたように板状の礫が出土している。

〔重複遺構〕 RA82を切っている。

〔遺構の時期〕 埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭～前葉の遺構と判断される。

〔その他の所見〕 土坑状の掘り込みの内部に埋設される点や、埋設土器先端付近に板状礫を伴う点は、前掲、RZ10に共通する特徴である。

〔出土遺物〕

土器（493・494）（第232図、写真図版179）。

RZ12土器埋設遺構（RA13関連遺構）（第42・45・47・48図、写真図版143）

〔位置・検出状況〕 中央西部と中央東部の境界（調査区のはぼ中央）、II A 4 n グリッドに位置する。RA13（敷土・配石を伴う住居状遺構）の下部構造精査のため、礫の掘方の断ち割りを行ったところ、礫の下位に埋設された土器が検出された。

〔規模・形状〕 RA13を構成する環状配石列のうち、配石遺構全体の主軸上において最も北に位置する板状礫（S2）の下位に小形の鉢形土器を埋設した遺構である。礫S2の掘方底面のさらに下位に、径25cm、深さ26cmの小穴を設け、その中に小形の鉢形土器を正位に設置している。土器は完形であり、底面への打ち欠き・穿孔等はない。

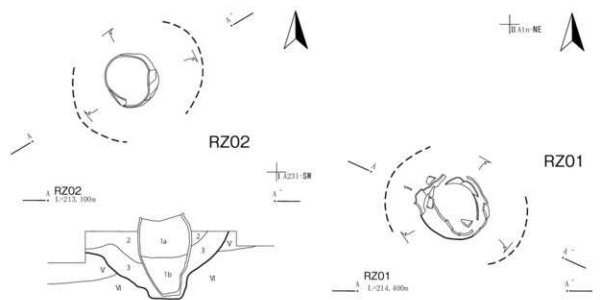
〔埋土と堆積状況〕 断面にも明らかなように、土器の埋設は上位の配石構築に先行して行われている。土器が設置された穴は、径10～15mmの小礫と粗砂によって満たされていた。土器の外部だけでなく内部にも密に充填され、さらにその上も約10cmの厚さで覆っている。他の埋設土器が掘方に土を充填して設置・固定されているのに対し、明らかに様相を異にしている。この砂礫は遺構周辺の堆積層にはないものであり、本遺構へ充填するためわざわざ運ばれたものと考えられる。なお、土器内部からは砂礫以外の出土物はなかった。残存し得なかったと考えるべきであろう。埋設よりも「埋納」された土器と呼ぶ方がふさわしく思われる。この上にRA13の主軸上北端に位置する礫が据えられ、この土器はRA13を構成する要素の一つとなったものと思われる。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。

〔重複遺構〕 RA13の環状配石列の礫配置よりも古い。

〔遺構の時期〕 埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭～前葉の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（495）（第232図、写真図版179）。



RZ02

- 1a. 109K2/2 黒褐色。シルト。2層に似る。
 1b. 109K2/1 黒色。シルト。高状に白色灰状（粘土状）ブロック混入。（サンプル採取）
 2. 109K2/2 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。
 3. 109K2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。地山VI層ブロック少量。

※ほぼ直立（正位）に設置。

RZ01

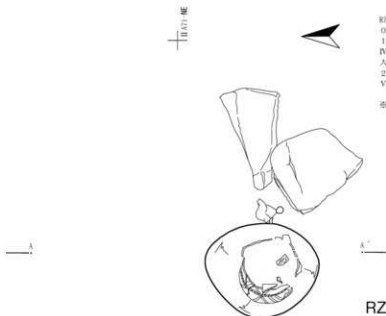
1:214,400m



RZ01

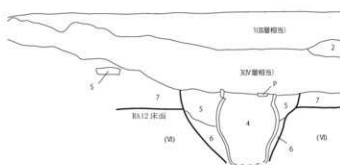
0. 概視図。
 1. 109K2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。IV層土のようなるきがある。褐色粘土（生土スクリヤ）入る。扉層相当層土。
 2. 109K2/1 黒色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。V層土ベース。地山（VI層）ブロック少量。

※土器はわずかに西に傾くがほぼ直立。



RZ03

1:231,300m



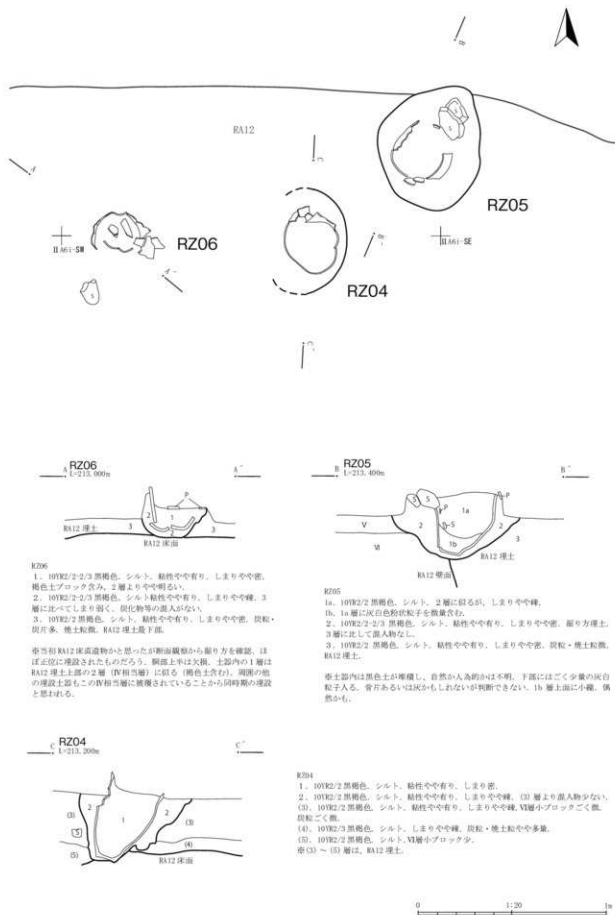
RZ03

RZ03

1. 109K2/1-2/2 黒・黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。褐色粘土（生土スクリヤ）入る。扉層相当層土。
 2. 109K2/1-2/2 黒・黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。3層に似るが褐色ブロックは入らない。
 3. 109K2/2 黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。109K2/3シルトブロック（灰山灰?）多量。IV層相当層土。
 4. 109K2/3/2/2 緑褐色。黒褐色。シルト。粘性有り。しまりやや密。埋没土器内の土（上部の埋土）。VI層土ブロック少量含む。
 5. 7層とVI層土の混土層。量少。VI層土少量。（IV層に良く似る）。
 6. 5層よりVI層土多量。
 7. 109K2/1 黒色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。V層土類似。

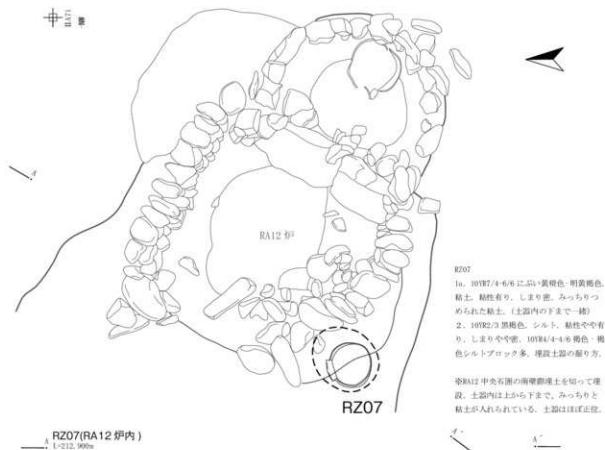
0 1:20 1m

第184図 RZ01～03



第185図 RZ04~06

2 遺構



RZ07

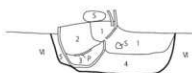
- 1a. 10YR7/4-6/6 に近い黄褐色・明黄褐色。粘土。粘性有り。しまり密。みっちりつめられた粘土。(土器の下まで一層)
2. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。10YR4/4-6 褐色・褐色シルトブロック多。埋戻土器の廻り方。

※RA12 中央右側の南壁跡土を切って埋戻。土器内は上から下まで、みっちりとした粘土が入れている。土器はほぼ正立。



II 3p 28

RZ08
I-214.600m



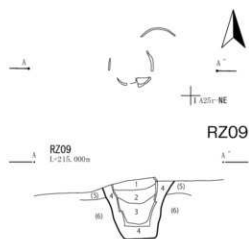
RZ08

1. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまりやや密。堆山 (M土) ブロック散見。炭化粒 ϕ 5 mm 程度。灰状の灰白色ブロックを含む。
2. 10YR2/3 黒褐色。シルト。M層土小ブロック少量。
3. 10YR2/3 黒褐色。シルト。M層土小ブロックごく少量。
4. 10YR2/2-2/3 黄褐色。シルト。堆山 (M層土) ブロック多量。
5. 10YR2/3 黒褐色。シルト。産人物はなく黄色味をもつ。

※黄褐色の円形プランの西縁に埋戻された土器として検出 (M層上面)。円形プランは土坑となりその西壁に接して埋められている。断面では土器埋めた廻り方と土坑埋土との切り合いが見えず断面あるのかかわらない。土器内埋土の上縁に円形線 (圓石だが土器内の断面線として転用可)。

0 1:20 1m

RZ08



RZ09

1. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、

2. 101R4/4 4号 褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、黄色土、

3. 101R3/4 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、2に似た黄色土ブロック少量、

4. 101R3/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、VI層土ブロック多、灰方埋土、

(5). 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、一部遺構埋土から、

(6). VI層、

RZ09

1. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、

2. 101R4/4 4号 褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、黄色土、

3. 101R3/4 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、2に似た黄色土ブロック少量、

4. 101R3/2-2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、VI層土ブロック多、灰方埋土、

(5). 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、一部遺構埋土から、

(6). VI層、

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

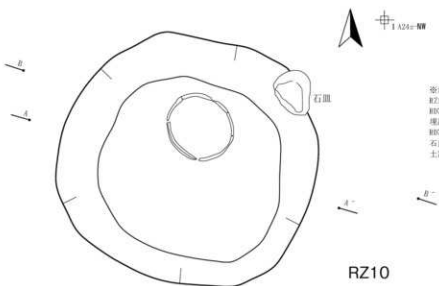
RZ09

RZ09

RZ09

RZ09

※深鉢正立位の埋設土器。土器内埋土は上部にVI層土類似の黄色土が入られている。



RZ10

1. 101R2/1 黒色、シルト、粘性有、締まり密、遺人物少なく

ベタベタと均質な黒色土、目録中

2. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや密、VI

層に属す。

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

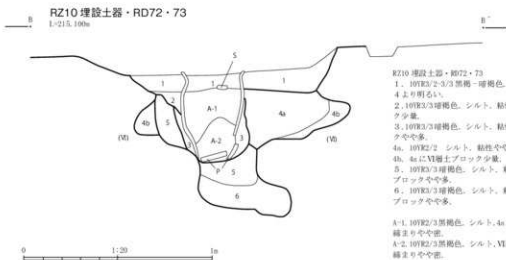
RZ10

RZ10

RZ10

RZ10

RZ10



RZ10埋設土器・RD72・73

1. 101R3/2-3/3 黒褐色、埴縄色、シルト、粘性やや有、締まり密、

4より明るい。

2. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まり密、VI層土ブロッ

ク少量。

3. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まり密、VI層土ブロッ

クやや多。

4a. 101R2/2 シルト、粘性やや有、締まりやや密、Vaに属す。

4b. 4aにVI層土ブロック少量。

5. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、VI層土

ブロックやや多。

6. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、VI層土

ブロックやや多。

RZ10埋設土器・RD72・73

1. 101R3/2-3/3 黒褐色、埴縄色、シルト、粘性やや有、締まり密、

4より明るい。

2. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まり密、VI層土ブロッ

ク少量。

3. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まり密、VI層土ブロッ

クやや多。

4a. 101R2/2 シルト、粘性やや有、締まりやや密、Vaに属す。

4b. 4aにVI層土ブロック少量。

5. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、VI層土

ブロックやや多。

6. 101R3/3 埴縄色、シルト、粘性やや有、締まりやや稀、VI層土

ブロックやや多。

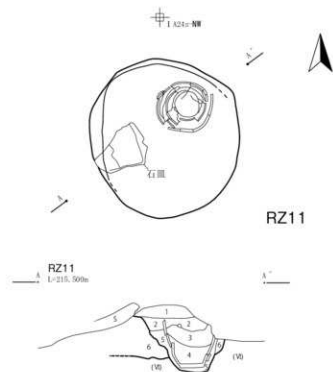
A-1. 101R2/3 黒褐色、シルト、4aに似るがやや明るい、粘性やや有、

締まりやや密。

A-2. 101R2/3 黒褐色、シルト、VI層土小ブロック微量、粘性やや有、

締まりやや密。

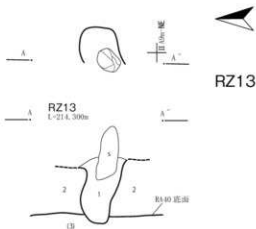
0 1:20 3m



RZ11 埋設土器

1. 10YR3/2-3 黒褐色。シルト。肌理乱多く乾きやすい。上方から1・2層土が部分的に混入。粘性弱。締まり弱。
2. 10YR3/2 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや弱。
3. 10YR3/2 黒褐色。シルト。炭化物径5～10mm程度。VI層土プロット少量。粘性やや弱。締まり弱。
4. 10YR3/2 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まり弱。
5. 10YR3/2 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まり弱。崩り方理土。
6. 10YR3/4 暗褐色。シルト。炭化物径5～10mm程度。粘性やや弱。締まり弱。(土坑状)

※土坑状掘り込みの埋土を切って設置された埋設土器。三位。底部穿孔無し。口縁部に焼熱した石直出土。土坑埋土を切る(重複させる)点。石皿を伴う点で、RZ16に共通。



RZ13

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや弱。炭化物径(径2～5mm)散見。
2. RA40 埋土。1層に同じ。
- (3). VI層土。



(6) 溝 跡

RG01溝跡 (第189～190図、写真図版144・145)

〔位置・検出状況〕北東部、I A 22 u～I A 25 s グリッドに位置する。北側に下る斜面のⅢ～Ⅵ層上面において、黒褐色土の明瞭な帯状範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は14.8m、幅は60～250cm前後、底面までの残存深度は50cmである。走行方向はN-32°-Eである。底面には径40cm前後の不整形の凹みがほぼ等間隔に連続している。

〔埋土と堆積状況〕Ⅱ～Ⅲ層土に類似する黒色土を主体とする。埋土には暗灰色粒子（刈屋スコリア）をやや多く含む部分が認められる。流水等によって二次的に流れ込んだものと見られる。底面の凹みは極めて堅く締まった灰色の粘土質シルトで埋まっており、凹みの埋土の上面が溝本体の底面となっているようである。この連続凹部は何らかの掘方などではなく、自然（水成）堆積によって埋没したものとと思われる。底面の形態や埋土はRG06によく似ている。

〔重複遺構〕RG02に併走・重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

RG02溝跡 (第189～191図、写真図版144・145)

〔位置・検出状況〕北東部、I A 22 t～I A 24 s グリッドに位置する。北側に下る斜面のⅢ～Ⅵ層上面において、黒褐色土の明瞭な帯状範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は9.6m、幅は60～270cm、底面までの残存深度は70cmである。走行方向はN-23°-Eである。底面には径40cm前後の不整形の凹みがほぼ等間隔に連続している。

〔埋土と堆積状況〕Ⅱ～Ⅲ層土に類似する黒色土を主体とする。埋土上部には刈屋スコリアと見られる暗灰色スコリア層（2 a 層）とその下に灰黄色火山灰層（2 b 層）の堆積が認められる。この下の黒色土層（3層）にも暗灰色スコリアの混入が認められることから、これらは流水等による二次的堆積と考えられる。底面の凹みは極めて堅く締まった灰色の粘土質シルトで埋まっており、凹みの埋土の上面が溝本体の底面となっているようである。この連続凹部は何らかの掘方などではなく、自然（水成）堆積によって埋没したものとと思われる。

〔重複遺構〕RG01に併走・重複し、これに切られている。

〔遺構の時期〕刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

〔出土遺物〕

土器（473）（第229図、写真図版175）。

竈状石器（2122）。

RG03溝跡 (第189～191図、写真図版145)

〔位置・検出状況〕北東部、I A 21 r～I A 23 q グリッドに位置する。北側に下る斜面のⅢ層上面において、黒褐色土の不明瞭な帯状範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は10.4m、幅は150cm前後、底面までの残存深度は68cmである。走行方向はN-13°～27°-Eである。

〔埋土と堆積状況〕Ⅱ～Ⅲ層土に類似する黒色土を主体とする。埋土最上部に暗灰色スコリア（刈屋スコリア）を多量に含む土層（B-B'：1層）の堆積が認められる。隣接するRG01・RG02に比して壁

面が壁や底面がはつきりせず、自然の流水による痕跡（雨裂）の可能性はある。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕層位的関係性から、10世紀以降に構築され、刈屋スコリアの降下時（1686年）にはほぼ埋没を終えていたものと考えられる。

〔出土遺物〕

土器（474～480）〈第229図、写真図版175〉。

円盤状土製品（1268）。

碗状石器（2123）。

敲磨器類（2704）。

R G04溝跡（第189・191～193図、写真図版146）

〔位置・検出状況〕中央東部、II A 1 t～II A 4 s グリッドに位置する。V a 層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は15.4m、幅は90～210cm、底面までの残存深度は26cmである。走行方向はN-26°-Eである。東壁に段を持ち、これに対応する堆積層の不整合が観察されることから、2条が重複していると考えられる。

〔埋土と堆積状況〕埋土はII～III層土に類似する黒色土を主体とする。断面A-A'の4・5層は底面直上から検出面まで厚く堆積した刈屋スコリアである。断面の様相から降下時に堆積したものと判断される。東側には同位置へ再構築されたと思われる新期の溝跡（2・3層）が併走し、4・5層を切っている。

〔重複遺構〕無し。RG07に併走している。

〔遺構の時期〕新期（2・3層）が刈屋スコリアの降下後、旧期（4・5層）が降下前と考えられる。

〔出土遺物〕

土器（481）〈第229図、写真図版175〉。

R G05溝跡（第189・193図、写真図版147）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 q～II A 9 p グリッドに位置する。V a～VI層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は11.4m、幅は25～110cm、底面までの残存深度は44cmである。走行方向はN-12°-Eである。

〔埋土と堆積状況〕V a 層類似の黒褐色土を主体とする。上部は下部の埋土のみ残存しているものと思われる。

〔重複遺構〕なし。RG06に併走している。

〔遺構の時期〕類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

〔出土遺物〕

磨製石斧（2313）

R G06溝跡（第189・193図、写真図版147）

〔位置・検出状況〕南東部、II A 7 q～II A 8 q グリッドに位置する。V a～VI層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。

〔規模・形状〕 検出した全長は6.9m、幅は45～80cm、底面までの残存深度は14cmである。走行方向はN-2°-Eである。底面には径30～40cmの不整形な浅い凹みが連続している。

〔埋土と堆積状況〕 上部を削平され埋土の最下部のみ残存しているものと思われる。断面に記録したのは底面の凹みの部分で、極めて強く締まった灰色の粘土質シルトで埋まっており、RG01の底面に良く似ている。

〔重複遺構〕 なし。RG06に併走している。

〔遺構の時期〕 類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

R G07溝跡（第189・191・192図、写真図版146）

〔位置・検出状況〕 中央東部、II A 1 t～II A 3 t グリッドに位置する。V a 層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。

〔規模・形状〕 検出した全長は9.1m、幅は35～95cm、底面までの残存深度は22cmである。走行方向はN-23°-Eである。

〔埋土と堆積状況〕 V a 層類似の黒褐色土を主体とする。上部は下部の埋土のみ残存しているものと思われる。

〔重複遺構〕 無し。RG04に併走している。

〔遺構の時期〕 類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。

R G08溝跡（第189・192図）

〔位置・検出状況〕 東端部、I A 24 v～I A 25 u グリッドに位置する。VI層上面において不連続で不明瞭な帯状範囲として検出された。

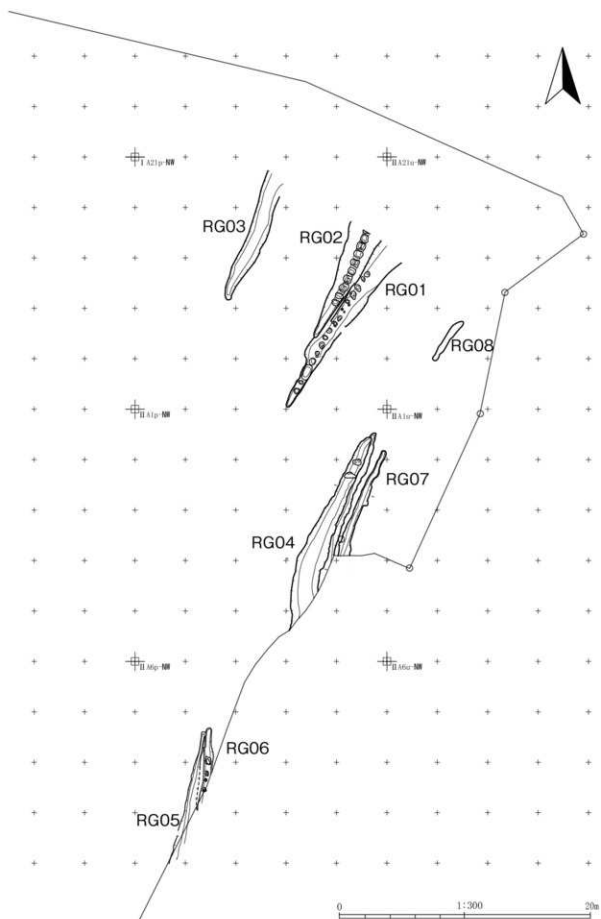
〔規模・形状〕 検出した全長は3.8m、幅は50cm、残存深度は5cm弱である。走行方向はN-36°-Eである。溝跡の最低部が痕跡的に残存したものとみられる。下端を把握できなかったため、範囲のみ図示した。

〔埋土と堆積状況〕 V a 層類似の黒褐色土を主体とする。上部は下部の埋土のみ残存しているものと思われる。

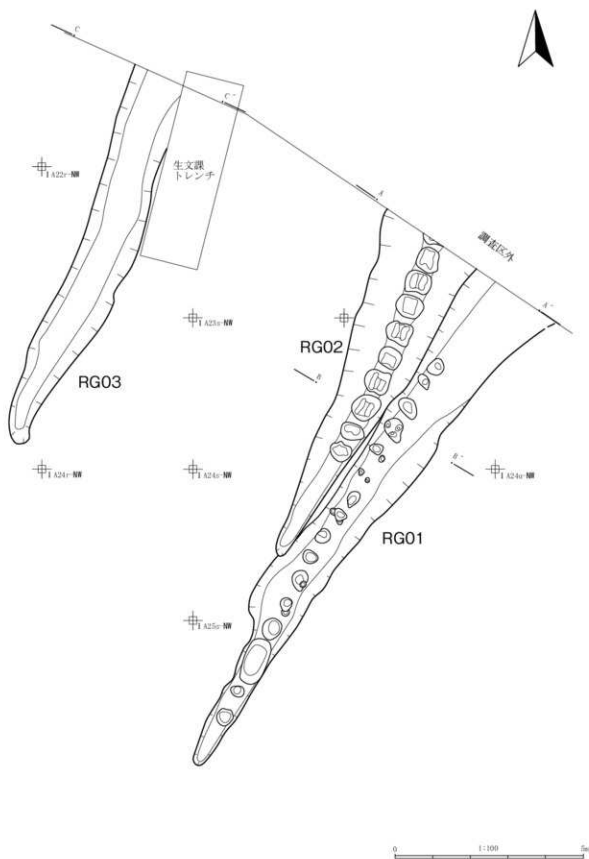
〔重複遺構〕 なし。

〔遺構の時期〕 類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

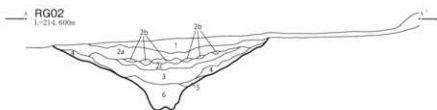
〔出土遺物〕 掲載可能な遺物は出土しなかった。



第189図 RG溝跡全体図 (RG01 ~ 08)



第190図 RG01～03平面



RG02

1. 101K2/2 黒褐色。砂質シルト。粘性無し。しまりやや密。にぶい黄褐色土塊 3%混入。
- 2a. 7. 101K2/1 黒褐色。火山灰。粘性無し。しまり稀。黒褐色土 (7. 101K2/2) (50%混入) (スコリア)。
- 2b. 2. 101K2/2 暗灰黄色。火山灰。粘性無し。しまり稀。粉状のウツラスが局所で散在している。
- 2c. 101K2/1 黒色。火山灰。粘性無し。しまり稀。φ2-3mmのスコリアで閉るものとシャリシャリしている。
3. 101K1/7/1 黒色。砂質シルト。粘性無し。しまりやや密。黄褐色土塊 3%混入。(2cほどではないが)シャリシャリしている)
4. 101K2/3 暗褐色。にぶい黄褐色。シルト。粘性無し。しまり稀。黄褐色土塊 10%。黒褐色土塊 3%混入。
5. 101K4/8 褐色。粘土質シルト。粘性やや有り。しまりやや密。暗褐色土で占められている。
6. 101K3/1/3 黒褐色。シルト。粘性やや有り。しまり密。黄褐色土塊 5%。粉状鉄塊 3%混入。(若本層序には見られないやや灰色の土層)



RG03

1. 101K2/2 黒褐色。火山灰。粘性無し。しまり稀。φ2-3mmのスコリア層。101K3/2 黒褐色火山灰塊 (粉状) 10%混入。
2. 7. 101K2/1 黒色。シルト。粘性無し。しまりやや密。にぶい黄褐色土塊 3%。φ3-5mmの黄粒軽石 1%。φ1mmの軽石 3%混入。上部の面には粉状の影響を受けてキメコシしている部分のみみられる。
3. 101K2/2 黒褐色。シルト。2層よりは粘性有るがほどと無い。しまりやや密。にぶい黄褐色土塊 7%。φ2-3mmの軽石 1%混入。



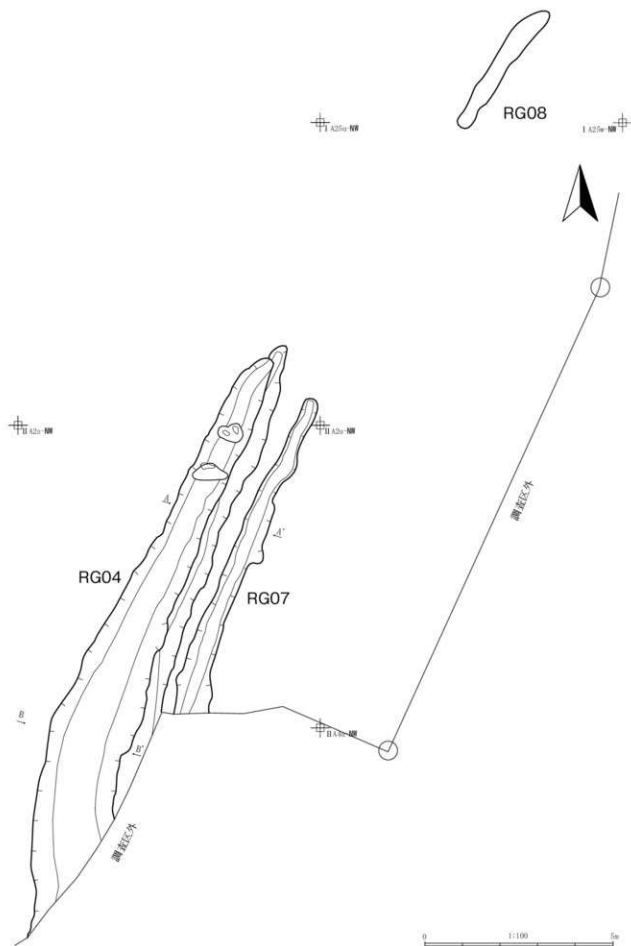
RG04・RG07

1. 101K2/3 黒褐色。シルト。粘性やや有。締まり密。上部に暗色粘土質兼含む。全体にVh層類似の褐色土ブロック含む。
2. 101K3/2-2/3 黒褐色。シルト。何層スコリア (暗灰色スコリア) やや多。5層に似た粗粒のものが主体。締まりやや有。
3. 101K3/2 黒褐色。シルト。何層スコリアやや多。4層に似た粗粒のものが主体。やや黄味帯びる。締まりやや有。4・5層の崩落土?)
4. 101K4/2-2/3 灰黄緑～暗褐色。何層スコリア (粗粒) の層。締まり密。ゴツゴツと固結全体に黄味。
5. 101K2/1 黒色。何層スコリア (粗粒) の層。乾きやすく 101K4/1 褐色土となる。固結しているが、ガラガラと崩落に陥れる。
6. 101K2/2 黒褐色。シルト。底面直上のガリガリの硬面層。
- (7). 101K2/2 黒褐色。シルト。6層に似るが硬化していない。溪の側縁にのみみられる。

- ※ 1: RG07 埋土。2～7: RG04 埋土。RG04は、他の遺構 (溝状遺構) によく似るが、底面の凹凸のみみられない。
RG07は当初埋土の層かと思ったが、RG04に平行しており、同様の遺構の可能性有。

0 1:50 2m

第191図 RG02～04・07断面



第192図 RG04・07・08平面



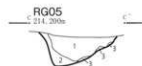
RG04

- 109K2/1 黒色、シルト、粘性無し、しまり疎、φ2-3mmの黒色スコリア20%混入。
- 109K3/2 黒褐色、火山灰、粘性無し、しまり疎、粉状のテフラがうみ状に堆積している（水成堆積か）、一部では褐色色を呈す。
- 109K2/1 黒色、火山灰、粘性無し、しまり疎、黒褐色（109K2/3）土塊10%混入、φ2-3mmのスコリアで散置すると褐色色を呈す。
- 109K2.5/3 黒褐色・暗褐色、シルト、粘性無し、しまりやや密、褐色軽石1%混入。
- 109K4/6 褐色、シルト、粘性無し、しまり密、焼土粒1%、明黄褐色軽石1%混入、最下部に黒褐色土が薄く層状に堆積している。



RG06

- 109K2/3 黒褐色、シルト、粘性無し、しまり疎、ガチガチにかたい、黄褐色土灰をまばらに含む。
- 109K2/3 黒褐色、シルト、粘性やや有り、しまり無し、未炭化。
- 109K4/4 褐色、粘土質シルト、粘性やや有り、しまり有り、少くなくはまる。
- 109K3/2 黒褐色、シルト、粘性無し、しまり有り、1層よりも厚味ぬける。



RG05

- 7, 109K3/2 黒褐色、シルト、粘性無し、しまりやや密、黒褐色（109K2/2）土塊5%、黒色（7, 109K2/1）土塊3%、褐色（109K4/6）土塊2%、φ1-2mmの褐色軽石1%混入。
- 109K3/3 暗褐色、シルト、粘性やや有り、しまり疎、褐色（109K4/6）土が塊50%、黒色（109K2/3）土塊5%混入。
- 7, 109K5/6 明褐色、ローム、粘性やや有り、しまり疎、モソモソしている、硬固浮土層。

平面 0 1:100 5m

断面 0 1:50 2m

第193図 RG04（断面）・05・06

(7) その他の遺構

R Z13立石 (第188図、写真図版143)

〔位置・検出状況〕南東部、II A 8mグリッドに位置する。住居跡RA40の検出面において、この埋土を上方から切って立ち上がる礎として検出された。

〔規模・形状〕柱穴状ピットの上部に棒状(長楕円形)の礎を立てて据えたものである。ピットの開口部径は25cm前後、残存深度は35cmである。礎の大きさは長さ30cm・太さ12cmほどである。

〔埋土と堆積状況〕ピットの内部にはV a層土と見られる黒褐色土が堆積している。礎はこの埋土上部に下半部を埋められ、直立するように据えられている。礎の基底部がピット底面から大きく浮いている状況から、礎の設置を目的にピットが掘削されたのではなく、半埋没状態のピットに礎が据えられたように思われる。このような礎の設置状況は、住居跡RA86に伴う溝状掘り込みの埋土最上部に据えられた礎とよく似ている。

〔重複遺構〕RA40を切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。

〔出土遺物〕

自然礎 (2838)